山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第278集

御坂中丸遺跡（みさかなかまる）

ー山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書ー

２０１１.３

山梨県教育委員会
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第二七八集

御坂中丸遺跡

二〇一一・三

山梨県教育委員会
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構

御坂中丸遺跡

（みさかなかまる）

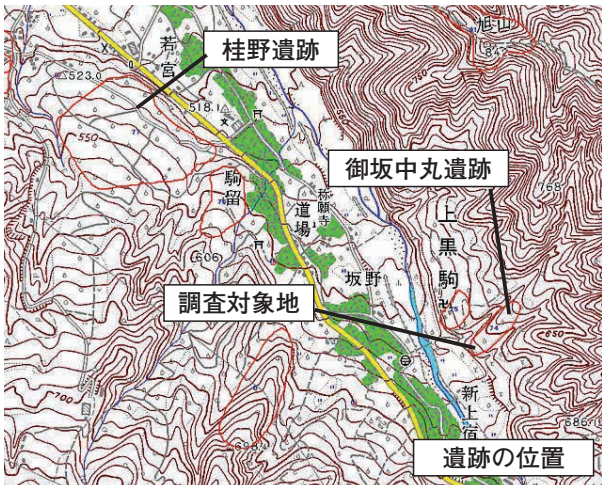
－山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書－

２０１１.３

山梨県教育委員会
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構

御坂中丸遺跡のあらまし

遺跡遠望



御坂中丸遺跡は笛吹市御坂町上黒駒地区にあります。今回の調査では、遺跡の西側部分が調査の対象となり、平成21・22年度の2回にわたって調査が行われ、多くの土坑が検出されました。遺物は、県内でも珍しい縄文時代早期の土器片が出土しました。なお、大正6年に日本考古学史上有名な「黒駒の土偶」が発見され、現在、東京国立博物館に収蔵されています。

また、金川を挟んで1.5Kmほど離れた距離にある縄文時代中期を主体とした桂野遺跡からは、中期中葉井戸尻式土器や中期後半曽利式土器のほか、土偶や人面把手なども発見されています。

第一次調査

Ⅰ区完掘状況

Ⅱ区完掘状況

Ⅱ区の調査風景

平成21年度に実施された第一次調査は、約2,000㎡が対象範囲となりました。調査の結果、縄文時代の多くの土坑や土器類が発見されました。

第５号土坑

直径約１mの大きさで、扁平な自然石が２石並べて置かれています。葬送や信仰を想定させるものです。

第14号土坑

上側で「朝顔形」に開いていく形状をしており、深く底部も確認できなかったことから、土坑というより中近世以降の井戸跡と考えられます。

縄文時代早期の土器

縄文時代早期の土器片が多く見つかりました。この土器は、富士吉田市古屋敷遺跡より出土した早期第Ⅳ群土器と呼ばれるものに類似しています。県内では、笛吹市境川町机遺跡・寺平遺跡に同じ土器を見ることができます。

石鏃

石器類

第二次調査

Ⅴ区遠景（東から）

Ⅴ区の調査風景

1号集石土坑

平成22年度に実施された第二次調査は、約350㎡が対象範囲となりました。調査の結果、東側の谷に堆積した黒色土中から、縄文時代の集石土坑2基や土器・石器が発見されました。

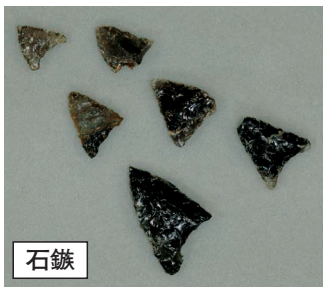
土坑の中にたくさんの焼けた石が充填されていました。底には平らな石が敷いてあり、炭化材も残っていました。蒸焼きや石焼きなどの調理を行った場所と考えられます。

2号集石土坑

東側の谷部

縄文時代早期の土器

第一次調査と同様に、縄文時代早期の土器片が多く見つかりました。


石鏃

序　文

本書は、山梨リニア実験線建設に伴う御坂中丸遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

「中丸遺跡」という遺跡は県下５ヶ所もあり、混乱を防ぐため「御坂中丸遺跡」としたことをお断りしております。

御坂中丸遺跡は、笛吹市御坂町上黒駒地区にあり、今回の調査地点より東側に向かって広がりをみせている遺跡です。この遺跡は、大正６年に縄文時代中期の三ツ指をした奇異な土偶（黒駒の土偶）が発見された遺跡として古くから人々に周知されております。

今回の発掘調査は、平成21年６月から11月と平成22年12月の二箇年度に渡る期間を要し、その間の基礎的整理作業と、その後の本格的整理作業を経て本書の刊行に至りました。

調査の結果、多数の土坑やピットが確認されました。また、遺物は縄文時代の土器片が検出されております。中でも、特筆されるものとして縄文時代早期の富士吉田市古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器があげられます。この土器の形は、砲弾型を呈する、いわゆる尖底深鉢型土器で、早期後半の野島式に併行し山梨県から長野県諏訪方面に似た形態がみられる地域的独自性の強い土器群として位置付けがなされています。県内での出土は笛吹市境川町の机遺跡や寺平遺跡に類例をみることができます。

今回の調査によって、以上のような成果が得られたことは、御坂中丸遺跡のある金川上流域での遺跡分布や縄文時代早期資料の追加など欠くことのできない歴史データとなることは間違いないものでしょう。

末筆ではありますが種々のご協力ご助言を賜りました関係機関各位および関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成23年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　　小　野　正　文

例　言

1　本書は山梨県笛吹市御坂町上黒駒地内に所在する御坂中丸遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構から山梨県教育委員会が委託を受け山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したものである。

3　発掘調査期間および整理作業期間は以下のとおりである。

【第一次調査】	発掘調査	平成21年６月10日～９月７日
	基礎的・本格的整理作業	平成21年12月１日～平成22年３月28日
【第二次調査】	発掘調査	平成22年12月１日～12月27日
	基礎的・本格的整理作業	平成23年１月６日～３月25日

4　本書の執筆・編集は山梨県埋蔵文化財センターの吉岡弘樹・小林健二・皆川賢司・小林万里子が担当した。第４章付編１AMS年代測定・炭化材同定については、（株）加速器分析研究所に委託した。また第４章付編２植物圧痕同定については、山梨県立博物館　中山誠二氏にお願いした。

5　遺構写真・調査風景写真は吉岡・小林（健）・皆川・小林（万）が撮影した。

6　報告書掲載遺物写真は吉岡・小林（健）が撮影した。

7　発掘調査における世界測地系座標測量・グリッド杭設定・標高杭設定については株式会社昭和測量に委託した。

8　Ｖ区の鳥瞰写真等航空写真については（株）東京航業研究所に委託した。

9　発掘調査および整理作業においては次の方々・機関にご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

独立行政法人鉄道建設運輸施設整備支援機構・銭高/アイサワ/北野共同企業体・財団法人堀内浩庵会フジヤマミュージアム・富士急行株式会社・笛吹市教育委員会・笛吹市御坂町坂野区・御坂リニア対策協会・株式会社昭和測量・有限会社手塚建材興業・株式会社輿石運送土木

宮澤健一（財団法人堀内浩庵会フジヤマミュージアム）

塚越　剛（富士急行株式会社不動産事業部）

小渕忠秋・伊藤修二・内田裕一・野崎　進・瀬田正明・望月和幸・大木丈夫（笛吹市教育委員会）

10　本遺跡に関わる出土品および記録図面・写真類などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

11　遺跡名については、笛吹市境川町に本遺跡と同名の「中丸遺跡」があり、双方ともに山梨リニア実験線建設に伴って発掘調査が実施されたことから、混乱を招く可能性も大きいと考え、本遺跡の名称は『御坂中丸遺跡』として、差別化を図った。

凡　例

1　本報告書の挿図等に関する指示は下記のとおりである。なお、主要遺構・遺物の挿図縮尺は基本的に次に示すとおりであるが、資料の大きさなどにより適宜、変化を持たせてある。また、ドットマークなどその他の指示については、図中に示してある。

遺構	全体図・遺構配置図：１／200　　土坑・ピット：１／40	
	集石土坑：１／20	
遺物	土器類および拓影：１／２　１／３	石器類：１／１　１／２　１／３
	土製品類：１／２	金属製品：１／２

目　次

序文
御坂中丸遺跡のあらまし
例言・凡例
目次

第１章　調査の経緯と組織…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の組織…… 1
　第３節　山梨リニア実験線の概要…… 2

第２章　遺跡の概観…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3

第３章　平成21年度調査の概要…… 6
　第１節　調査の方法と基本層序…… 6
　第２節　発見された遺構と遺物…… 8
　第３節　まとめ……17

第４章　平成22年度調査の概要……44
　第１節　調査の方法と基本層序……44
　第２節　発見された遺構と遺物……44
　第４節　まとめ……45
　付編１……57
　付編２……59

写真図版……61

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 5
第２図　調査区画図…… 7

第一次調査
第３図　基本層序観察地点……18
第４図　基本層序柱状図……18
第５図　Ⅰ区土坑・ピット配置図……19
第６図　Ⅱ区土坑・ピット配置図……20
第７図　第１～４号土坑平・断面図……21
第８図　第５～13号土坑平面図……22
第９図　第５～13号土坑断面図……23
第10図　第14～22号土坑平面図……24
第11図　第14～22号土坑断面図……25
第12図　第23号土坑平・断面図……26
第13図　第24～27号土坑平・断面図……27
第14図　第27～29・62・63号土坑平・断面図……28
第15図　第30～34・64～71号土坑平面図……29
第16図　第30～34・64～71号土坑断面図……30
第17図　第35～46号土坑・第31号ピット平面図……31
第18図　第35～46号土坑・第31号ピット断面図……32
第19図　第47～51・61号土坑・第27号ピット平・断面図……33
第20図　第52～60号土坑・第43号ピット平面図……34
第21図　第52～60号土坑・第43号ピット断面図……35
第22図　遺物実測図（１）……36
第23図　遺物実測図（２）……37
第23図　遺物実測図（３）……38
第24図　石器実測図……38
第二次調査
第25図　Ⅴ区全体図・土層図……50
第26図　Ⅴ区出土遺物分布図……51
第27図　Ⅴ区第１・２号集石土坑平・断面図……52
第28図　Ⅴ区出土土器実測図（１）……53
第29図　Ⅴ区出土土器実測図（２）……54
第30図　Ⅴ区出土土器実測図（３）……55
第31図　Ⅴ区出土土器実測図（４）・石器実測図 …56

第１章　調査の経緯と組織

第１節　調査に至る経緯

リニア実験線は昭和52年に宮崎県に本格的設備が開設され、平成９年から技術開発を山梨へ移し、先行区間18.4㎞で車両開発や電力供給装置や列車のコントロール装置、完全管理システム等の開発実験を行ってきた。平成19年１月、JR東海の山梨実験線建設計画などを国土交通大臣が承認したことから、一般区間の工事が平成25年度完成を目指して行われている。その距離は先行区間も含め総延長42.8㎞に延伸となり、これを受けて試掘・確認調査が行われ、本線部分や仮設道路建設地にある周知の埋蔵文化財の発掘調査が実施されることとなった。

今回の発掘調査対象地は、御坂山地に源流を持ち急峻に笛吹川に下る金川の右岸にある山腹のなだらかな西向きの斜面（遺跡西端部標高約590m）に位置しており、金川を挟んで大栃山が遺跡地を凝視している。当地のやや甲府盆地方向にやや下った地域には桂野遺跡などの縄文時代遺跡が点在している。そして当該地は、「黒駒の土偶」の名称で知られる奇異な表情の三本指を持つ土偶が大正６年に発見された遺跡として古くから知られている「中丸遺跡」の範囲内にあたり、埋蔵文化財保護措置が必要となるため、平成19年度に実施された試掘調査結果などに基づいた協議の結果、事前の発掘調査を行うこととなった。その後、学術文化財課と独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部の間で複数の協議が実施され、予算積算作業などがなされ山梨県埋蔵文化財センターによって、平成21年度に発掘調査および基礎的・本格的整理作業を実施し、平成22年度に報告書を刊行することとなった。さらに、平成21年４月27日に現地協議を行った後、平成21年６月10日から９月７日まで発掘調査を実施することが決定された。また、平成21年12月１日から平成22年３月28日まで基礎的・本格的整理作業を実施した。一方、平成22年度には工事用道路建設に伴う調査が計画され、４月９日、11月５日の現地協議を経て、第二次調査として平成22年12月１日から27日まで発掘調査を行い、翌平成23年１月６日から３月25日まで基礎的・本格的整理作業を実施し、第一次調査と併せて本書を作成した。

なお、法的な手続きは以下に示す。

【第一次調査】

平成21年６月10日

文化財保護法第99条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を山梨県教育委員会教育長に提出

平成21年９月11日

文化財保護法第100条第２項の規定により埋蔵文化財発見の通知を笛吹警察署長に通知する。

【第二次調査】

平成22年12月１日

文化財保護法第99条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を山梨県教育委員会教育長に提出

平成23年１月６日

文化財保護法第100条第２項の規定により埋蔵文化財発見の通知を笛吹警察署長に通知する。

第２節　調査の組織

調査主体　山梨県教育委員会

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当

【第一次調査】

発掘調査／基礎的・本格的整理作業

主査・文化財主事　吉岡弘樹

主査・文化財主事　皆川賢司

発掘作業員（短期間非常勤嘱託職員）

発掘調査・重機運転・土砂運搬

村田勝利

発掘調査

石田洋一・伊藤知子・今津武男・大森ふじの・岡部豊雄・小澤正臣・北野礼子・五味　護・齋藤里美・坂口　正・佐々木富士子・中沢　保・長澤菊男・花輪賢一・原田隆邦・原田みゆき・深山邦夫・松原静夫・望月幸次・望月太喜雄・望月敏子

基礎的・本格的整理作業

梶原初美・平川涼子

【第二次調査】

発掘調査／基礎的・本格的整理作業

主査・文化財主事　　小林健二

副主査・文化財主事　小林万里子

発掘作業員（臨時職員・短期間非常勤嘱託職員）

発掘調査

浅川悠起子・雨宮久美子・出月正敏・大島功一・小松一吉・野呂瀬英臣・平賀正起・深沢茂子

基礎的・本格的整理作業

土井みさほ

第３節　山梨リニア実験線の概要

1962年（昭和37年）から始まった国鉄（現JR）によるリニアモーターカーの開発は、10年後の1972年（昭和47年）に、200mの実験線で実験車がはじめて浮上走行に成功した。

1977年（昭和52年）には、宮崎県に本格的な実験線が開設され、ここでの実験により、1979年（昭和54年）、無人走行の最高速度517km／hの記録が樹立された。21世紀の鉄道として脚光をあびるリニアモーターカーは、1997年（平成９年）から技術開発の場を山梨県都留市へ移し、車両開発のほか、電力供給装置や車両のコントロール装置、完全管理システム等の開発を行っている。山梨リニア実験線での成果として、2003年（平成15年）には、有人走行による581km／hを記録し、2005年（平成17年）３月には、国土交通省の超電導磁気浮上式鉄道実用技術評価委員会から「技術開発は大きく前進し､超電導磁気浮上式鉄道について実用化の基盤技術が確立したと判断できる」と評価された。

2007年（平成19年）１月、JR東海の山梨実験線建設計画などを国土交通大臣が承認し、一般区間24.4kmの延長工事が2013年度（平成25年度）完成をめざし行われている。それにより、実験線を42.8kmに延伸し、設備も実用仕様に変更するとともに長大編成車両によるトップスピードでの長距離走行や長大トンネルの走り抜けなどの技術的テーマへの対応や保守体系の確立など、超電導リニアの実用化に向けた確認試験を行うことが計画されている。

第２章　地理的歴史的環境

第１節　地理的環境

御坂中丸遺跡のある笛吹市は2004年10月12日に東八代郡石和町、御坂町、一宮町、八代町、境川村及び東山梨郡春日居町が合併して発足した市である。その後、2006年８月１日に東八代郡芦川村を編入して現在に至っている。笛吹市は甲府盆地の中央部やや東寄りに位置しており、東は甲州市及び大月市に、西は甲府市、北は山梨市、南は富士河口湖町と接している。

本遺跡が所在する旧御坂町は笛吹市の南西部にある。東西約16㎞、南北約４㎞で、面積は約64㎢の大きさである。また、山梨県を国中地方と郡内地方に分断する御坂山塊の北西斜面に立地し八町峠に源を発する金川と、神有東方三ツ沢より発する天川などによって複合扇状地を形成している。金川扇状地は、甲府盆地の陥没によってできた断層崖下に、金川が運んできた土砂が堆積してできたもので、盆地東南縁の扇状地のうちで最も規模の大きいものである。一方、天川扇状地は山麓に近い部分を旧御坂町が占めており、傾斜は金川扇状地より急峻である。旧御坂町の地質は、山地の大部分は花崗岩類及び御坂層からなり、一部に小仏層、泥岩層、ローム層が見られる。また、平地はその上方の岩層の砕屑物からなっている。

また、当地の土地の約70％を山林が占めている。排水が良好で地層が深いという扇状地の特質から、広く桑が栽培され、明治以降の養蚕の振興につながっている。また、昭和30年代以降は養蚕に代わり、モモやブドウの果樹経営が盛んとなり、現在は耕地の69％が果樹地帯へと農業形態を変容させた。

人口約13,000人の多くは二之宮や成田などの石和町に近い御坂町の南東部に集中する傾向をみせている。町内には国道20号・137号が通じ、中央自動車道の一宮御坂インターチェンジが近い。

御坂町の古道について簡単に振り返ると、金川の谷に沿って上り、御坂峠を越え、河口に出て籠坂峠を過ぎる御坂道があげられる。御坂道は古来重要な交通路であり、それと相まって、御坂町は古代における甲斐国の政治、文化の中心地であったことが窺われる。

第２節　歴史的環境

御坂中丸遺跡（１）周辺の縄文時代の遺跡として、三光遺跡（２）・花鳥山遺跡（３）・桂野遺跡（４）・諏訪の原遺跡（５）・豆塚遺跡（６）・釈迦堂遺跡群（７）などがあげられよう。

山梨県の縄文時代遺跡の集中する地域として、甲府盆地縁辺部と八ヶ岳山麓、桂川流域の3地域に大きく分けることができる。御坂中丸遺跡は、３地域の一つである甲府盆地縁辺部の、曽根丘陵から盆地東部の扇状地上に集中して存在した遺跡群の一つだと考えられる。

三光遺跡（２）は、中丸遺跡から西へ５㎞ほど離れた浅川の形成した扇状地の扇頂部付近にあたる標高427ｍ付近に所在する。昭和49年から50年にかけて発掘調査され、縄文時代中期中葉～後葉の竪穴状遺構、集石遺構、土坑、縄文時代後期前葉～後葉に属する土坑および配石遺構などが発見されている。遺構の中でも多数を占めるのは土坑であり、出土した遺物のあり方などから土坑墓的な性格を伺い知ることができる。この中でも、色濃い特色としてあげられるものとして、大形の底部穿孔土器や深鉢形土器の大破片が折り重なって出土した例が特筆される。さらに、縄文時代晩期の土偶や土器も出土している。また、縄文時代中期後葉の土器片と一緒に硬玉製大珠が検出され、当時の人々を驚かせている。

縄文時代前期の遺跡として著名な花鳥山遺跡（３）は、中丸遺跡より西に４㎞ほど離れた御坂山塊から甲府盆地に向かって北西方向に舌状に張り出した丘陵上の標高500ｍ付近にある。ここでは、約5,000年前の集落の跡が検出されている。特に昭和62年に行われた、山梨県教育委員会の調査では、対象面積810㎡の中で24軒の住居跡が検出されると共に、極めて大量の土器が出土している。これらの土器の主体は前期後半の諸磯式土器であるが、早期中葉の押型文土器や早期末～前期初頭の含繊維土器も出土している。また、わずかに中期・後期の土器も見つかって

おり長期間に渡り当地に人々が生活していた様子が伺われる。石器類では狩猟の象徴的道具である石鏃が多数見つかっている。一方で、植物採取活動（または栽培）に係わる象徴的な道具である打製石斧、石皿、磨石、凹石も多数検出されており、本遺跡において、採集・栽培活動が盛んに行われていたことが想定でき、これらを裏付けるようにドングリ・クリ・クルミの堅果類や球根類、栽培食物のエゴマなどが検出されている。

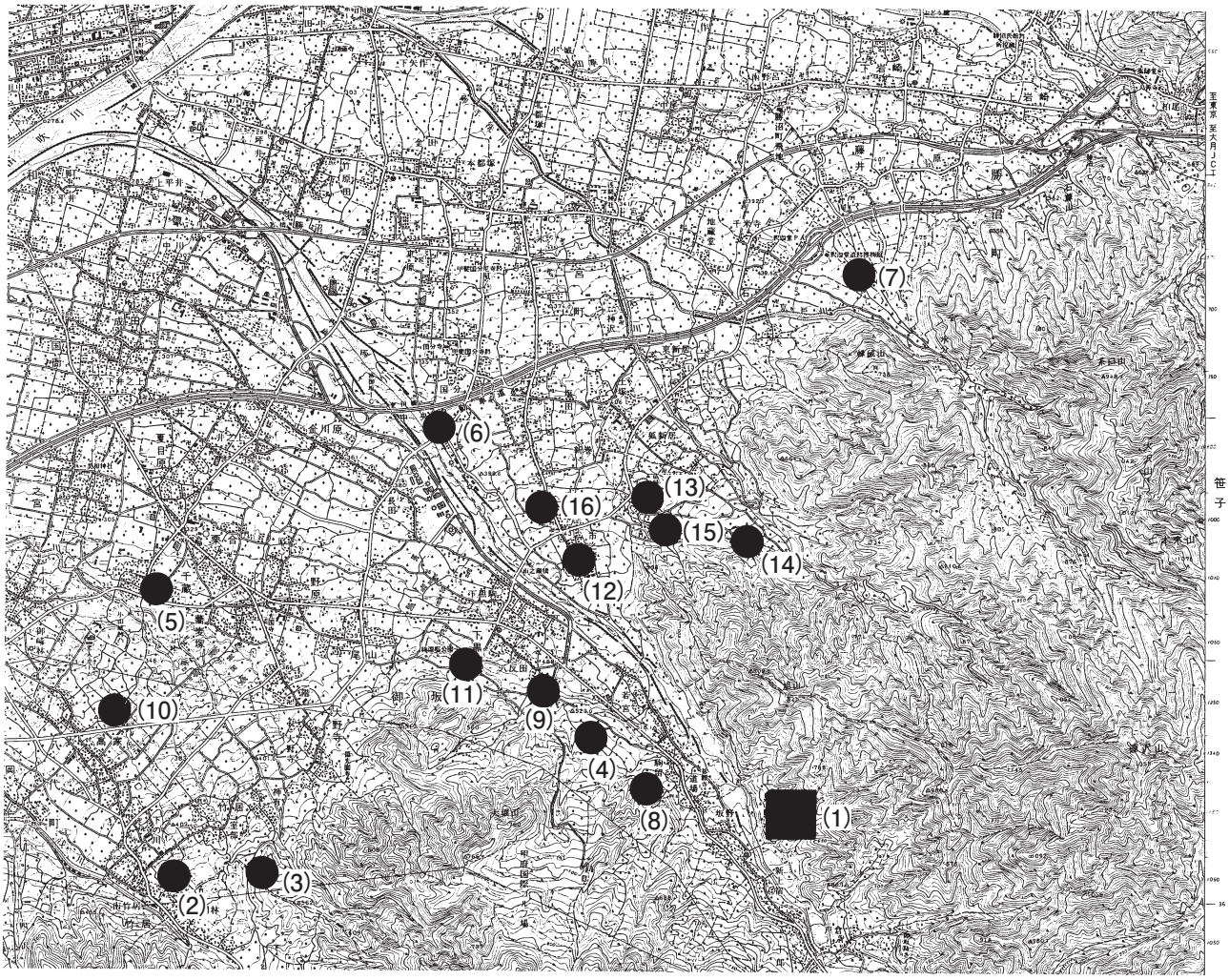
桂野遺跡（４）は金川の左岸にあり、御坂中丸遺跡とは金川を挟んで1.5㎞ほど離れた距離にある。標高約500ｍの金川の扇状地上に占地している縄文時代中期を主体とした遺跡である。縄文時代中期中葉井戸尻式土器や中期後半曽利式土器のほか、土偶や人面把手なども検出されている。

諏訪の原遺跡（５）は御坂中丸遺跡より4.5㎞ほど北西の八千蔵地区にある通称諏訪の原にある。本遺跡は、扇状地上を流れる天川の浸食作用で細長く帯状に発達した右岸の段丘上に立地している。遺跡の標高は約315ｍで、花鳥山遺跡や桂野遺跡の500ｍ前後と比べると低い環境にあることが分かる。出土した土器は、桂野遺跡出土土器に類似した縄文中期の勝坂式系、阿玉台式系、加曽利Ｅ式系が主体となっており、当遺跡は、縄文中期の最盛期からその終わりにかけて栄えた遺跡の一つであることが想定できる。

豆塚遺跡（６）は御坂中丸遺跡より約４㎞北北西の金川扇状地の扇央部に立地している。標高は約370ｍを測る。縄文時代の住居跡は、晩期前半の清水天王山式期のもので、郡内地域以外では初めて確認された。その住居跡は、直径3.5ｍ、短径2.7ｍの小形長方形を呈しており炉は検出されていない。住居跡内からは清水天王山式土器を中心に同時期の関東・東北系の土器群が出土している。

御坂中丸遺跡の北方には、釈迦堂遺跡群（７）がある。地形の上では京戸川扇状地の扇央部の甲州市と笛吹市の境界（標高約450ｍ）に占地している。縄文時代を主体とし旧石器時代から平安時代にわたる遺跡である。調査区域は約二万平方メートルに及ぶ。本遺跡は、塚原北Ａ、塚原北Ｂ、釈迦堂、三口神平、野呂原の五地区からなる遺跡群としてとらえられている。発見された住居は縄文時代早期末～前期初頭38・前期20・中期241以上・後期３を数える。特に塚越北Ａ地区から発見された早期神之木台式期～下吉井式期の27軒の住居や土坑が集中する中央広場を８軒の住居が取り巻いている中期藤内式期の集落、三口神平地区の200を超える中期の住居や800基を数える土坑のあり方などは縄文時代の集落の構造や変遷を考える上で良好な資料となっている。また、三口神平地区を中心に土偶が多く出土しており、1988年に1,116点が国の重要文化財に指定され、その後、2005年には土器・石器4,483点が追加指定されている。これらの他に、古墳が１基、祭祀的な色合いが強い鉄製人形（県指定）を出土した奈良時代の小竪穴遺構、それに平安時代の住居なども検出されている。

御坂中丸遺跡に近接した位置の遺跡としては、他に「駒留小丸遺跡（８）」「屋戸林遺跡（９）」「横堰Ｂ遺跡（10）」「八反田遺跡（11）」「横田遺跡（12）」「山王下遺跡（13）」「箕石遺跡（14）」「天狗平遺跡（15）」「三瀬農遺跡（16）」などが縄文遺跡として『山梨県遺跡地図』に掲載されている。



御坂中丸（1）　三光（2）　花鳥山（3）　桂野（4）　諏訪の原（5）　豆塚（6）
釈迦堂（7）　駒留小丸（8）　屋戸林（9）　横堰B（10）　八反田（11）　横田（12）
山王下（13）　箕石（14）　天狗平（15）　三瀬農（16）

地図1/50,000

第1図　遺跡位置図

第３章　平成21年度調査の成果

第１節　調査の方法と基本層序

第１項　調査の方法

１．調査区とグリッドの設定（第２図）

調査は笛吹市御坂町上黒駒6209-1他の調査対象地の約2,000㎡に４箇所の調査区を設定した。

グリッドの設定は近接して発掘調査されている地点の遺構との関係が容易に判断できるように世界測地系座標に基づいた５ｍに設定した。

また、本遺跡では調査区が4箇所に及んでいるため混乱を来さないよう順次北から南に向かってアルファベット大文字［A］から［K］まで、西から東方向はアラビア数字を［１］から［13］まで付した。グリッドの呼称は５ｍ間隔で正方形に設置された杭の北東隅の杭の名称をグリッド名とすることとした。

２．遺構掘削と記録方法

調査地点では、近隣での果樹経営や笛吹市道の道幅が狭く、コンクリート敷き簡易舗装であり、重機の進入によって影響が生じることが容易に想定できたことから、通常、表土剥ぎに使用する大型重機の進入が不可能であった。このため３トン未満の小型重機に平爪バケットを装着し表土の除去を行った。

遺構確認面までは、試掘・確認調査の成果を基に目視による土層観察及び精査を実施しながら総合的に土壌の除去深度を決定し、重機により掘削深度を決定した。それより下層についての掘り下げは人力によってグリッド単位で遺構・遺物の把握に努めた。プランの判明した遺構に対しては土層堆積確認用のベルトを適宜設け平面・断面図等の図面作成を行った。図面は、当該遺跡がほぼ平坦で傾斜が少ないことから、調査後の図面整理が容易なことを考慮し、遣り方測量を基本とした。また、危険深度まで達するような遺構については安全確保の観点から総ての調査終了後、埋め戻し時に安全確認を行った上で重機による断ち割り写真撮影をすることで対応することを基本的な考えとして調査にあたることとした。

記録写真は一眼レフカメラによる35㎜モノクロおよびリバーサルフィルム撮影のほかデジタルカメラ、ネガカラーフィルムによる撮影を基本とし、必要に応じて中判カメラによる撮影も行うこととした。

第２項　基本層序

調査区地表面の標高は最高地点はH－13区付近で約591m、最も低い地点はJ－５区付近で約586.5mを測りおおよそ4.5mの比高差を有している。

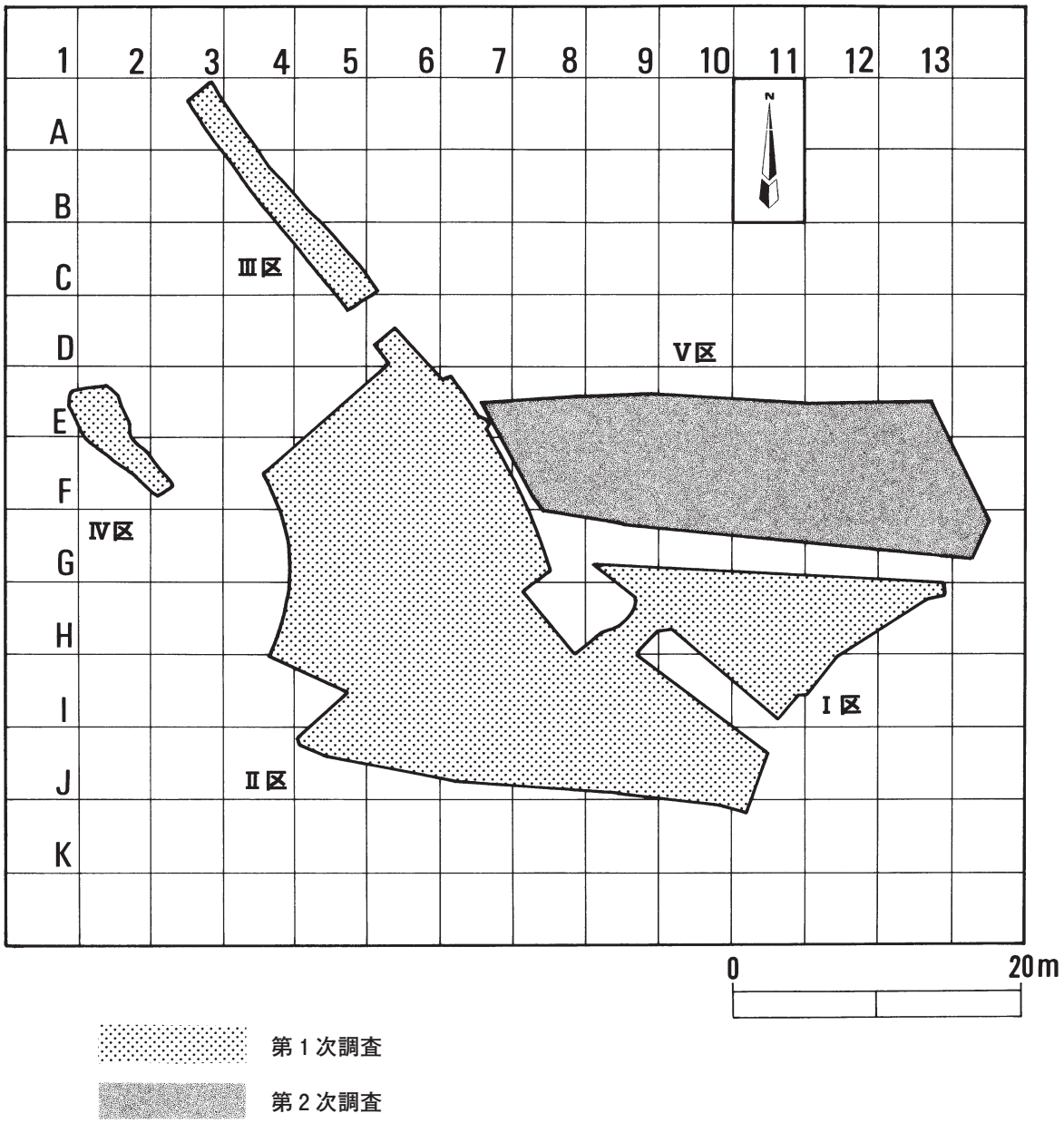
基本層序は調査区が横長なため土層堆積状況の良好な箇所を４地点［a～d地点］を選定し調査終了後の埋め戻し直前に、深掘りを実施し観察することとした。以下がその結果である。

［ａ地点］

Ｉ－12区にあたる。約50㎝の厚い耕作土層（第１層）の下に、上方から流入してきたと想定させる摩滅のひどい遺物を包含する第２層（黄茶褐色土）が約20㎝堆積している。その下層にある第３層（淡黄褐色土）では、遺物の検出はなく１～３㎝の角礫が多く混入し約20㎝の堆積を見せている。さらにその下層には、地山層である暗黄褐色のローム質土（第４層）が観察された。当層はさらに３層に細分できる。第４－１層（厚約50㎝）では、粘性・しまり共に強く１㎝以下の角礫がやや多く含まれている。第４－２層（厚約30㎝）は、基本的に第３－１層と同じであるが角礫の包含される量が多い。第４－３層（厚30㎝以上）では１㎝の角礫の他に大型礫が所々に混入している。

［ｂ地点］

G－９区において観察した。調査対象地の標高が最も高い第Ｉ区にある。約50㎝の厚い耕作土（第１層）の下に、


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
N
Ⅲ区
Ⅴ区
Ⅳ区
Ⅰ区
Ⅱ区
0
20m
第１次調査
第２次調査

第２図　調査区画図

僅かに遺物が混入する第６層（淡茶褐色土）、第７層（暗黄褐色土）と続く。さらに下層には、ａ地点で観察された第２層があるが、こちらでは遺物の混入は認められなかった。

［ｃ地点］

ｃ地点（Ａ－３区）は、調査対象地の北端部に当たる。ここでは、ａ地点と類似する堆積を観察することができた。約60㎝の厚い耕作土の下、暗黄褐色土層（第２層）が確認された。さらに、その下層には、暗黄褐色ローム質土（４－３層）がある。

［ｄ地点］

当地点（Ｃ－５区）では、約30㎝の厚さの耕作土の下に、他の地点と同様に暗黄褐色土層（第２層）が観察されたが、ここでの堆積状況は10㎝以下と薄い。その下方では３層に分層できる第４層（暗黄褐色ローム質土）、５層（黄褐色ローム質土）と続く堆積が確認できた。ａ地点とほぼ同様の堆積であると思われる。

第２節　発見された遺構と遺物

第１項　土坑（第５・７・８図）

土坑は調査対象地の第Ⅰ・Ⅱ区から、合計71基が検出された。

第１号土坑（第５・７図）

Ｈ－12区より検出された。おおよそ半分が調査対象地外にあり、上縁･坑底ともに楕円形状をとるものと思われる。底面の状況は平坦である。坑内より４石ほどの礫が検出されている。壁の状況は確認されている箇所のみではあるが緩傾斜をもって立ち上がっている。各部の法量は、推定長軸100㎝、深度48㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第２号土坑（第５・７図）

Ｈ－12・13区より検出された。第３号土坑と連結しており、平面形状の上縁は、ほぼ楕円形状をとっている。坑底は、円形を呈していて平坦である。壁は、急傾斜をもって立ち上がっている。法量は、短軸55㎝・深度77㎝を測る。長軸の法量は不明である。坑内からの遺物の出土は無かった。

第３号土坑（第５・７図）

Ｈ－12区から第２号土坑と連結した状態で確認された。形状は、上縁・坑底ともに楕円形状をとる。坑底は平坦で壁は垂直に立ち上がっている。規模は短軸54㎝、深度54㎝である。長軸の法量は不明である。遺物の出土は縄文土器片が１点出土しているが時期の判断できるものでは無く、図示し得ない。

第４号土坑（第５・７図）

Ｈ－12区から確認された。第８号PITと連結しており、北側の一部分が調査区外に伸びている。形状は、上縁・坑底ともに不整形状をとるものと推測される。坑底は平坦で壁は垂直に立ち上がっている。規模は短軸80㎝、深度60㎝である。なお、長軸の法量は不明である。遺物の出土は縄文時代中期の深鉢型土器片が２点出土している。

第５号土坑（第５・８・９図）

Ｈ－11区から確認された。北西側に近接して第６号土坑が検出されている。形状は、上縁・坑底ともに隅丸長方形状をとっている。坑底は平坦で壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。規模は長軸108㎝、短軸83㎝、深度86㎝を測る。坑内上面からは約40㎝ほどの自然石２石が蓋状に検出されている。遺物の出土は無かった。

第６号土坑（第５・８・９図）

Ｈ－11区から確認された。南東方向に近接して第５号土坑が検出されている。形状は、上縁・坑底ともに楕円形状をとっている。坑底は平坦で壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。規模は、長軸93㎝、短軸85㎝、深度57㎝を測る。遺物は、縄文時代早期押型文と中期初頭五領ヶ台式深鉢形土器片がそれぞれ１点ずつ出土している。

第７号土坑（第５・８・９図）

Ｈ－11区から確認された。南方向において第８号土坑と連結しており、北側は試掘トレンチにより削平されている。形状は、不整形と想定できる。坑底は平坦で南側に小ピットを有している。壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。規模は、長軸・短軸共に不明である。なお、深度51㎝を測る。遺物は、縄文時代中期中葉井戸尻式の土器片が２点出土している。

第８号土坑（第５・８・９図）

Ｈ－11区から確認された。東側には、第７号土坑が切り合っている。北側は、試掘トレンチにより削平されている。形状は、検出された部分が少ないが、不整形と想定できよう。壁は急傾斜を持って立ち上がっている。規模は、長軸・短軸共に不明で深度28㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第９号土坑（第５・８・９図）

Ｈ－11区から確認された。四方を第６・７・10・11・12・13号土坑に囲まれている。形状は上縁・坑底共に楕円形を呈しており、壁は、平坦な坑底より垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。規模は、長軸95㎝、短軸75㎝、深度64㎝を測る。遺物は、縄文時代前期終末と推される矢羽根状文が付された土器片が１点出土している。

第10号土坑（第５・８・９図）

Ｈ－11区に位置している。北西側に第９号土坑、西側に第11号土坑がある。形状は上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底はほぼ平坦で、壁はやや急峻に立ち上がっている。規模は、長軸90㎝、短軸68㎝、深度40㎝を測る。遺物は、無文の縄文土器片が１点出土している。

第11号土坑（第５・８・９図）

Ｈ－11区に位置している。北側に第９号土坑が近接している。形状は上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は平坦で、緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸130㎝、短軸86㎝を測り、深度は23㎝と浅い。遺物の出土はない。

第12号土坑（第５・８・９・10図）

Ｈ－10区において確認された。東方に第９・11号土坑が、北側に第13号土坑が隣接している。形状は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸99㎝、短軸75㎝を測り、深度は25㎝と浅い。遺物の出土は無かった。

第13号土坑（第５・８・９・10図）

Ｈ－10・11区において確認された。形状は上縁・坑底共に隅丸方形を呈しており、坑底は平坦である。壁は、垂直に近い角度を持って立ち上がっている。規模は、長軸146㎝、短軸135㎝と大きく、深度は75㎝と深い。遺物の出土は無い。

第14号土坑（第５・10・11図）

Ｈ－10区において確認された。おおよそ、半分が調査区外に伸びているため、平面形について上縁部は楕円形を呈していると推測できよう。深度が深いため坑底の状況は把握できない。規模は、長軸が190㎝である。壁の立ち上がりは、垂直に近い傾きから上縁に向かうにつれ、緩やかに開口していく、いわゆる朝顔状とすることができる。当土坑は、その状況から井戸の可能性があるものと思われる。遺物の出土は無かった。

第15号土坑（第５・10・11図）

Ｈ－10区において確認された。西側に近接して第17号土坑が占地している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底の状況は礫が検出されているため判断に苦しむ。壁は、垂直に近い傾斜で直線的に伸びる。規模は、長軸71㎝、短軸60㎝、深度85㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第16号土坑（第５・10・11図）

Ｇ－10区において検出された。西側には第20号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底の状況は、面積が狭いながらも、ほぼ平坦で壁は、急角度で伸びていく。規模は、長軸60㎝、短軸53㎝、深度45㎝を測る。遺物の出土は無い。

第17号土坑（第５・10・11図）

Ｈ－10区において検出された。西側に第18・19号土坑が、北東に第15号土坑がある。平面形は上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。規模は、長軸69㎝、短軸66㎝、深度55㎝を測る。遺物は磨製石斧が１点出土している。

第18号土坑（第５・10・11図）

Ｈ－10区において検出された。西側にて第19号土坑と接している。平面形は､上縁･坑底共に楕円形を呈している。坑内には拳大ほどの自然石が混入している。坑底は平坦で壁はなだらかに上縁に向かっている。規模は､長軸75㎝､短軸63㎝、深度28㎝を測る。遺物は、縄文時代中期初頭五領ヶ台式の深鉢形土器片と縄文中期の土偶の脚部が１点ずつ出土している。

第19号土坑（第５・10・11図）

Ｈ－９・10区に跨って検出された。東側で第18号土坑と接している。平面形は上縁･坑底共に楕円形を呈している。坑内には人頭大の自然石が混入している。坑底は平坦に近く、壁はなだらかに上縁に開口していく。長軸62㎝、短軸56㎝、深度25㎝を測る。遺物の出土は無かった。

第20号土坑（第５・10・11図）

Ｇ－９・10区に跨って検出された。西側に第21号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に円形に近い楕円形と見ることができよう。坑内には拳大から約30㎝ほどの自然石が多く混入されていたことから、坑底の状況は不明である。壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がる形状をしている。規模は、長軸66㎝、短軸56㎝、深度45㎝を測る。遺物の出土は無かった。

第21号土坑（第５・10・11図）

Ｇ－９区より検出された。東側に第20号土坑が位置している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形状をしている。坑内には大小の自然石が多く混入しており、第20号土坑と様相が類似している。坑底の状況は、上記のことなどか

ら判断に苦しむが平坦と見て良さそうである。壁はやや急角度で立ち上がっている。規模は、長軸83cm、短軸65cm、深度28cmを測る。遺物の出土は無かった。

第22号土坑（第５・10・11図）

G－９区に位置している。僅かではあるが北側調査区外に上縁部が伸びている。坑内に大振りな自然石の混入があるものの、平面形は上縁・坑底共に楕円形とみることができる。坑底は平坦で、壁は垂直に近い角度で直線状に立ち上がっている。その規模は、短軸75cm、深度43cmを測る。遺物の出土は無かった。

第23号土坑（第６・12図）

I－９区に位置している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は、ほぼ平坦で壁はやや急角度で上縁に向かって開口していく。規模は、長軸78cm、短軸48cm、深度42cmを測る。遺物の出土は無い。

第24号土坑（第６・13図）

I－８区において検出された。平面形は上縁・坑底共にほぼ楕円形状をとっている。坑底の状況は、南東方向に向かって傾斜している。壁は、西側ではややなだらかに、東側では急角度で開口している。規模は、長軸90cm、短軸72cm、深度52cmを測る。なお、遺物の出土は無い。

第25号土坑（第６・13図）

I－７・J－７区に跨って検出された。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底は、東側から西側に向かって傾斜している。壁は、西側では急傾斜、東側ではなだらかに立ち上がっていく。規模は、長軸63cm、短軸60cm、深度35cmを測る。遺物の出土は無い。

第26号土坑（第６・13・14図）

I－７区において検出された。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は、ほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がっていく。規模は、長軸64cm、短軸57cm、深度51cmを測る。遺物の出土は無い。

第27号土坑（第６・13・14図）

I－７区において検出された。東側に第26号土坑、南西に第28号土坑が近距離に位置している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は、ほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がっていく。規模は、長軸70cm、短軸61cm、深度46cmを測る。遺物は、縄文時代後期前葉の堀之内式の土器片が１点出土している。

第28号土坑（第６・13・14図）

I－７区において検出された。左右を第27・29号土坑に挟まれる位置にある。坑内には拳大ほどの自然石が混入されていた。平面形は、上縁が隅丸方形、坑底は楕円形をとっている。坑底は西から東に向かって傾斜を持っている。壁は、やや急傾斜で開口している。規模は、長軸55cm、短軸52cm、深度24cmを測る。なお、図示し得る遺物の出土はなかった。

第29号土坑（第６・14図）

I－７区に位置している。第27・28号土坑と直列に並んだ状況で検出された。平面形は、上縁・坑底共に円形に近い楕円形を呈している。坑底は平坦で壁は緩い傾斜での立ち上がりを持つ。規模は、長軸70cm、短軸62cm、深度27cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第30号土坑（第６・15・16図）

Ｉ－６区に位置している。北に第31号土坑、西に第33・34号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は若干東側に傾斜を持っている。壁はやや急傾斜で立ち上がっている。規模は、長軸92㎝、短軸73㎝、深度37㎝を測る。遺物の出土は無かった。

第31号土坑（第６・15・16図）

Ｉ－６区に位置している。南側に第30号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈しており、坑底は僅かに傾斜がみられるものの、ほぼ平坦といって良いだろう。壁は、やや傾斜を持って立ち上がる。規模は、長軸88㎝、短軸78㎝、深度29㎝を測る。出土遺物としては、後期前葉堀之内式と推される微隆帯上に刺突列のある土器片が１点出土している。

第32号土坑（第６・15・16図）

Ｉ－５区に位置している。南側の至近距離に第33・34号土坑がある。平面形は、楕円形もしくは不整形となるものと思われる。坑底は西向きに傾斜を持っている。壁は、緩やかな傾斜で開口していく。その規模は、長軸95㎝、短軸推定40㎝、深度21㎝を測る。遺物の出土は無かった。

第33号土坑（第６・15・16図）

Ｉ－５区に位置している。西側に近接して第34号土坑がある。平面形は上縁・坑底共にほぼ円形に近い楕円形を呈している。坑底は面積が狭いものの平坦で、壁は概ね45度の角度で開口している。規模は、長軸65㎝、短軸59㎝、深度25㎝を測る。遺物の出土は無い。

第34号土坑（第６・15・16図）

Ｉ－５区において確認された。東側に近接して第33号土坑がある。平面形は上縁・坑底共にほぼ円形に近い楕円形を呈している。坑底は平坦で、壁はやや緩い傾斜で立ち上がっていく。規模は、長軸73㎝、短軸70㎝、深度15㎝を測る。遺物の出土は無かった。

第35号土坑（第６・17・18図）

Ｆ－４区において検出された。北東方向の至近距離に第36号土坑が位置している。平面形は上縁・坑底共に楕円形状をとる。坑内からは30㎝以上の自然石が確認されている。坑底は、西方向に傾斜を持たせており、壁はやや急角度で開口して行く。その規模は、長軸111㎝、短軸81㎝、深度59㎝を測るものである。遺物は、縄文時代中期初頭五領ヶ台式１点・後期前葉堀之内１式２点の計３点の土器破片資料が出土している。なお、後期前葉堀之内１式の内、１点は粗製土器である。

第36号土坑（第６・17・18図）

Ｆ－４・５区に跨って検出された。南西に第35号土坑がある。北側の一部分は調査区外に伸びている。上縁・坑底共に不整円形を呈するものと推測される。坑底は平坦ではなく、やや丸みを帯びた形状をし、さらに小ピットが２箇所に認められる。壁は西側では急峻に、東側ではなだらかに開口していく。規模は、短軸109㎝、深度57㎝を測るものである。遺物は、波状口縁で隆帯を持つ後期前葉堀之内１式の土器破片資料が１点出土している。

第37号土坑（第６・17・18図）

Ｆ－５区より検出された。南側に第38・39号土坑が近接して存在する。平面形は上縁・坑底共に楕円形状を示し

ている。坑内からは30㎝以下の自然石が多く検出されている。坑底は僅かに傾斜しているが平坦と言っても良いものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。その規模は、長軸77㎝、短軸61㎝、深度45㎝を測るものである。遺物の出土は無い。

第38号土坑（第６・17・18図）

Ｆ－５区より検出された。北に第37号土坑が、北東に第39号土坑が確認されている。平面形は上縁・坑底共に円形に近い楕円形状をとっている。坑底はほぼ平坦で壁は垂直に近い傾斜で立ち上がっていく。規模は、長軸92㎝、短軸81㎝、深度40㎝を測るものである。遺物の出土は無い。

第39号土坑（第６・17・18図）

Ｆ－５区より検出された。北西に第37号土坑が、南西に第38号土坑が存在する。平面形は上縁・坑底共に円形に近い楕円形状をとっている。坑内には30㎝程の自然石が混入されている。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に近い傾斜で立ち上がっていく。規模は、長軸87㎝、短軸80㎝、深度40㎝を測るものである。遺物の出土は無い。

第40号土坑（第６・17・18図）

Ｆ－５・Ｇ－５区に跨って検出された。南側に第41号土坑が、北側に第38号土坑が位置している。平面形は上縁・坑底共に円形に近い楕円形状をとっている。坑内には拳大から50㎝程の自然石が多く混入されている。坑底は平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっている。規模は、長軸153㎝、短軸140㎝、深度45㎝を測る大型の土坑である。遺物は、縄文時代中期初頭五領ケ台式の沈線が施文されている土器片が１点出土している。

第41号土坑（第６・17・18図）

Ｇ－４・５区に跨って検出された。北側に第40号土坑がある。平面形は、上縁はほぼ円形に近く、坑底は楕円形状である。坑底に自然石があるため形状は平坦ではなく丸みを帯びているように推定できる。壁は、非常に緩やかに上縁に向かって開口している。規模は、長軸71㎝、短軸70㎝を測り、深度は16㎝と浅い。遺物の出土は無かった。

第42号土坑（第６・17・18図）

Ｇ－５区より検出された。北側に第43号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に円形に近い楕円形状をとる。坑底に大型の自然石があるが平坦であることが理解できる。壁は、やや急傾斜で開口している。規模は、長軸97㎝、短軸85㎝、深度43㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第43号土坑（第６・17・18・19図）

Ｇ－５区より検出された。南西に第42号土坑、東に第45号土坑、北東に第44号土坑が近接している。坑底は平坦で、壁は北側では急峻に、南側では緩やかに開口していく。平面形は上縁は楕円形、坑底では不整形状をしている。規模は、長軸105㎝、短軸100㎝と大型で深度は51㎝を測る。遺物は、沈線を持つ縄文時代後期前葉堀之内１式の土器片が１点出土している。

第44号土坑（第６・17・18・19図）

Ｇ－５区より検出された。南方向に第42・43・45号土坑が近接して存在する。平面形は上縁・坑底共にほぼ楕円形を呈している。坑内下部より約20㎝の自然石が検出されている。壁は、やや緩い角度をもって立ち上がりを見せる。規模は、長軸80㎝、短軸65㎝、深度31㎝を測る。なお、遺物の出土は無い。

第45号土坑（第６・17・18・19図）

Ｇ－５区より検出された。北に第44号土坑が、西に第43号土坑が近接している。平面形は上縁はほぼ円形に近い楕円形を呈している。坑底の状況は自然石が混入しているため不明である。壁の立ち上がりはなだらかに開口している。規模は、長軸61㎝、短軸55㎝、深度26㎝を測る。遺物は、縄文時代中期後半曽利Ⅲ～Ⅳ式の深鉢形土器破片が１点出土している。

第46号土坑（第６・17・18・19図）

Ｆ－５区より検出された。北西部でピットと接続している。東及び北東に第47・48号土坑が近接している。平面形は上縁・坑底共に不整円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっていく。規模は、長軸78㎝、短軸76㎝、深度22㎝を測る。遺物は、出土していない。

第47号土坑（第６・17・19図）

Ｆ－５区において確認された。近接して第46・48号土坑が位置している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がりをみせている。規模は、長軸65㎝、短軸58㎝、深度32㎝を測る。なお、遺物は出土していない。

第48号土坑（第６・17・19図）

Ｆ－５区において確認された。第46・47号土坑と近接した位置で検出された。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がっている。規模は、長軸62㎝、短軸60㎝、深度31㎝を測る。なお、遺物は出土していない。

第49号土坑（第６・17・19図）

Ｆ－５区において確認された。第50・51号土坑と直列に並んだ状態で検出された。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がっている。規模は、長軸101㎝、短軸87㎝、深度26㎝を測る。なお、遺物は出土していない。

第50号土坑（第６・17・19図）

Ｆ－５区において確認された。第49・51号土坑と直列に並んだ状態で検出された。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がっている。規模は、長軸83㎝、短軸80㎝、深度30㎝を測る。なお、遺物は出土していない。

第51号土坑（第６・19図）

Ｆ－５・６区において確認された。第49・50号土坑と直列に並んだ状態で検出された。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がっている。規模は、長軸86㎝、短軸68㎝、深度25㎝を測る。遺物の出土は無い。

第52号土坑（第６・20・21図）

Ｅ－６区にて検出された大型の土坑である。近接して、北に第54号土坑が、南東から東方向に第53・59号土坑が確認されている。平面形は、上縁・坑底共に不整楕円形を呈している。坑底は平坦で、壁はやや角度を付けて開口している。規模は、長軸185㎝、短軸140㎝と大きく深度は46㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第53号土坑（第６・20・21図）

Ｅ－６区にて検出された土坑である。近接して、第52・59号土坑が確認されている。平面形は、上縁・坑底共に不整形を呈している。坑底は平坦で、壁はやや角度を付けて開口している。規模は、長軸103㎝、短軸72㎝、深度40㎝を測る。なお、遺物の出土は無い。

第54号土坑（第６・20・21図）

Ｅ－６区において検出された。南側には第52号土坑がある。平面形は、上縁･坑底共に円形に近い楕円形状をとっている。坑底は平坦で、壁は角度を付けて開口している。規模は、長軸75㎝、短軸59㎝、深度26㎝を測る。なお、遺物は縄文時代後期前葉堀之内１式の土器片が１点出土している。

第55号土坑（第６・20・21図）

Ｄ－６区において検出された。遺構の半分以上が調査区外にあるため、平面形は楕円形状をとっていると推定するしかない。坑底からは２基のピットが検出されている。規模は、長軸82㎝、深度は49㎝としか計測できない。遺物の出土は無かった。

第56号土坑（第６・20・21図）

Ｄ－６区において第57･58号土坑と直線に並ぶ位置に検出された。遺構の西側の一部分が調査区外に伸びるため、平面形は上縁・坑底共に楕円形状と推定している。底には約20㎝の自然石が混入している。また、坑底はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、短軸89㎝、深度34㎝を測る。なお、長軸は不明である。また、遺物の出土は無かった。

第57号土坑（第６・20・21図）

Ｄ－６区にて、検出された。第56・58号土坑と直線に並ぶ。平面形は上縁・坑底共に楕円形状をとる。坑底は平坦であるが、北側から南方向に向けて傾斜しており、壁はやや角度を持って立ち上がっていく。規模は、長軸71㎝、短軸53㎝、深度30㎝を測る。なお、遺物の出土は認められなかった。

第58号土坑（第６・20・21図）

Ｅ－６区にて検出され、第56・57号土坑と直線に並んでいる。坑内にはは拳大の自然石が混入されていた。平面形は上縁・坑底共に楕円形状をとっている。坑底は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸59㎝、短軸46㎝を測り、深度は20㎝と浅い。坑内からは、条線を持つ縄文時代中期後半曽利Ⅳ式の深鉢形土器の破片が１点出土している。

第59号土坑（第６・20・21図）

Ｅ－６区にて検出された。周囲からは第52・53号土坑などが検出されている。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底は丸底で、壁は上縁に向かって緩やかな立ち上がりをみせている。規模は、長軸61㎝、短軸58㎝、深度28㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第60号土坑（第６・20・21図）

Ｅ－６区において検出された。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底は北から南に向かって傾斜している。壁は、やや角度を持って立ち上がっていく。規模は、長軸76㎝、短軸73㎝、深度42㎝を測る。遺物の出土は無い。

第61号土坑（第６・19図）

Ｆ－６区において確認された。平面形は、上縁・坑底共に円形を呈している。坑内には、拳大から約60㎝の角礫が混入されている。坑底は平坦で、急傾斜で上縁に向かって立ち上がっている。規模は、長軸102㎝、短軸101㎝、深度35㎝を測る。遺物の出土は無い。

第62号土坑（第６・14図）

Ｈ－６区において確認された。南側には近接して第63号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑内には拳大の角礫が僅かに混入されている。坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸62㎝、短軸58㎝、深度23㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第63号土坑（第６・14図）

Ｈ－６区において確認された。北側には近接して第62号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に楕円形状を呈している。坑底はほぼ平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっている。規模は、長軸67㎝、短軸58㎝、深度25㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第64号土坑（第６・15・16図）

Ｇ－５・Ｈ－５区において確認された。平面形は、上縁・坑底共に楕円形状を呈している。坑底は平坦で壁は急傾斜で立ち上がっていく。坑内には拳大から約30㎝の角礫の混入がみられる。規模は、長軸130㎝、短軸103㎝、深度40㎝を測る。遺物の出土は無い。

第65号土坑（第６・15・16図）

Ｈ－５・６区において検出された。平面形は、上縁・坑底共に楕円形状を呈している。坑底は平坦で壁は急傾斜で立ち上がっていく。坑内には拳大から約40㎝の角礫の混入が多量にみられる。規模は、長軸130㎝、短軸92㎝、深度は56㎝を測る。遺物の出土は無い。本土坑は礫の混入状況から土坑ではなく撹乱の可能性も捨てきれない。

第66号土坑（第６・15・16図）

Ｈ－６区において検出された。西側には近接して第67号土坑がある。平面形は上縁・坑底共に円形を呈している。坑底は平坦で壁は急角度で立ち上がっている。規模は、長軸69㎝、短軸61㎝、深度40㎝を測る。遺物の出土は無かった。

第67号土坑（第６・15・16図）

Ｈ－６区において検出された。東側には近接して第66号土坑がある。平面形は上縁・坑底共に円形を呈している。坑底は平坦で壁は急角度で立ち上がっている。規模は、長軸95㎝、短軸81㎝、深度43㎝を測る。なお、遺物の出土は無かった。

第68号土坑（第６・15・16図）

Ｈ－５・６及びI－５・６区に跨って検出された。平面形は上縁は楕円形、坑底は不整形を呈している。坑底の状況は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸122㎝、短軸105㎝、深度27㎝を測るやや大振りの土坑である。遺物は、隆帯が施された縄文時代中期後半曽利Ⅳ式にあたる深鉢形土器の破片が１点出土している。

第69号土坑（第６・15・16図）

I－５区において検出された。平面形は上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底の状況は平坦で壁はやや急

角度で立ち上がっていく。規模は、長軸65㎝、短軸63㎝、深度43㎝を測る。遺物は縄文と沈線がある縄文時代中期初頭五領ヶ台式深鉢形土器片が１点出土している。

第70号土坑（第６・15・16図）

Ｉ－５区において検出された。南側に第69号土坑、南西方向に第71号土坑が近接して位置している。平面形状は円形を呈している。なお、坑底面の形状は不明である。壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸63㎝、短軸58㎝、深度25㎝を測る。本土坑には大小の自然石が多量に混入していることから、撹乱の可能性が大である。遺物は縄文時代早期打越式の土器片が１点出土している。

第71号土坑（第６・15・16図）

Ｈ－５・Ｉ－５区において検出された。東方に第69・70号土坑が位置している。平面形は上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸104㎝、短軸60㎝、深度30㎝を測る。遺物の出土は無い。

第２項　ピット（第５・６・７・８・10・12・14・15・17・18・19・20・21図）

ピットは、調査対象地の第Ⅰ・Ⅱ区より44基が検出されている。覆土中に遺物が包含されているものは無いため構築時代を検証することは難しい。

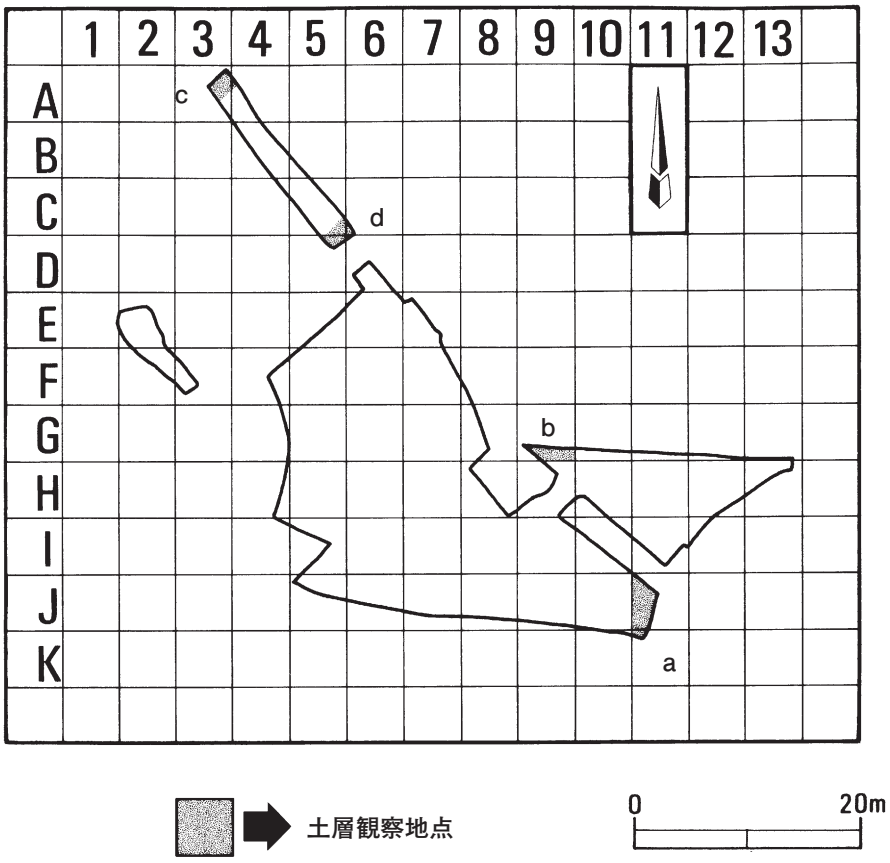
第３節　まとめ

本遺跡は、金川右岸の支谷である相沢の台地上に立地している。相沢を挟んで東側の台地を中丸、西側の台地を上の山と呼び、どちらの台地にも縄文時代の遺跡が認められるが、普通、両方を一括して中丸遺跡と呼んでいるが笛吹市境川町にも同名の中丸遺跡があり、差別化するために今回の調査では、御坂中丸遺跡とした。この中丸遺跡からは大正６年に日本考古学史上非常に有名な「黒駒の土偶」が発見されており、現在は、東京国立博物館に収蔵されている。

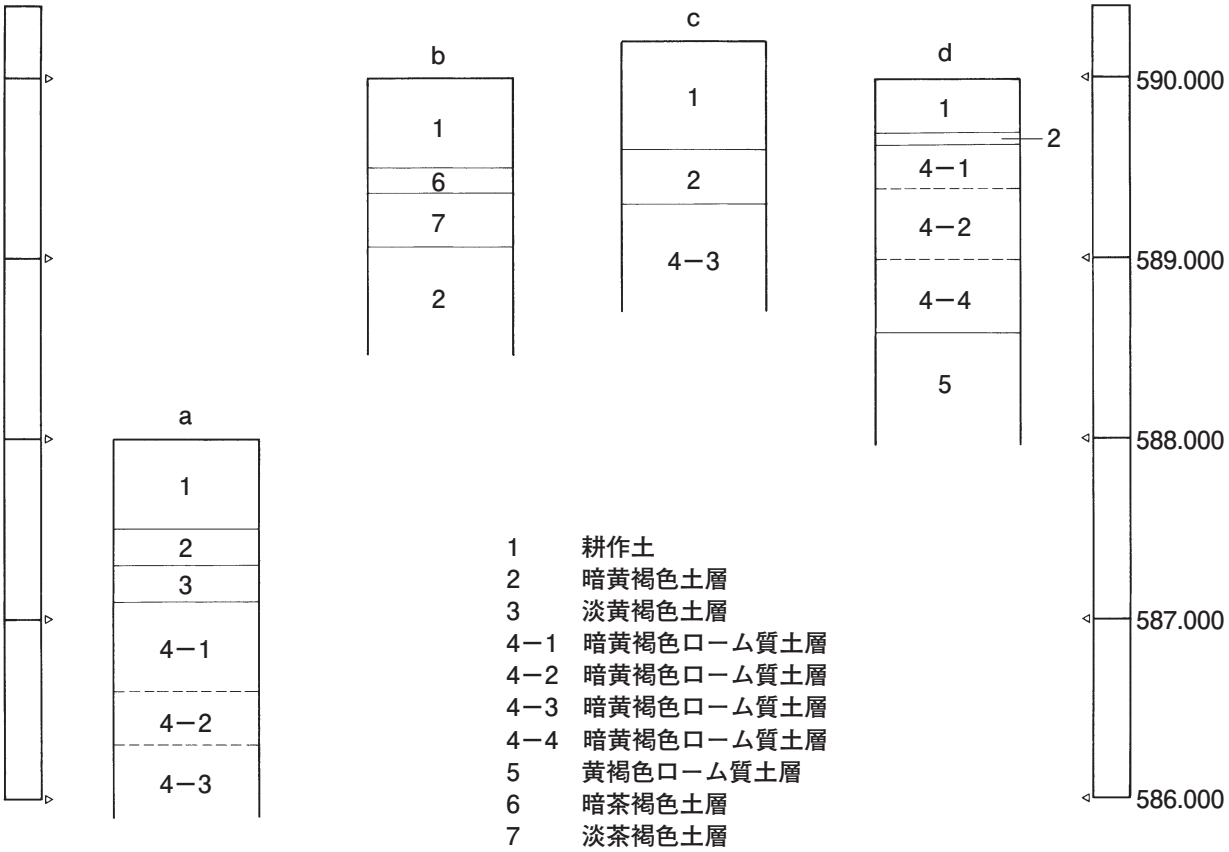
今回の調査対象地は、周知された遺跡範囲の西側縁辺部の狭い範囲に設定されており、遺構としては、約70基あまりの土坑とピットのみの検出で、他の遺構は確認できなかった。その分布はⅠ・Ⅱ区の西～南寄りに集中がみられるものの、まとまりについては判断は難しい。また形状は各節でも述べているように多様である。

出土遺物についてのほとんどが、遺物包含層（遺構外）からの土器片で、時期は縄文時代早期から後期までで、個体となるものは検出されなかった。中でも、早期の土器片が多く15点が検出している。その内訳は、押型文系が１点と残りが古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器である。古屋敷遺跡は、1983年と1988年の二期に渡って発掘調査がなされたものであり、その発掘調査成果の中で阿部芳郎氏によって早期後半で野島式に併行する山梨県・長野県諏訪方面に類似する形態がみられる地域的独自性の強い土器群として位置付けがなされ、県内では笛吹市境川町机遺跡・寺平遺跡に類例をみることができる。器形はいわゆる、尖底深鉢形であり、１～３類に細分されている。１・２類では段帯部に単節斜縄文または疑似羽状縄文と縄文を地文として沈線文を持つものとされている。３類は口縁部が厚く外反する無文のものである。この内、今回の調査で出土したものは３類の特徴を持つものが多いようである。

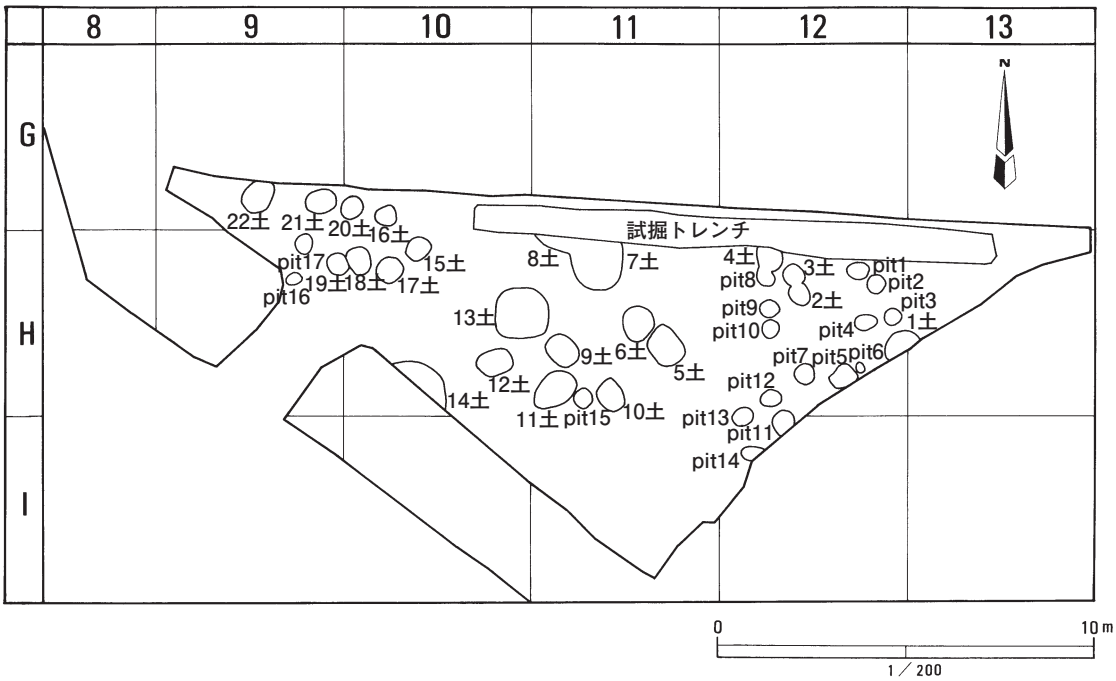
これらの事から縄文時代古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の分布域が御坂峠を越えて、甲府盆地東南部にまで達していたことが再検証されたこととなろう。



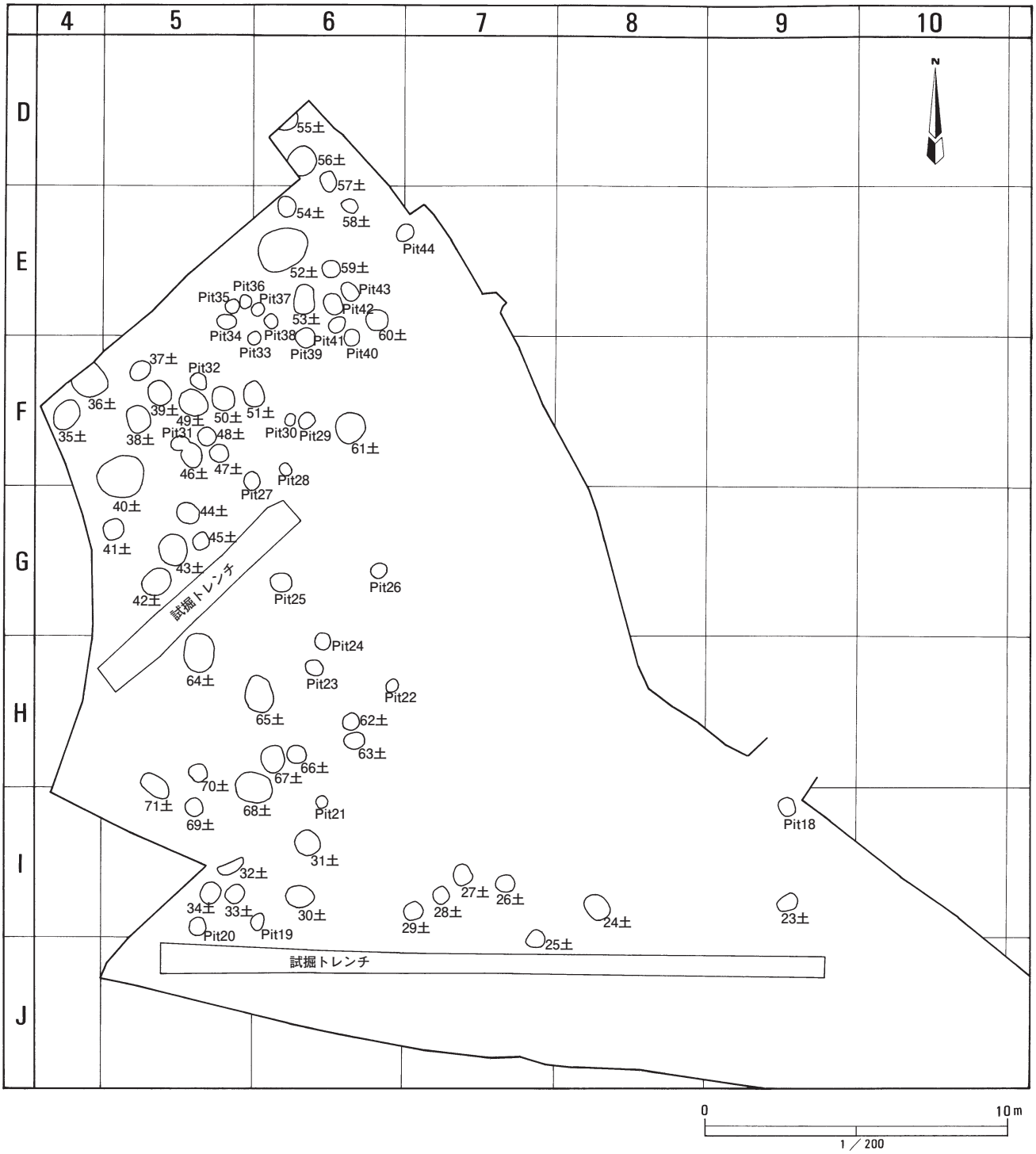
第３図　基本層序観察地点



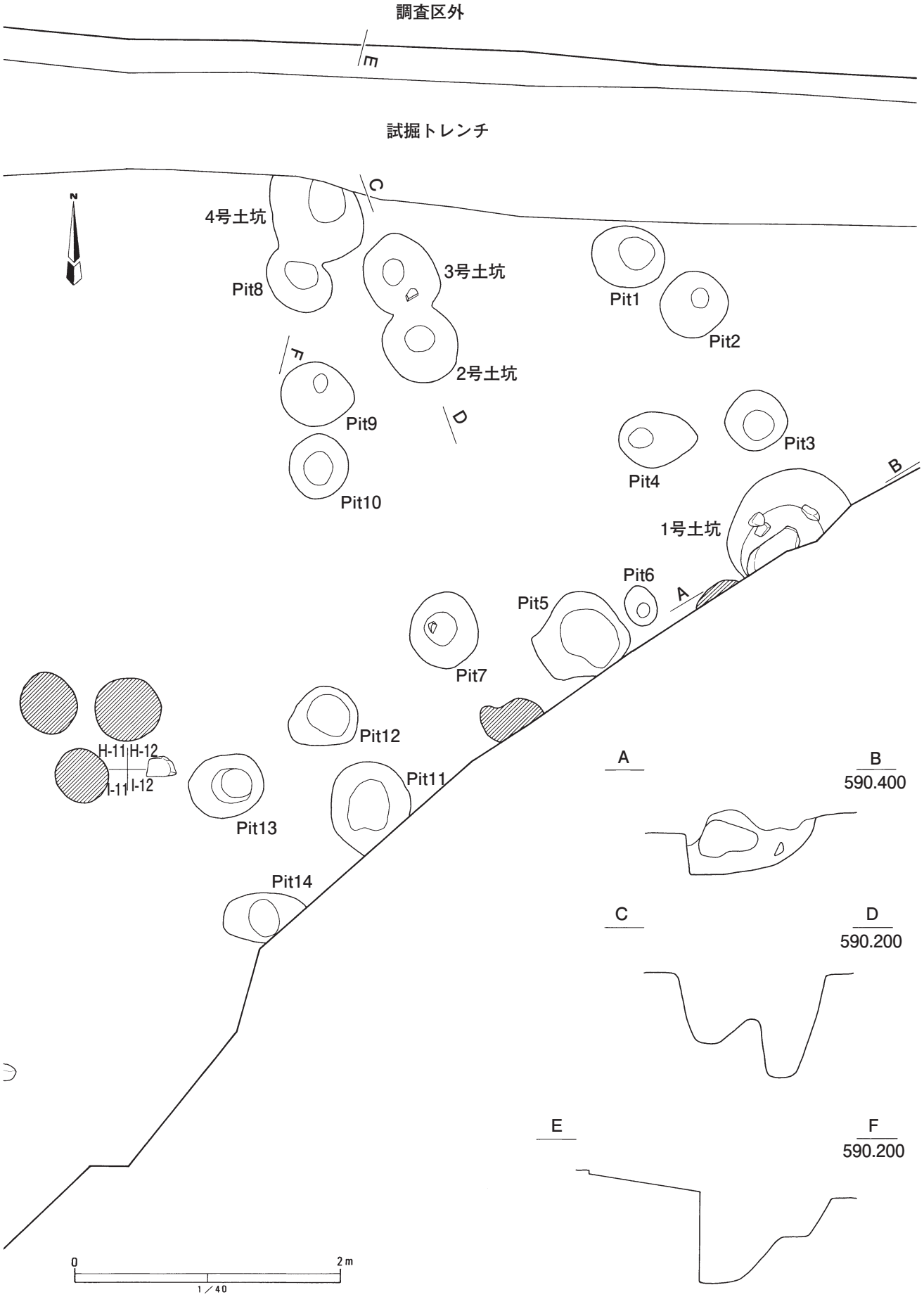
第４図　基本層序柱状図



第５図　Ⅰ区土坑・ピット配置図

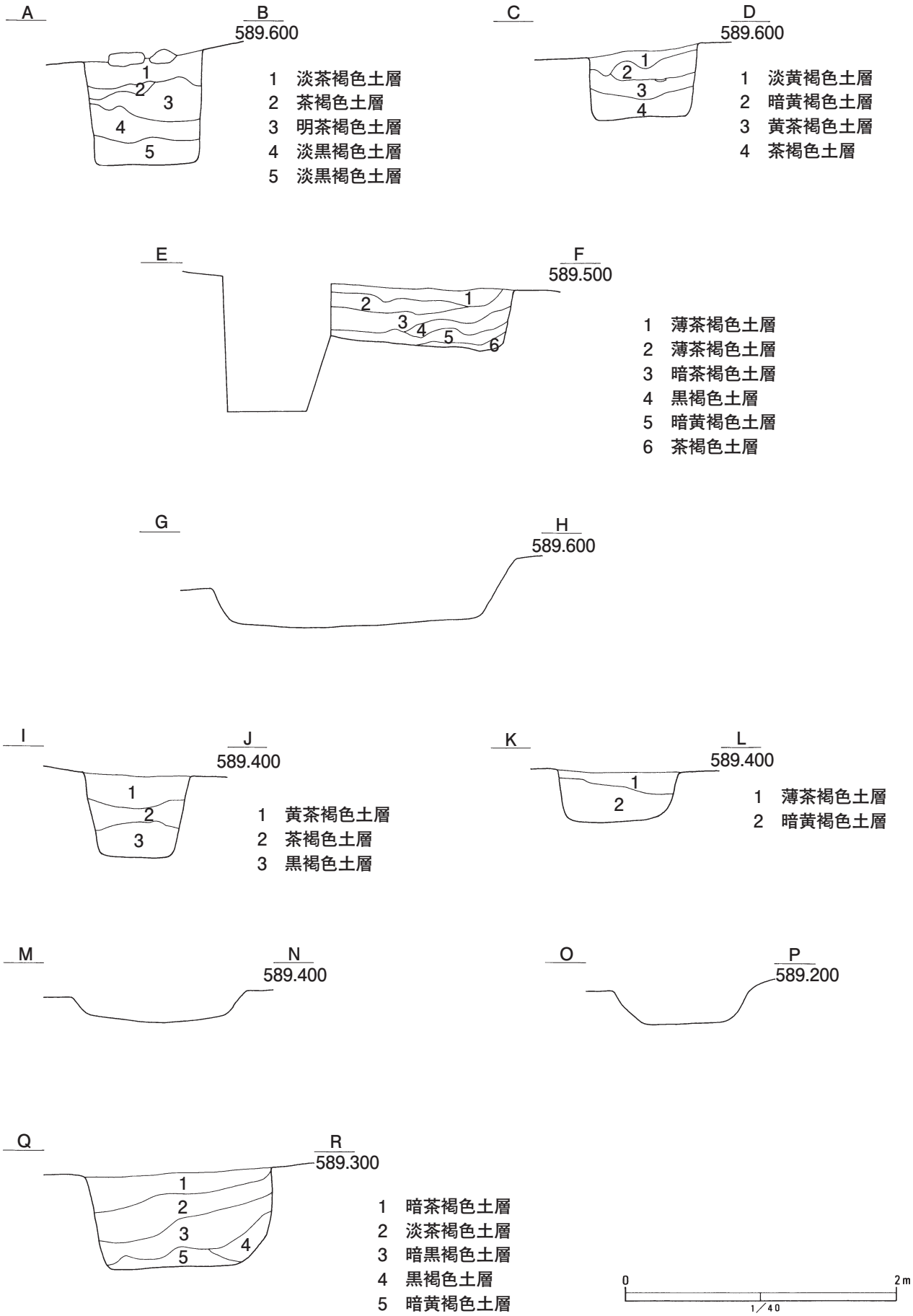


第６図　Ⅱ区土坑・ピット配置図

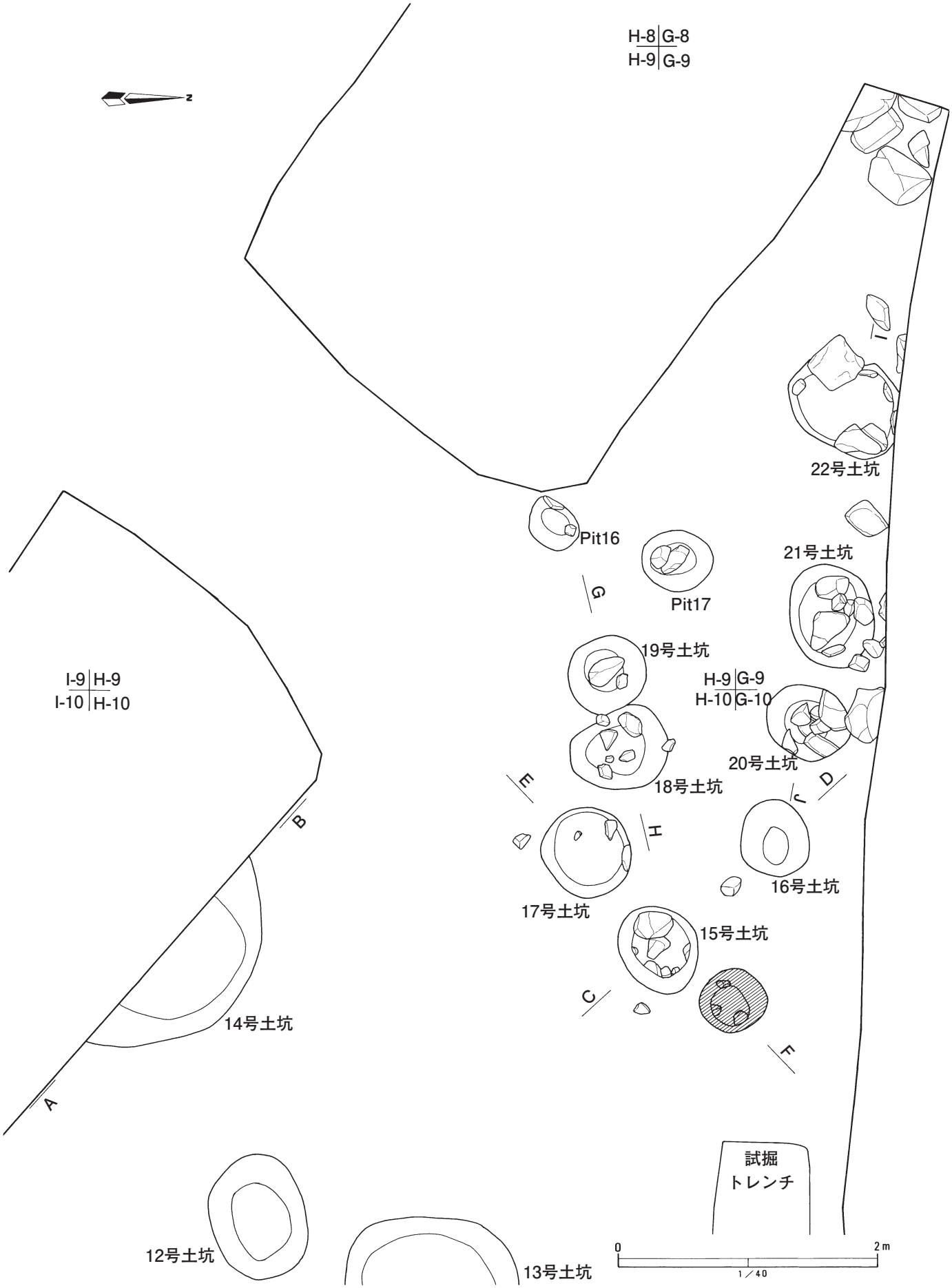


第７図　第１～４号土坑平・断面図

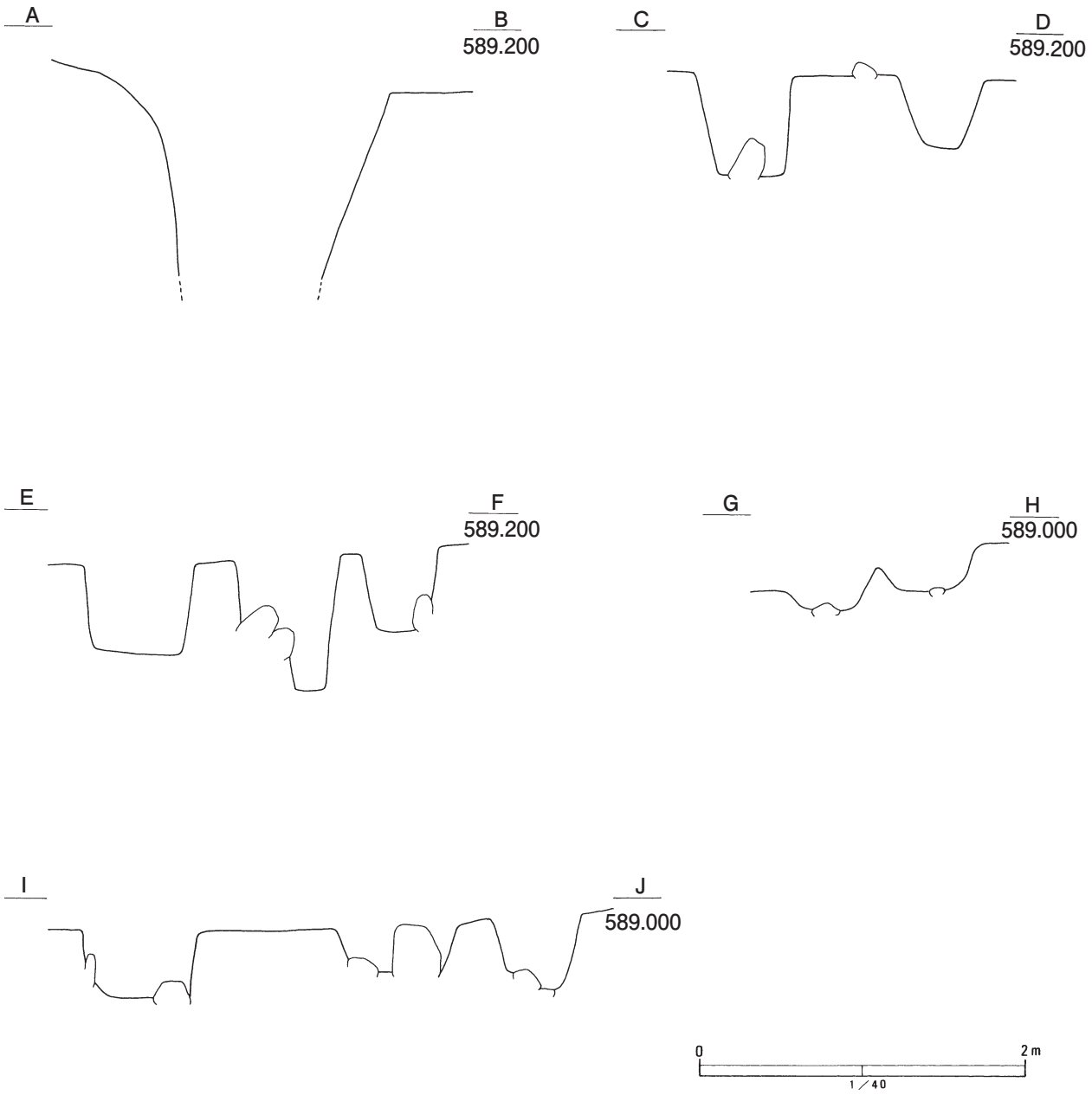
第８図　第５～13号土坑平面図



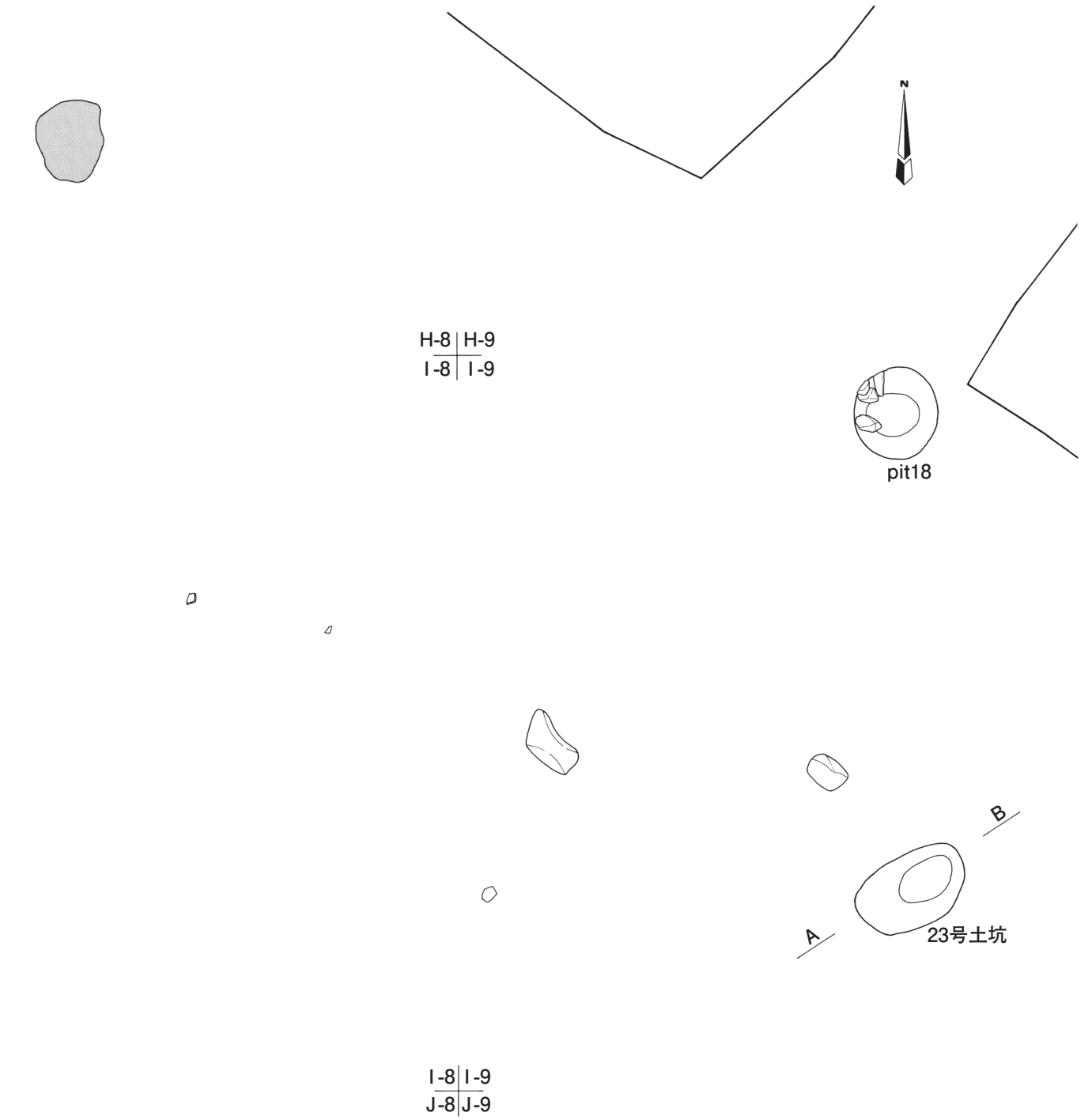
第 9 図　第 5 ～13号土坑断面図



第10図　第14～22号土坑平面図

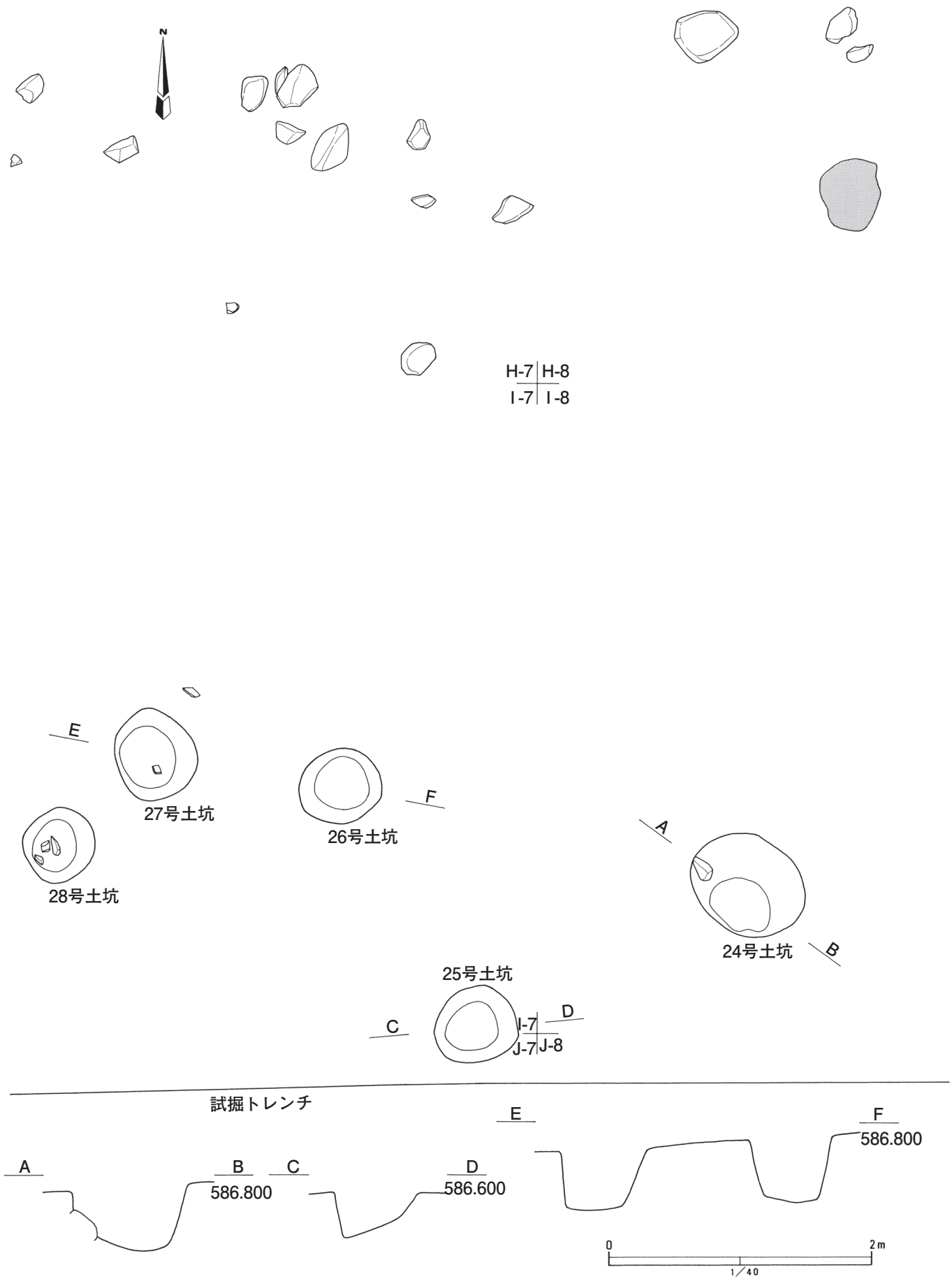


第11図　第14～22号土坑断面図

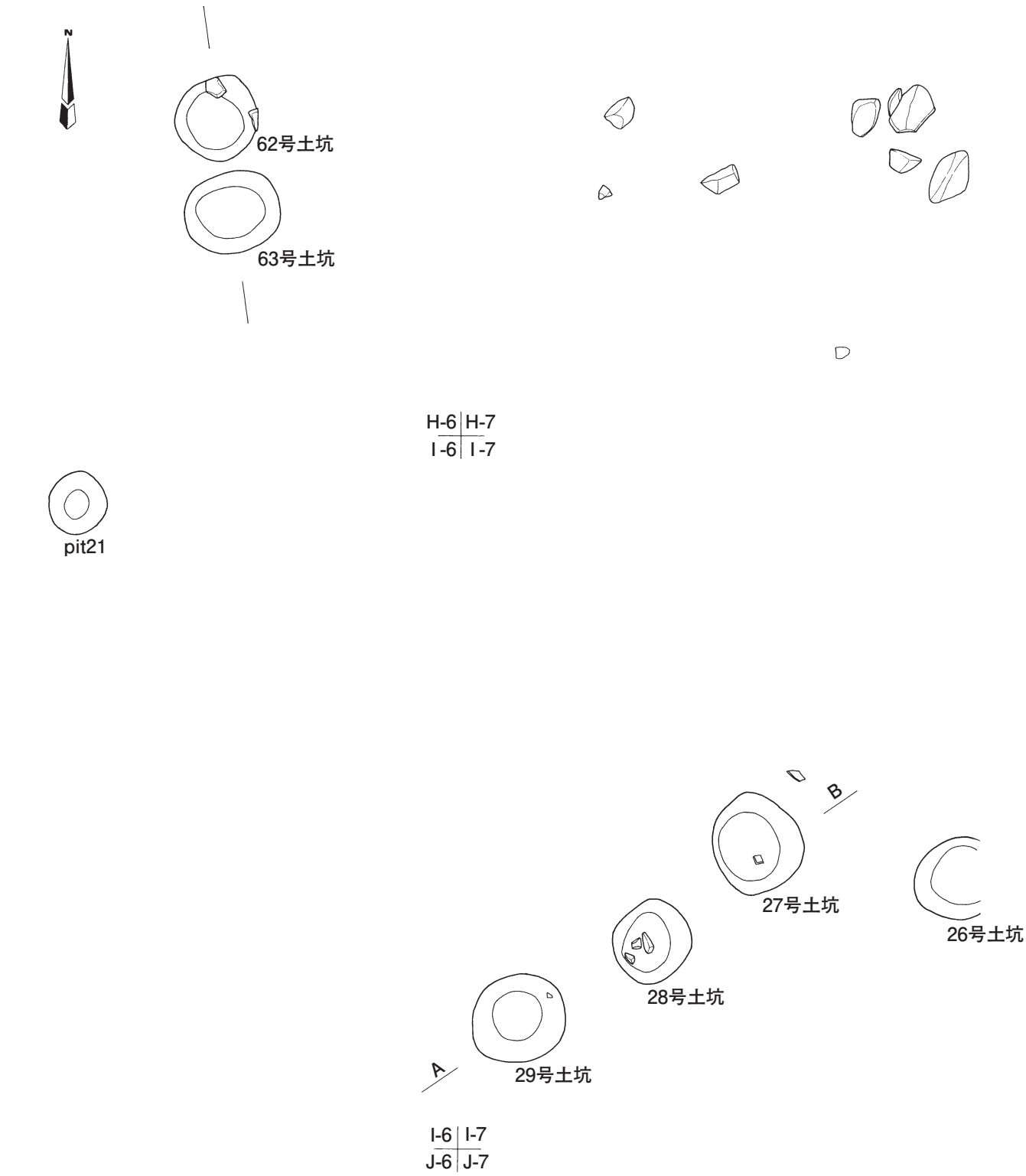


試掘トレンチ

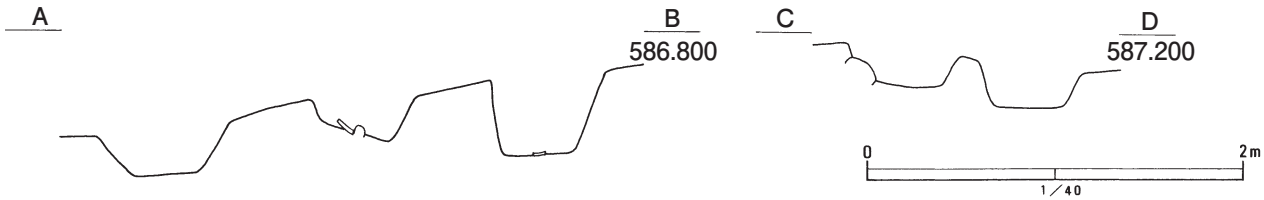
第12図　第23号土坑平・断面図



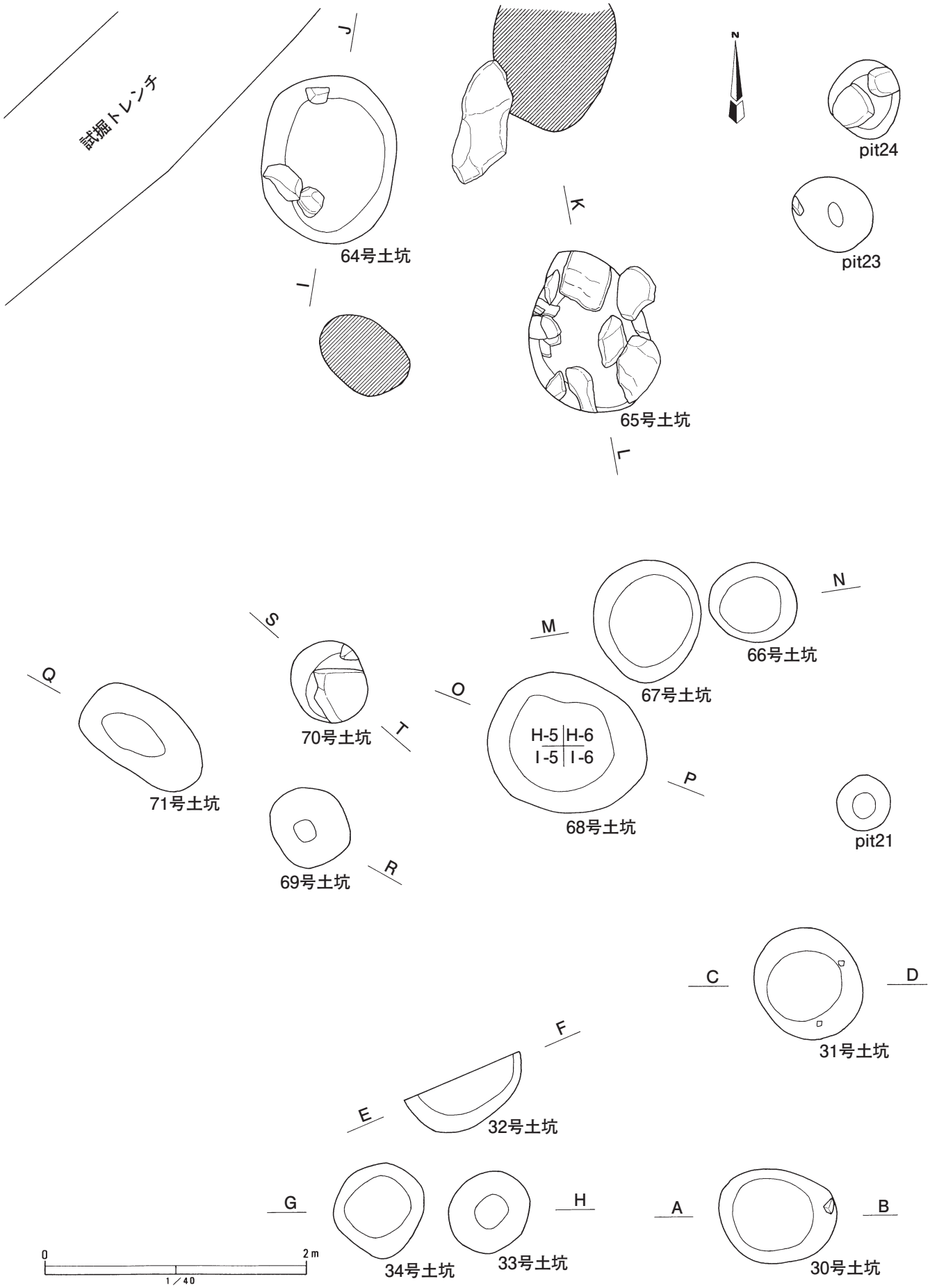
第13図　第24～27号土坑平・断面図



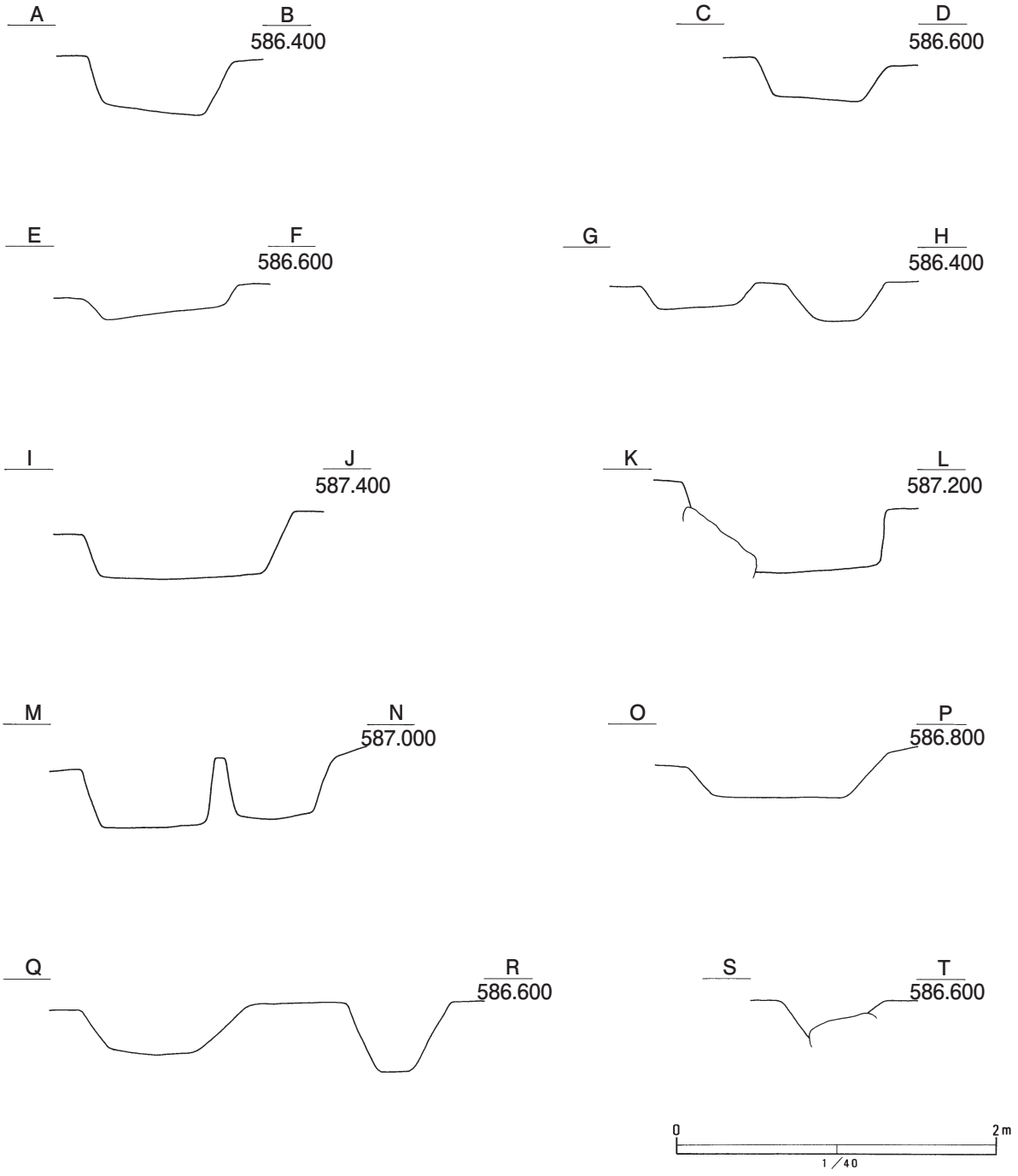
試掘トレンチ



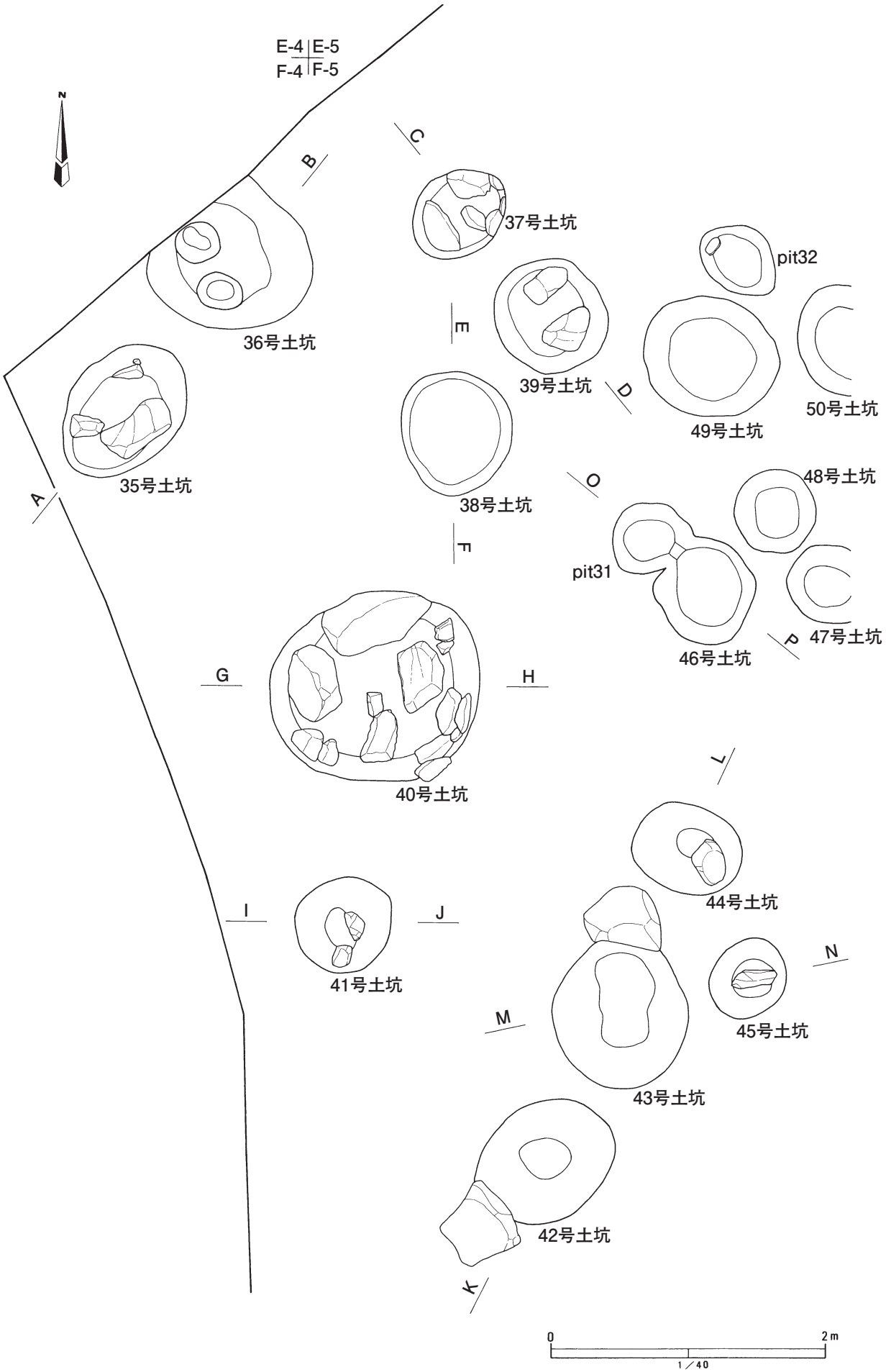
第14図　第27～29・62・63号土坑平・断面図



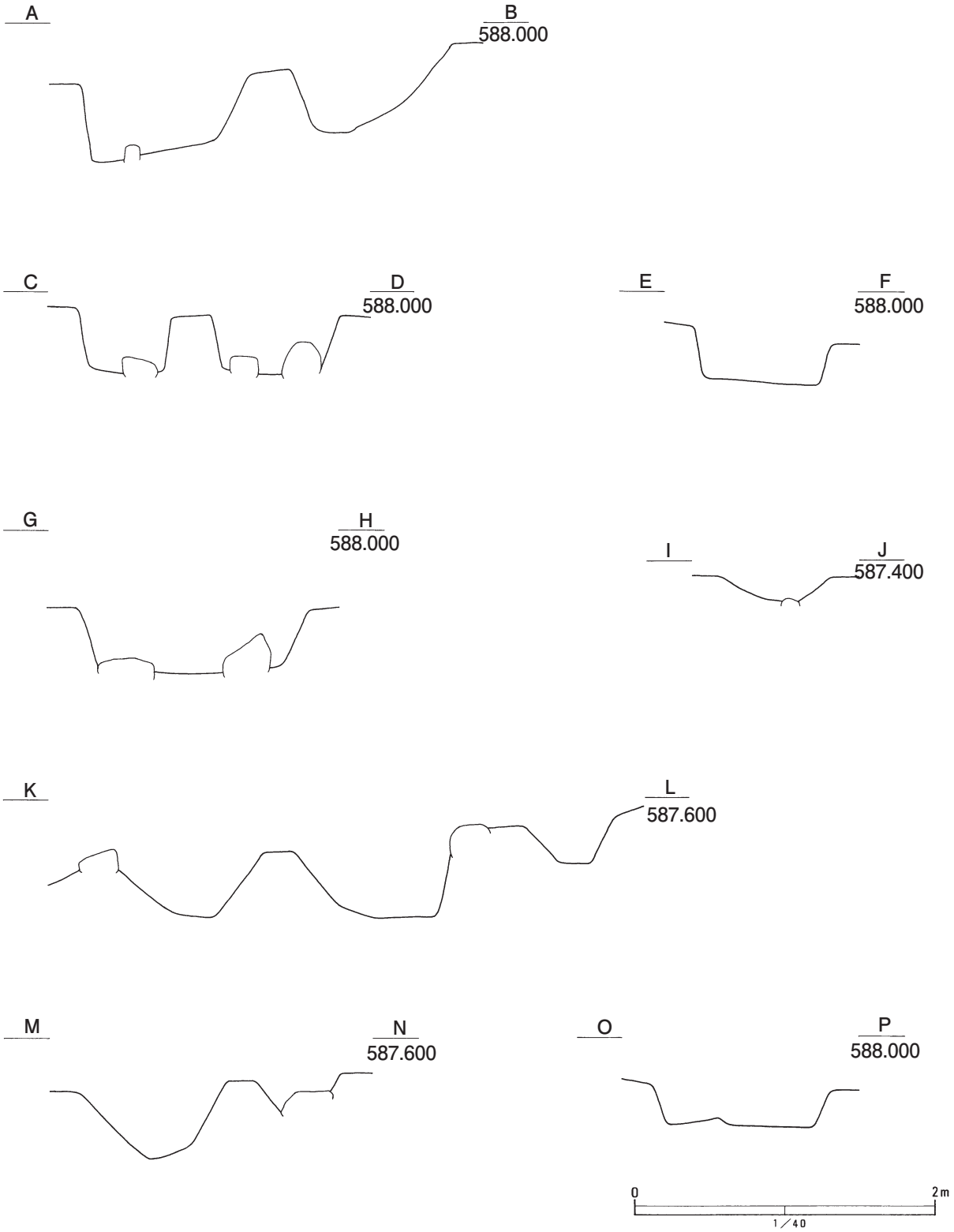
第15図　第30～34・64～71号土坑平面図



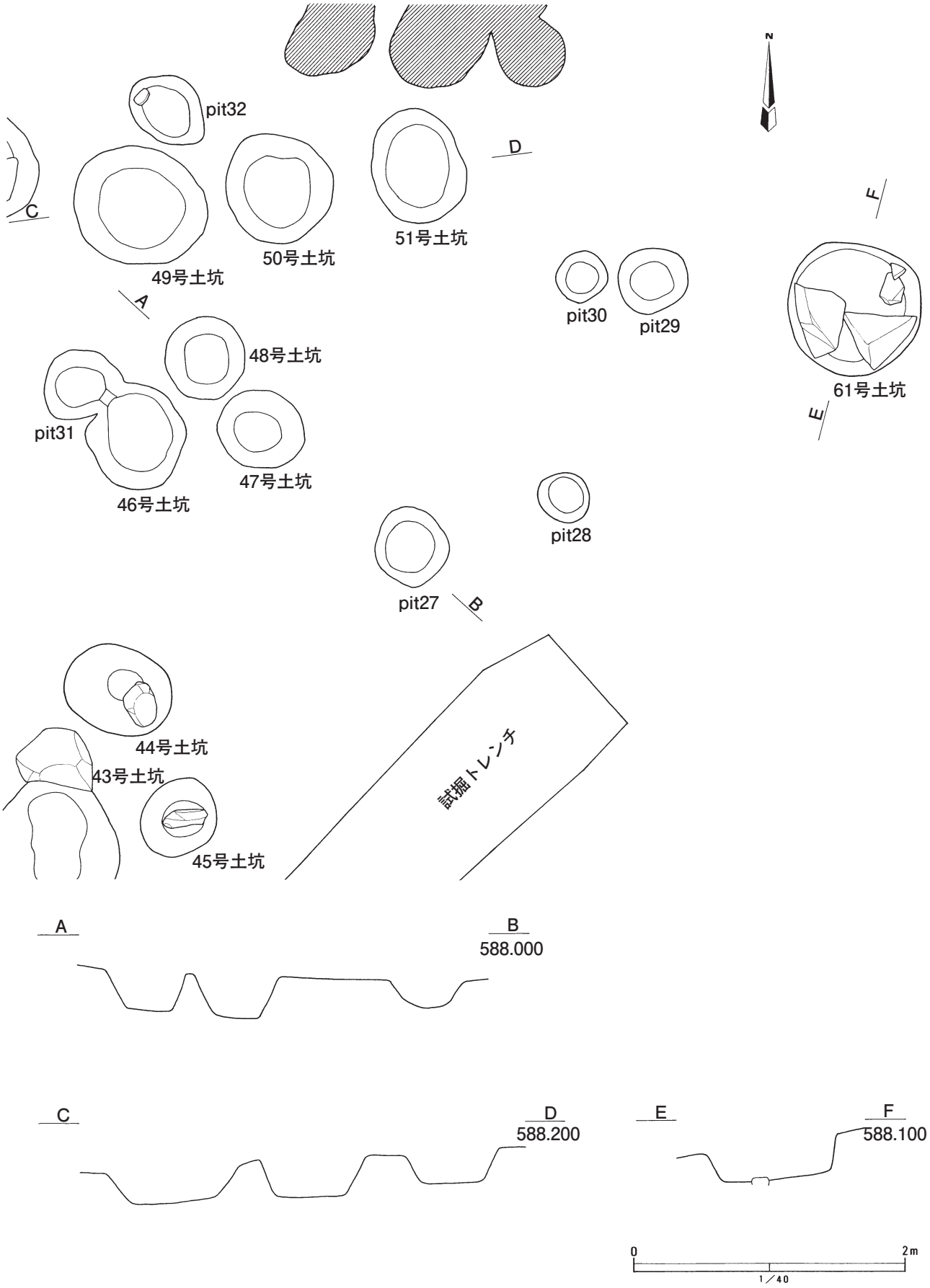
第16図　第30～34・64～71号土坑断面図



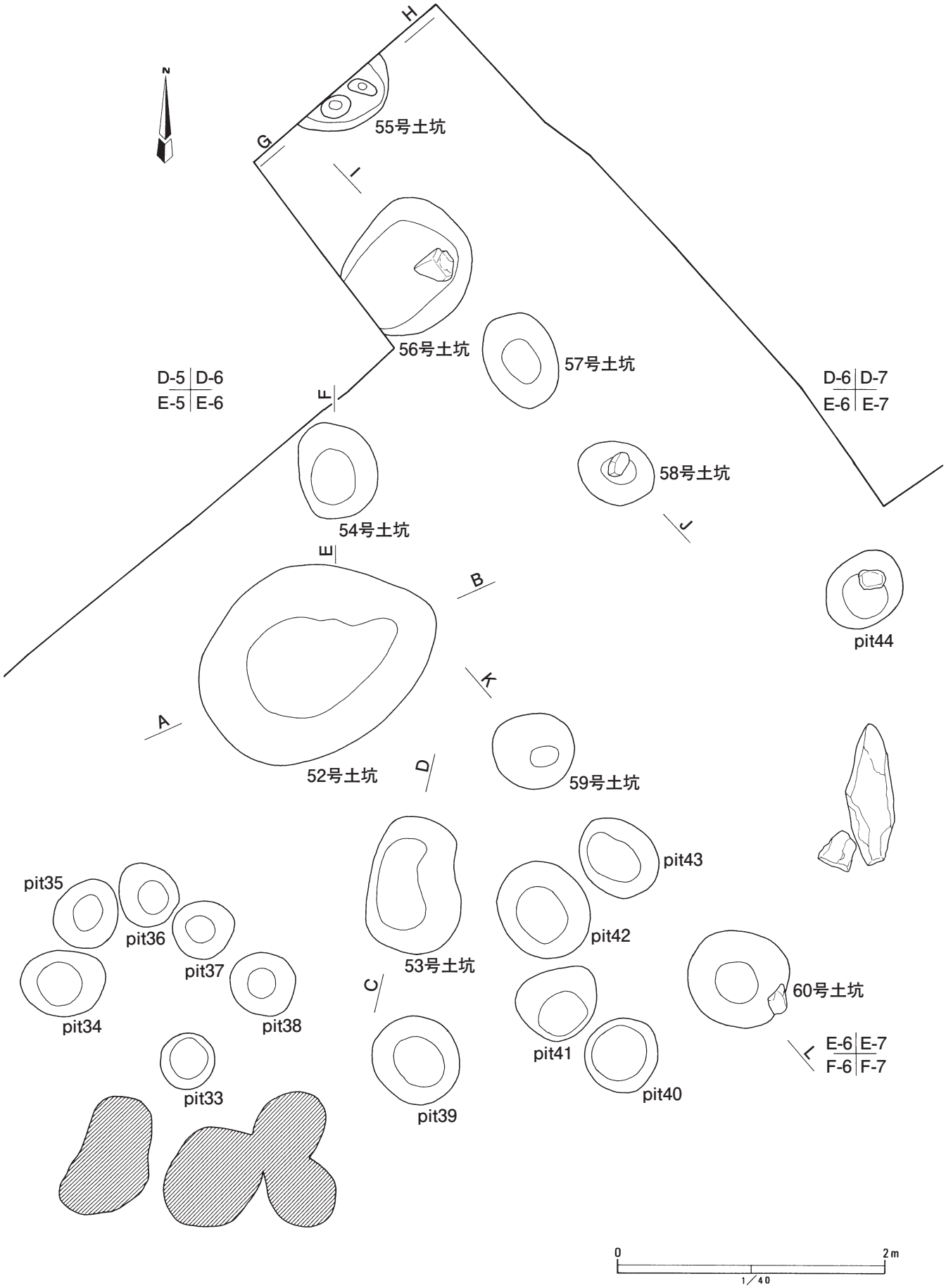
第17図　第35～46号土坑・第31号ピット平面図



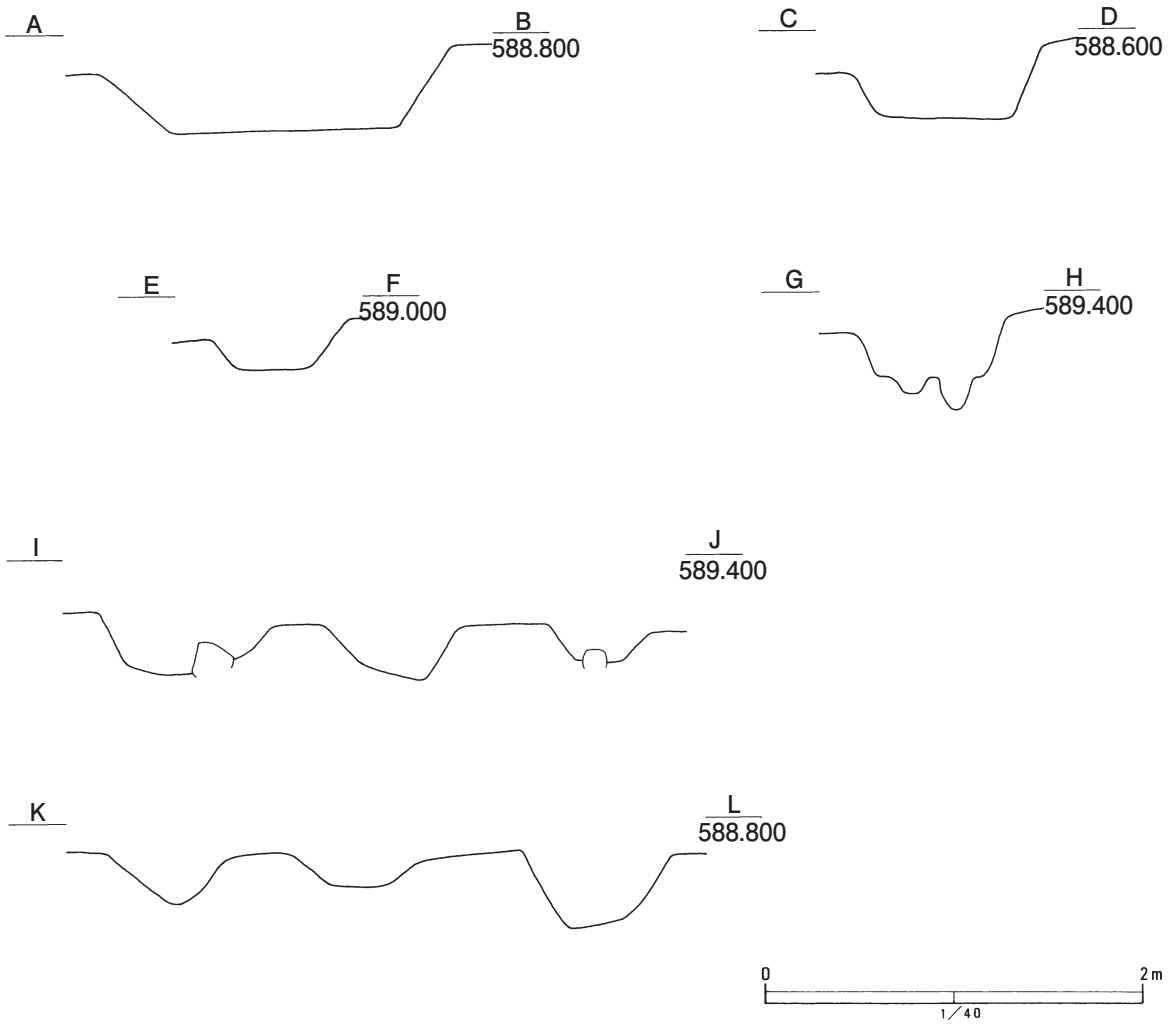
第18図　第35～46号土坑・第31号ピット断面図



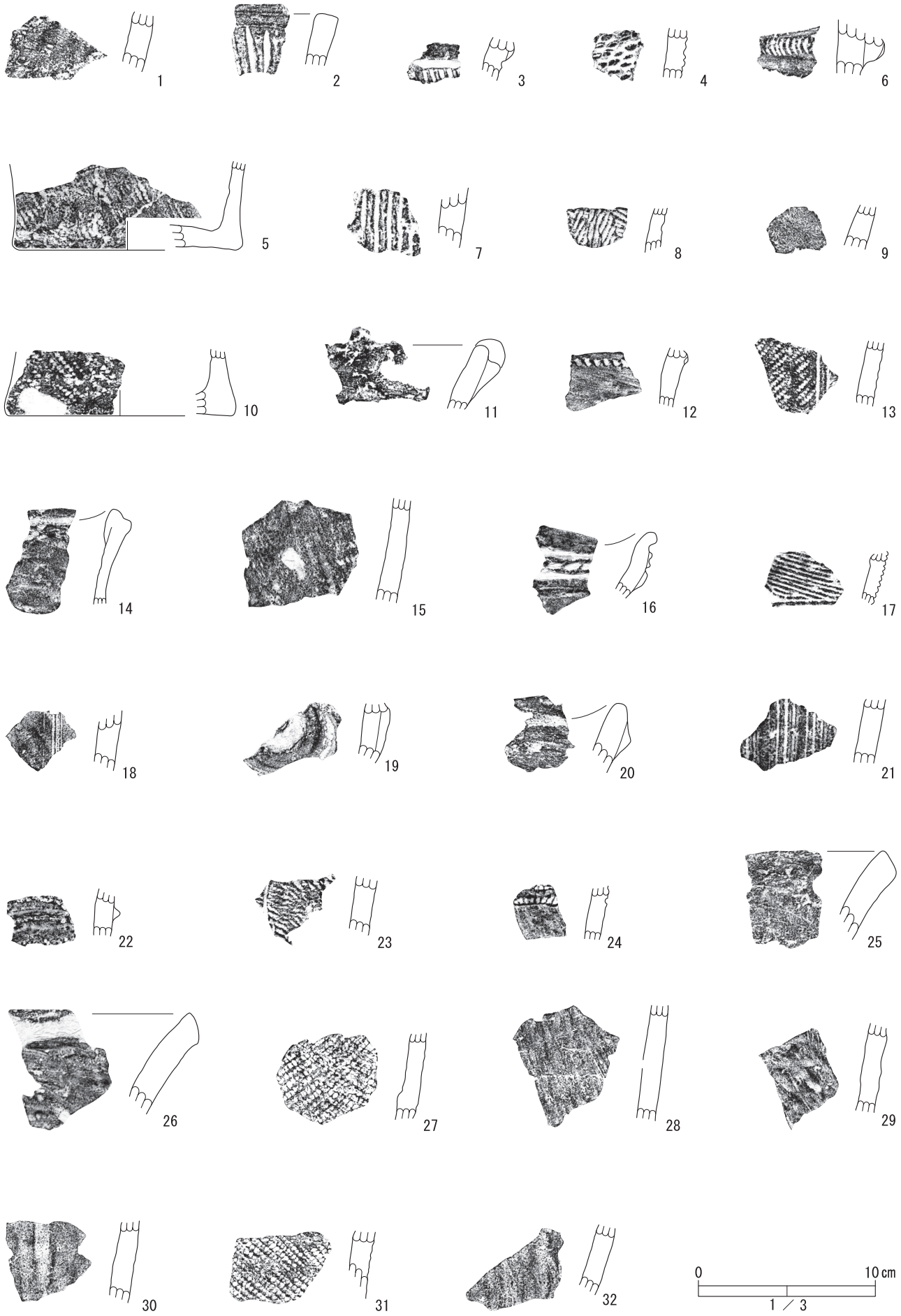
第19図　第47～51・61号土坑・第27号ピット平・断面図



第20図　第52～60号土坑・第43号ピット平面図

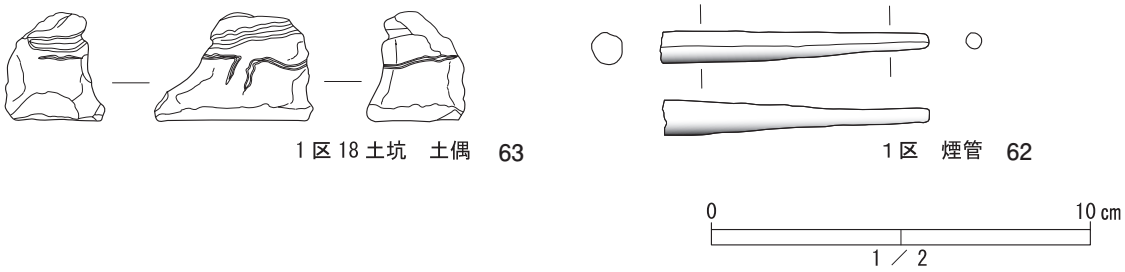


第21図　第52～60号土坑・第43号ピット断面図

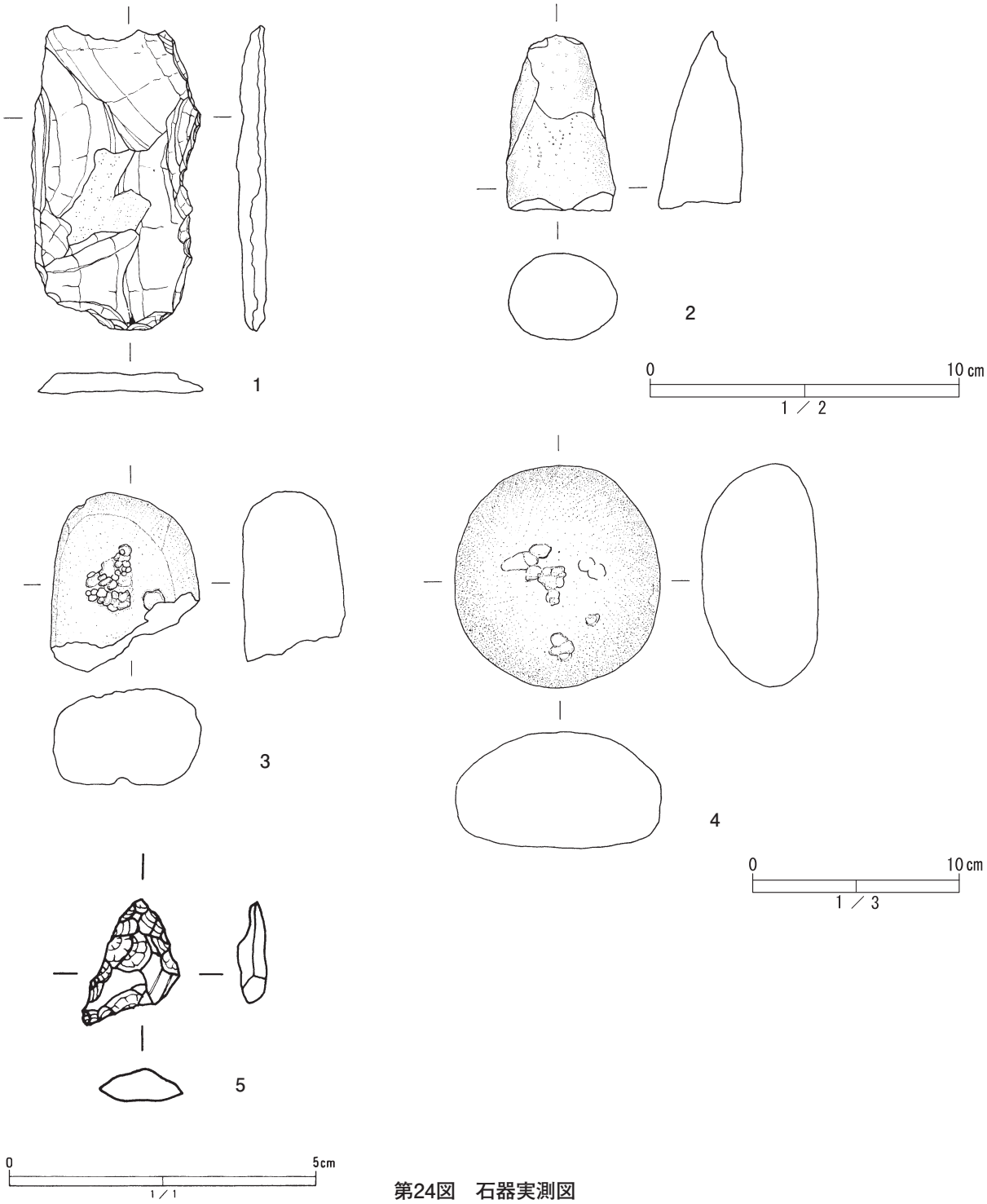


第22図　遺物実測図（1）　　第一次調査出土遺物　1

第23図　遺物実測図（2）　第一次調査出土遺物　2



第23図　遺物実測図（3）



第24図　石器実測図

第１表　PIT一覧表

遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	時期	備　　考
１号PIT	7	H－12	楕円形	57	48	28	不明	
２号PIT	7	H－12	円形	52	50	23	不明	
３号PIT	7	H－12	円形	48	45	16	不明	
４号PIT	7	H－12	楕円形	60	42	28	不明	
５号PIT	7	H－12	不整形	74	65	23	不明	
６号PIT	7	H－12	楕円形	30	24	16	不明	
７号PIT	7	H－12	楕円形	58	51	32	不明	
８号PIT	7	H－12	楕円形?	52	—	30	不明	
９号PIT	7	H－12	楕円形	55	48	35	不明	
10号PIT	7	H－12	円形	49	46	26	不明	
11号PIT	7	I－12	楕円形	70	60	18	不明	
12号PIT	7	H－12	不整楕円形	54	49	26	不明	
13号PIT	7	H－12 I－12	楕円形	58	47	28	不明	
14号PIT	7	I－12	楕円形	—	38	26	不明	
15号PIT	8	H－11	円形	56	55	36	不明	
16号PIT	10	H－9	楕円形	44	35	43	不明	
17号PIT	10	H－9	楕円形	55	47	39	不明	
18号PIT	12	I－9	円形	60	58	56	不明	
19号PIT		I－5 I－6	楕円形	59	45	24	不明	
20号PIT		I－5	円形	60	53	29	不明	
21号PIT	14・15	I－6	円形	43	41	32	不明	
22号PIT		H－6	円形	41	41	29	不明	
23号PIT	15	H－6	楕円形	63	53	35	不明	
24号PIT	15	G－6 H－6	不整円形	60	55	27	不明	
25号PIT		G－6	楕円形	73	64	26	不明	
26号PIT		G－6	隅丸方形	55	54	22	不明	
27号PIT	19	F－5 E－6	不整円形	60	55	26	不明	
28号PIT	19	F－6	円形	39	36	25	不明	
29号PIT	19	F－6	円形	51	49	37	不明	
30号PIT	19	F－6	円形	39	39	36	不明	
31号PIT	17・19	F－5	不整円形	51	59	56	不明	
32号PIT	17・19	F－5	楕円形	64	48	35	不明	
33号PIT	20	E－5　E－6 F－5　F－6	楕円形	45	40	22	不明	
34号PIT	20	E－5	楕円形	65	50	32	不明	
35号PIT	20	E－5	楕円形	54	47	44	不明	
36号PIT	20	E－5	楕円形	49	45	24	不明	
37号PIT	20	E－5 E－6	円形	47	44	31	不明	
38号PIT	20	E－6	円形	49	48	26	不明	
39号PIT	20	E－6 F－6	楕円形	68	62	27	不明	
40号PIT	20	E－6 F－6	円形	56	54	37	不明	
41号PIT	20	E－6	不整円形	60	53	40	不明	
42号PIT	20	E－6	楕円形	76	65	20	不明	
43号PIT	20	E－6	楕円形	66	53	19	不明	
44号PIT	20	E－6 E－7	楕円形	52	52	22	不明	

第２表　土坑一覧表

遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	時期	備　　考
１号土坑	7	H－12 H－13	楕円形?	100	—	48	不明	
２号土坑	7	H－12	楕円形	—	55	77	不明	
３号土坑	7	H－12	楕円形	—	54	54	縄文	
４号土坑	7	H－12	不整形	—	80	64	縄文中期	
５号土坑	8	H－11	隅丸長方形	108	83	86	不明	
６号土坑	8	H－11	楕円形	93	85	57	縄文早期 ～中期初頭	押型文　五領ヶ台式
７号土坑	8	H－11	不整形	—	—	51	縄文中期中葉	井戸尻式
８号土坑	8	H－11	不整形	—	—	28	縄文前期 最終末	矢羽根状文
９号土坑	8	H－11	楕円形	95	75	64	不明	
10号土坑	8	H－11	楕円形	90	68	40	不明	
11号土坑	8	H－11	楕円形	130	86	23	不明	
12号土坑	8	H－10	楕円形	99	75	25	不明	
13号土坑	8	H－10 H－11	隅丸方形	146	135	75	不明	
14号土坑	10	H－10	楕円形?	190	—	—	不明	
15号土坑	10	H－10	楕円形	71	60	85	不明	
16号土坑	10	G－10	楕円形	60	53	45	不明	
17号土坑	10	H－10	円形	69	66	55	縄文	磨製石斧
18号土坑	10	H－10	楕円形	75	63	28	縄文中期初頭	五領ヶ台式　土偶脚部
19号土坑	10	H－9 H－10	楕円形	62	56	25	不明	
20号土坑	10	G－9 G－10	楕円形	66	56	45	不明	
21号土坑	10	G－9	楕円形	83	65	28	不明	
22号土坑	10	G－9	楕円形	—	75	43	不明	
23号土坑	12	I－9	楕円形	78	48	42	不明	
24号土坑	13	I－8	楕円形	90	72	52	不明	
25号土坑	13	I－7 J－7	円形	63	60	35	不明	
26号土坑	13	I－7	楕円形	64	57	51	不明	
27号土坑	13・14	I－7	楕円形	70	61	46	縄文後期前葉	堀之内式
28号土坑	13・14	I－7	隅丸方形	55	52	24	不明	
29号土坑	14	I－7	楕円形	70	62	27	不明	
30号土坑	15	I－6	楕円形	92	73	37	不明	
31号土坑	15	I－6	楕円形	88	78	29	縄文後期前葉	堀之内式?
32号土坑	15	I－5	不整形	95	40	21	不明	
33号土坑	15	I－5	楕円形	65	59	25	不明	
34号土坑	15	I－5	楕円形	73	70	15	不明	
35号土坑	17	F－4	楕円形	111	81	59	縄文中期初頭 ～後期前葉	五領ヶ台式　堀之内１式
36号土坑	17	F－4 F－5	不整円形	—	109	57	縄文後期前葉	堀之内１式
37号土坑	17	F－5	楕円形	77	61	45	不明	
38号土坑	17	F－5	楕円形	92	81	40	不明	
39号土坑	17	F－5	楕円形	87	80	40	不明	
40号土坑	17	F－5 G－5	楕円形	153	140	45	縄文中期初頭	五領ヶ台式
41号土坑	17	G－4 G－5	円形	71	70	16	不明	
42号土坑	17	G－5	楕円形	97	85	43	不明	
43号土坑	17・19	G－5	楕円形	105	100	51	縄文後期前葉	堀之内１式
44号土坑	17・19	G－5	楕円形	80	65	31	不明	
45号土坑	17・19	G－5	楕円形	61	55	26	縄文中期後半	曽利Ⅲ～Ⅳ式
46号土坑	17・19	F－5	不整円形	78	76	22	不明	
47号土坑	17・19	F－5	楕円形	65	58	32	不明	
48号土坑	17・19	F－5	円形	62	60	31	不明	
49号土坑	17・19	F－5	楕円形	101	87	26	不明	
50号土坑	17・19	F－5	円形	83	80	30	不明	
51号土坑	19	F－5 F－6	楕円形	86	68	25	不明	
52号土坑	20	E－6	不整楕円形	185	140	46	不明	
53号土坑	20	E－6	不整形	103	72	40	不明	
54号土坑	20	E－6	楕円形	75	59	26	縄文後期前葉	堀之内１式

遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	時期	備　　考
55号土坑	20	D－6	楕円形?	82	—	49	不明	
56号土坑	20	D－6	楕円形	—	89	34	不明	
57号土坑	20	D－6	楕円形	71	53	30	不明	
58号土坑	20	E－6	楕円形	59	46	20	縄文中期後半	曽利Ⅳ式
59号土坑	20	E－6	円形	61	58	28	不明	
60号土坑	20	E－6	円形	76	73	42	不明	
61号土坑	19	F－6	円形	102	101	35	不明	
62号土坑	14	H－6	円形	62	58	23	不明	
63号土坑	14	H－6	楕円形	67	58	25	不明	
64号土坑	15	G－5 H－6	楕円形	130	103	40	不明	
65号土坑	15	H－5 H－6	楕円形	130	92	56	不明	
66号土坑	15	H－6	円形	69	61	40	不明	
67号土坑	15	H－6	円形	95	81	43	不明	
68号土坑	15	H－5　H－6 I－5　I－6	楕円形	122	105	27	縄文中期後半	曽利Ⅳ式
69号土坑	15	I－5	円形	65	63	43	縄文中期初頭	五領ヶ台式
70号土坑	15	H－5	円形	63	58	25	縄文早期	打越式
71号土坑	15	H－5 I－5	楕円形	104	60	30	不明	

第３表　土器観察表　（（　）は推定復元値）

図版	No.	地点	種別	時期	器種	口/底/高（cm）	整形技法	色調・胎土	備　　考
22	1	３土	縄文	不明	深鉢	—/—/—	縄文	褐色　白色粒子・赤色粒子	
22	2	４土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	沈線	褐色　白色粒子・赤色粒子	
22	3	４土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	沈線　隆帯	にぶい赤褐色　白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	
22	4	６土	縄文	縄文早	深鉢	—/—/—	押型文	にぶい赤褐色　白色粒子・赤色粒子	押型文系土器
22	5	６土	縄文	縄文中	深鉢	—/（12.6）/—	単節縄文　結節縄文	赤褐色　白色粒子・金雲母	中期初頭五領ヶ台式
22	6	７土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	隆帯に爪形文	褐色　白色粒子	中期中葉井戸尻式
22	7	７土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	縦位沈線	褐色　白色粒子・石英・長石	中期中葉井戸尻式
22	8	９土	縄文	縄文前	深鉢	—/—/—	矢羽根状文	暗褐色　白色粒子・石英	前期終末期
22	9	10土	不明	不明	深鉢	—/—/—	無文	褐色　白色粒子・黒色粒子	
22	10	18土	縄文	縄文中	深鉢	—/（12.6）/—	縄文	褐色　白色粒子・金雲母・長石	中期初頭五領ヶ台式
22	11	27土	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	貼付隆帯	黒褐色　白色粒子・金雲母・石英	後期前葉堀之内式
22	12	31土	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	微隆帯上に刺突列	にぶい黄褐色　白色粒子	後期前葉堀之内式?
22	13	35土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	縄文　沈線	褐色　白色粒子	中期初頭五領ヶ台式
22	14	35土	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	波状口縁	黒褐色　白色粒子･赤色粒子･金雲母・石英	後期前葉堀之内１式
22	15	35土	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	無文	にぶい褐色　白色粒子・赤色粒子・金雲母	後期前葉堀之内１式　粗製土器
22	16	36土	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	波状口縁　隆帯　刺突	明褐色　白色粒子	後期前葉堀之内１式
22	17	40土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	沈線	にぶい黄褐色　白色粒子・黒色粒子・長石	中期初頭五領ヶ台式
22	18	43土	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	沈線	にぶい黄褐色　白色粒子・黒色粒子・長石	後期前葉堀之内１式
22	19	45土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	隆帯	にぶい黄橙色　白色粒子・赤色粒子	中期後半曽利Ⅲ～Ⅳ式
22	20	54土	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	波状口縁　隆帯	にぶい褐色　白色粒子・赤色粒子・金雲母	後期前葉堀之内１式
22	21	58土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	条線	にぶい褐色　白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	中期後半曽利Ⅳ式

図版	No.	地点	種別	時期	器種	口/底/高（cm）	整形技法	色調・胎土	備　考
22	22	68土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	隆帯	にぶい黄褐色　白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	中期後半曽利Ⅳ式
22	23	69土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	縄文　沈線	明褐色　白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・石英	中期初頭五領ヶ台式
22	24	70土	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	貝殻腹縁文	にぶい赤褐色　白色粒子	早期打越式
22	25	I−6	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい褐色　白色粒子・赤色粒子	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
22	26	I−7	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい黄橙色　白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
22	27	C−5	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	羽状縄文	にぶい橙色　白色粒子・石英	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
22	28	2区	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい橙色　白色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
22	29	C−5	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	暗褐色　白色粒子	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
22	30	2区	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい黄褐色　白色粒子・黒色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
22	31	C−3	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色　白色粒子・黒色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
22	32	2区	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい褐色　白色粒子・黒色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
23	33	C−5	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい褐色　白色粒子・赤色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
23	34	2区	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	褐色　白色粒子・金雲母・石英・長石	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
23	35	2区表土	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	褐色　白色粒子・赤色粒子・金雲母・長石	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
23	36	I−6	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい褐色　白色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
23	37	2区表土	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい黄褐色　白色粒子・赤色粒子・雲母	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
23	38	I−7	縄文	縄文早	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい黄褐色　白色粒子・金雲母・石英	早期古屋敷遺跡第Ⅳ群土器
23	39	1区	縄文	縄文前	深鉢	—/—/—	波状口縁　縄文	にぶい褐色　白色粒子	前期釈迦堂Z３式
23	40	1区	縄文	縄文前	深鉢	—/—/—	縄文	暗灰黄色　白色粒子・石英	前期釈迦堂Z３式
23	41	1区	縄文	縄文前	深鉢	—/—/—	爪形文	橙色　白色粒子・石英	前期後半諸磯ｂ式
23	42	I−5	縄文	縄文前	深鉢	—/—/—	縄文　沈線	にぶい褐色　白色粒子・黒色粒子・石英・長石	前期後半諸磯ｂ式
23	43	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	沈線　格子目文	褐色　白色粒子・黒色粒子・石英・金雲母	中期初頭五領ヶ台Ⅰ式
23	44	H−11	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	隆帯　沈線　刺突文	褐色　白色粒子・金雲母	中期初頭五領ヶ台式
23	45	H−11	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	沈線　刺突文	褐色　白色粒子・金雲母	中期初頭五領ヶ台式
23	46	H−11	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	波状沈線　縄文	褐色　白色粒子・黒色粒子	中期初頭五領ヶ台式
23	47	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	口唇部にきざみ　沈線　縄文　刺突文	にぶい赤褐色　白色粒子・石英・金雲母	中期初頭五領ヶ台Ⅱ式
23	48	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/（11.0）/—	沈線　刺突文	にぶい黄褐色　白色粒子・金雲母	中期初頭五領ヶ台Ⅱ式
23	49	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	爪形文　波状沈線	橙色　白色粒子	中期中葉藤内式
23	50	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	波状口縁　隆帯にきざみ	にぶい褐色　白色粒子・黒色粒子・長石	中期中葉井戸尻式
23	51	2区表土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	隆帯にきざみ	にぶい赤褐色　白色粒子・黒色粒子	中期中葉井戸尻式
23	52	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	X字状把手	褐色　白色粒子・黒色粒子	中期後半曽利Ⅱ式
23	53	H−10	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	縦位沈線　波状隆帯	にぶい褐色　白色粒子・黒色粒子	中期後半曽利Ⅱ式
23	54	G−11	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	縦位条線	にぶい褐色　白色粒子・黒色粒子・長石	中期後半曽利Ⅲ式
23	55	1区表土	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	隆帯　条線	黄褐色　白色粒子・赤色粒子・石英	中期後半曽利Ⅳ式

図版	No.	地点	種別	時期	器種	口/底/高（cm）	整形技法	色調・胎土	備　　考
23	56	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	ハの字文　沈線	暗灰黄色　白色粒子・赤色粒子・金雲母・長石	中期後半曽利Ｖ式
23	57	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	隆帯　縄文	にぶい褐色　白色粒子･石英･長石	中期後半加曽利E式
23	58	1区	縄文	縄文中	深鉢	—/—/—	縄文　沈線	にぶい褐色　白色粒子・赤色粒子・長石	中期後半加曽利E式
23	59	1区	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	沈線	明褐色　白色粒子･黒色粒子･長石	後期前葉堀之内１式
23	60	1区	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	沈線	明黄褐色　白色粒子・黒色粒子・長石	後期前葉堀之内１式
23	61	B－4	縄文	縄文後	深鉢	—/—/—	隆帯上にきざみ　沈線	黒褐色　白色粒子・金雲母	後期前葉堀之内２式

第４表　石器・土製品等観察表　（(　)は推定復元値）

図版	No.	地点	分類	長/幅/厚（cm）	重さ（g）	石材	色　　調	備　　考
24	1	H－6	打製石斧	10.05/5.5/9.5	62.5	粘板岩		
24	2	17土坑	磨製石斧	—/3.54/—	89			
24	3	C－5（４区一番南）一括	磨石凹石	(8.7)/7.3/5.0	394.3			
24	4	H－12	凹石	10.8/10.0/5.0	859.8			
24	5	I－9	石鏃	2.04/1.48/0.51	0.9	黒曜石		
23	62	I区一括	煙管・吸口	長さ7.1 直径0.8	26.2			
23	63	I区18土	土偶	2.9/2.6/4.2	26.2		明赤褐色　白色粒子・黒色粒子・長石	縄文中期　脚部

第４章　平成22年度調査の成果

第１節　調査の方法と基本層序

第１項　調査の方法

工事用道路建設に伴い行われた第２次調査は、第１次調査区域Ⅰ区～Ⅳ区に隣接することから、続けてⅤ区と調査区域を設定し行われた。調査面積は350㎡である。

調査の方法は、果樹の抜根後重機により表土を除去することから始め、第１次調査時に設定された一辺５ｍのグリッドをもとに設定した（第２図・第25図）。座標値については、Ｅ－12グリッドでＸ＝－43925ｍ（南北）、Ｙ＝19200ｍ（東西）となっている。標高は、調査区外側の２カ所に任意にベンチマークを設定し、Ｅ－９グリッド内で591.50ｍ、Ｇ－14グリッド内で591.70ｍを測る。

その後、人力による掘り下げ、精査、及び遺構・遺物の検出、記録を行い、全体が面的に掘り上がった状態でラジコンヘリにより鳥瞰及び俯瞰写真撮影を行った。

第２項　基本層序

Ⅴ区はほぼ東西方向に沿って設定された調査区であるが、調査区北側の一帯は果樹畑（桃）が階段状に広がっている（写真図版参照）。Ⅴ区は、北側からちょうど一段下がった土地区画になっているが、本来は現地表から数10㎝の高さをもちながら斜面を形成し、南側のⅠ区・Ⅱ区へと続いていたと見られる。

したがって、厚さ30㎝ほどの表土層（１層）を除去すると、ほどなく縄文時代中期を中心とした遺物包含層である暗褐色土（２層）、および２層よりややしまった暗褐色土（３層）になる（第25図）。さらに、調査区の中央から西側では３層はなく、浅いところで１層直下、調査区の西端でも１層・２層合わせて現地表下約50㎝ほどで地山のローム層（10層）が、花崗岩の巨礫を伴って確認された。この礫は、山体斜面の崩壊に伴うものと考えられ、北東から南西に向かって帯状に続いており、Ⅱ区においても確認されている。

２・３層の暗褐色土中からは、縄文時代中期中葉から後期初頭にかけての土器片と石器がわずかに出土しているが、調査区南西隅では中世の内耳土器片も出土している。

一方、調査区の東側は、東西に幅７～10ｍ、南北に長さ10ｍにわたって浅く谷状に落ち込んだ地形となっており、この部分において９層の土層の堆積が確認された。地表下約１ｍから、50㎝ほどの厚さで堅くしまった黒褐色土・黒色土が堆積しており（４～９層）、これらの土層中から縄文時代早期から前期にかけての土器片や黒曜石製・チャート製の石鏃などが出土するとともに、集石土坑が発見されており、当該時期のある段階は生活面であったことが考えられる。

第２節　発見された遺構と遺物

第１項　集石土坑

上記のとおり、Ⅴ区では調査区東側の谷部において縄文時代の集石土坑2基が発見された。いずれも４層～８層にかけての黒色土・黒褐色土に掘り込まれている。一方、谷部から西側の調査区は、縄文時代中期の土器片と石器がわずかに出土したのみで、遺構は確認されなかった。

１号集石土坑（第27図）

Ｆ－12グリッドのほぼ中央、谷部の西側斜面上に位置する。直径は東西で１ｍ、南北で1.1ｍの不整円形で、深さ35㎝の断面形がボール状の土坑に数㎝～18㎝大ほどの礫が充填されており、底面には20㎝四方ほどの扁平な礫が２点敷かれていた。焼土は見られなかったが、炭化材の小片がわずかに確認され、礫は熱を受けているものが多く、割れているものも見られた。土坑内からの出土遺物はなかったが、東側の壁面からは炭化材がまとまって出土して

いる。この分析結果については付編１に詳しく記載してあるが、ＡＭＳによる年代測定の結果では、炭化材からは縄文時代前期後葉頃の年代値が得られており、これは周囲から出土した土器片の年代観よりも新しいものである。

２号集石土坑（第27図）

Ｇ－13グリッドの北西コーナーからＧ－12グリッドにかかり、谷部の底から東側斜面上に位置する。確認面は１号集石土坑よりやや低く、掘り込みも皿状で浅い。平面規模も１号集石土坑よりやや小さく、直径80㎝、深さ10㎝ほどの円形の土坑であったが、１号集石土坑よりやや大きめの５～20㎝大ほどの礫が充填されており、被熱痕が見られた。この土坑内からも出土遺物はなく、周辺からも出土はほとんどないが、１号集石土坑と同時期のものであろう。

第２項　出土遺物

第２次調査では、出土した遺物については全点を記録し取り上げたところ、谷部を中心に土器片が204点、原石や石核・剥片等を含む石器31点が出土したが（第26図）、これらのうち土器111点、石器６点の計117点について実測を行った（第28～31図）。

出土した縄文土器片は、早期中頃から後半にかけての押型文土器と、野島式土器に併行する富士吉田市古屋敷遺跡早期第Ⅳ群のものが中心であり、条痕文系土器も含まれていた。特に、Ｆ－12グリッドの１号集石土坑周辺からＧ－12グリッドにかけてかなりまとまって出土している。詳細は観察表（第５・６表）に記載してあるが、ここでは主なものについて概観しておく。

１～26は押型文土器で、１～９は山形押型文土器、10～26は楕円押型文土器である。27～34は条痕文系土器で、31～34は表裏条痕が確認でき、胎土に繊維を含む。35～96は古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器に対比できるもので、36～56は縄文を施したもの、57～65は縄文に沈線文・刺突文の見られるもの、67～96は無文のものである。66は鵜ヶ島台式に比定される。いずれも胎土に繊維や金色の雲母を含むものが多い。なお、57と75の外面には圧痕があり、この同定結果については付編２に記載してある。97・98は浅鉢で、特に97の出土した層位は８層から９層にかけてであるが、集石土坑も含め上層から遺構が掘り込まれていた可能性がある。赤彩が施されており、口縁部に孔列は確認できないが、内湾する形態であることから、集石土坑の年代を考慮して前期諸磯ｂ式段階のものとしておきたい。ただし、焼成前の赤彩とみられ、今後型式を含め、系譜には検討を要する。99～110については、表土下の暗褐色土中から出土したものである。時期不明なものもあるが、縄文中期を中心としたもので、101は北陸新崎式の系譜をもつもの、103～109は曽利式、110は後期称名寺式のものである。また、111は中世の内耳土器片である。

石鏃（112～117）について、114はチャート製、他は黒曜石製である。

第４節　まとめ

第２次調査では、設定された調査区のうち実質的な調査は東側半分であり、発見された遺構も集石土坑２基のみであったが、浅い谷部が埋没する過程で、縄文時代早期後半から前期にかけての生活面が存在したことが確認できた。それはまた、周辺に当該期の生活址の中心が存在する可能性を示唆しているものであろう。

谷部から出土した土器は、いずれも破片資料であったが、既に述べてきたように縄文早期野島式土器併行期の在地の土器「古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器」を中心とするものであり、第１次調査の資料と合わせ当該期の新たな資料を提供するとともに、今後甲府盆地内でのさらなる増加を予測させるものである。

また、１号集石土坑内から出土した炭化材のＡＭＳ年代測定では、縄文時代前期後葉頃を示す年代値が得られている。これは、当初想定されていた年代より新しいものであるが、集石土坑が確認された面と、実際に掘り込まれた面を考慮すれば、周辺から出土した早期土器とも矛盾はないものと思われる。一方では、ダイズ属の植物圧痕土器が発見されたことにより、縄文時代早期から前期にかけての植物利用の様相が新たな視点で確認された意義は大

きいものといえる。今後の研究がさらに期待される。

今回の第１次・第２次調査において、御坂中丸遺跡の範囲の南西端の調査が行われたことになるが、第１次調査と同様に縄文時代早期の土器片が出土したことは、御坂峠を介した甲府盆地と郡内地域との交流をうかがわせるとともに、この地域が後の古代官道へとつながる一帯であったことが想定される。

参考文献

阿部芳郎 1990『古屋敷遺跡発掘調査報告書』富士吉田市史編纂室・古屋敷遺跡発掘調査団

阿部芳郎・堀内真 1998「第２章 発見された市内の遺跡　第２節 古屋敷遺跡」『富士吉田市史』資料編第1巻自然・考古　富士吉田市

小野正文 1999「２　縄文時代の編年（３）早期」『山梨県史』資料編２原始・古代２　山梨県

松田光太郎 1998「東関東における縄文前期後半の浅鉢形土器に関する考察－浮島・興津式土器に属する浅鉢形土器を対象として－」『神奈川考古』第34号　神奈川考古同人会

第５表　Ｖ区出土土器観察表（色調名は農林水産省技術会議事務局監修 1998『新版標準土色帖』21版による）

図版	No.	出土地点	注記No.	種別	時期	器種	口/底/高（㎝）	文様・調整	色調	胎土	備考
28	1	F－12	P161	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 2.5YR4/8	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	2	F－12	P172	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	3	F－12	P104	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	4	F－12	P200	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	にぶい赤褐色 5YR4/4	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	5	F－12	P224	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	にぶい赤褐色 5YR4/4	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	6	E－12	P39	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	7	G－12	P128	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	8	F－12	P170	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	9	F－12	P74	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 5YR4/8	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	10	E－13	P63	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・金色雲母	押型文土器
28	11	F－13	P81	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子	押型文土器
28	12	G－12	P218	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 5YR5/6	白色粒子	押型文土器
28	13	E－12	P194	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	にぶい赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色雲母	押型文土器
28	14	F－12	P201	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子	押型文土器
28	15	E－12	P195	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母	押型文土器
28	16	E－12	P67	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 5YR5/6	白色粒子	押型文土器
28	17	F－12	P178	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・黒色粒子・金色雲母	押型文土器
28	18	F－12	P164	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・黒色粒子	押型文土器
28	19	F－12	P180	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母	押型文土器
28	20	F－12	P173	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	21	G－12	P237	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色粒子・金色雲母	押型文土器
28	22	E－12	P146	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器

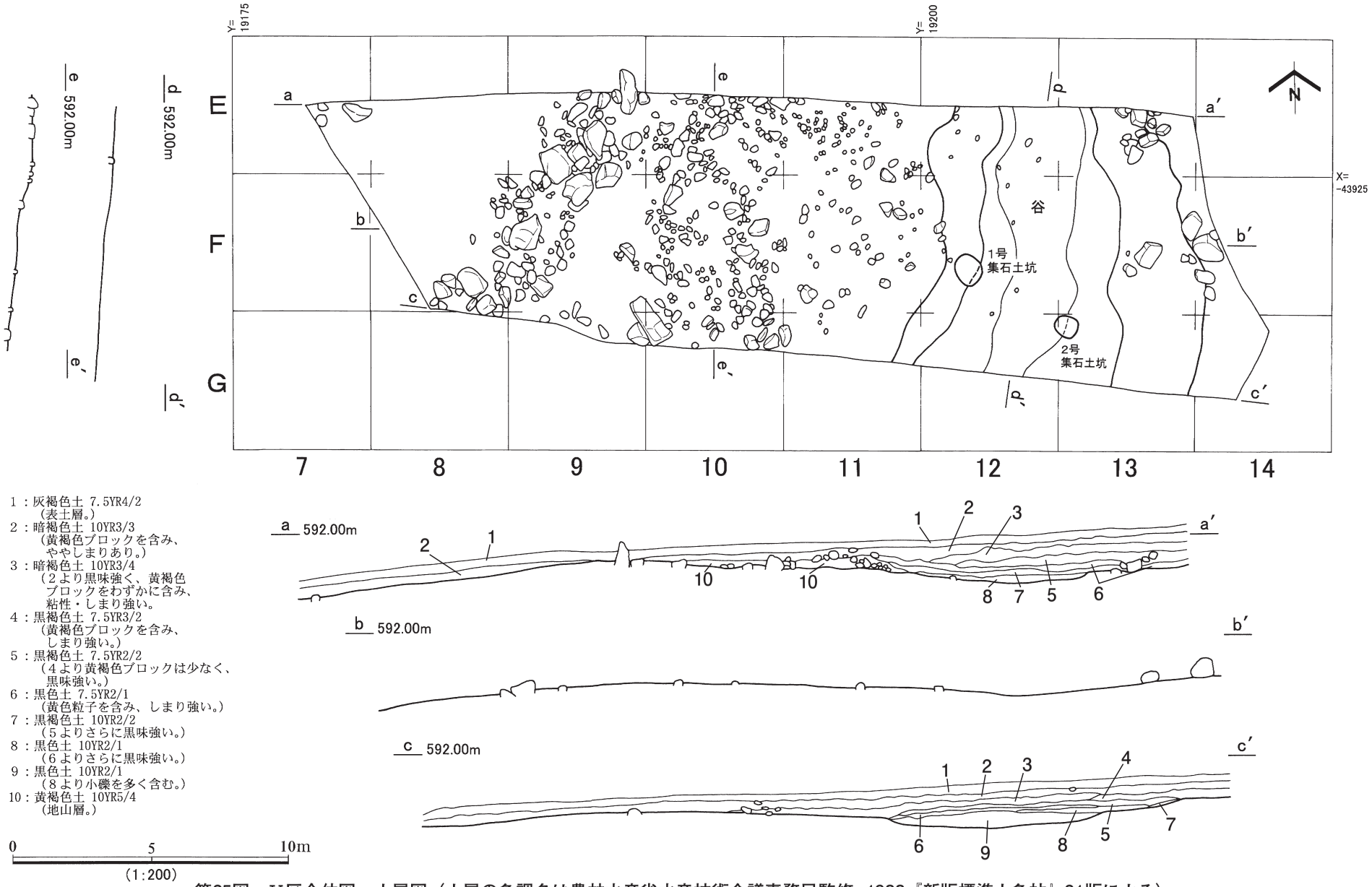
図版	No.	出土地点	注記No.	種別	時期	器種	口/底/高（㎝）	文様・調整	色調	胎土	備考
28	23	F－12	P238	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	24	F－12	P197	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/8	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	25	G－13	P4	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	26	G－12	P228	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	大粒の楕円押型文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色粒子	押型文土器
28	27	G－11	P214	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—/—	条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	条痕文系土器
28	28	G－11	P212	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—/—	条痕文	褐色 10YR4/4	白色粒子・金色雲母	条痕文系土器
28	29	F－14	P1	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—/—	条痕文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母	条痕文系土器
28	30	E－12	P41	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—/—	条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	条痕文系土器
28	31	E－12	P53	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—/—	表裏条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	条痕文系土器
28	32	F－12	P92	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—/—	表裏条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	条痕文系土器
28	33	F－12	P29	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—/—	表裏条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	条痕文系土器
28	34	G－12	P221	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—/—	表裏条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	条痕文系土器
29	35	F－12	P80	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 10YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	36	G－12	P130	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	にぶい赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	37	F－12	P126	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	明褐色 7.5YR5/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	38	G－11	P113	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/4	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	39	G－12	P236	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 10YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	40	G－12	P222	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	暗赤褐色 5YR3/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	41	F－12	P156	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	オリーブ褐色 2.5Y4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	42	G－12	P151	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文、内面に炭化物付着	暗褐色 7.5Y3/3	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	43	E－12	P50	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	黄褐色 10YR5/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	44	G－12	P149	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	明褐色 7.5YR5/6	白色粒子・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	45	F－12	P22	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	46	G－12	P132	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 10YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	47	E－12	P145	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	48	F－12	P79	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	49	F－11	P101	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	50	G－13	P192	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	51	F－12	P140	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	52	G－12	P217	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	明褐色 7.5YR5/8	白色粒子・黒色粒子・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	53	E－12	P54	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	明褐色 7.5YR5/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	54	F－12	P157	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	55	E－12	P47	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	56	F－12	P31	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・黒色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器

図版	No.	出土地点	注記No.	種別	時期	器種	口/底/高（㎝）	文様・調整	色調	胎土	備考
29	57	G－12	P216	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文、沈線文、外面に植物圧痕	褐色 10YR4/4	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器、分析No.NKM01
29	58	F－12	P205	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文、沈線文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	59	E－12 F－12	P91・144・204・206	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文、沈線文、刺突文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	60	G－12	P220	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	刺突文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	61	F－13	P138	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	刺突文、内面条痕文	褐色 10YR4/6	白色粒子	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	62	F－12	P185	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	刺突文、沈線文、内面条痕文	褐色 10YR4/6	白色粒子	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	63	E－13	P64	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	刺突文、沈線文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	64	F－12	P143	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	刺突文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	65	F－12	P135	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	単節縄文、沈線文	褐色 7.5YR4/4	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
29	66	F－12	P225	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	沈線文、竹管文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色雲母	鵜ヶ島台式
30	67	G－13	P137	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 2.5YR4/3	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	68	F－12	P166	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黒色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	69	F－12	P183	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	70	G－12	P153	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい橙色 7.5YR5/3	白色粒子・黒色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	71	F－12	P174	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	赤褐色 5YR4/8	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	72	G－12	P231	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	73	E－12	P40	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・黒色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	74	F－12	P21	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい橙色 7.5YR6/4	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	75	F－12	P35	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文、外面に圧痕	にぶい褐色 7.5YR4/2	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器、分析No.NKM02
30	76	G－11	P117	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	橙色 2.5YR6/8	白色粒子・黒色粒子	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	77	E－12	P52	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	78	E－12	P56	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR4/3	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	79	G－12	P235	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	80	E－13	P62	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR5/4	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	81	E－12	P55	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	82	E－13	P65	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	83	G－11	P240	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	84	F－12	P241	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR4/3	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	85	E－12	P58	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	橙色 5YR6/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	86	F－12	P177	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	87	G－11	P112	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	88	F－12	P202	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	89	G－12	P242	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR4/3	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	90	F－12	P176	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい橙色 7.5YR5/4	白色粒子・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器

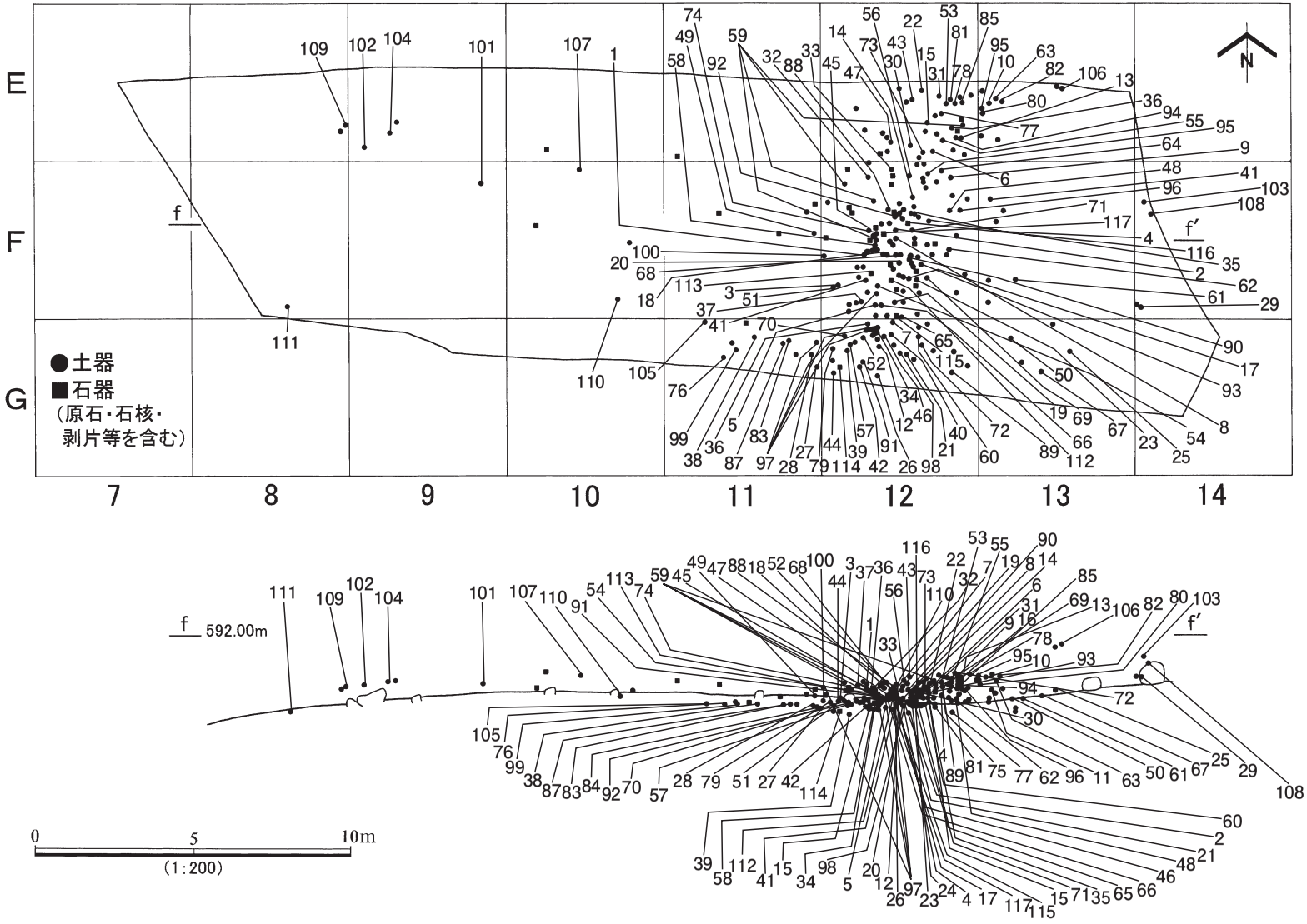
図版	No.	出土地点	注記No.	種別	時期	器種	口/底/高（㎝）	文様・調整	色調	胎土	備考
30	91	G－12	P152	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	92	F－12	P142	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	93	F－12	P208	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・金色雲母	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	94	E－12	P69	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	95	E－13	P61	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
30	96	F－12	P78	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	—/—/—	無文	にぶい赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・繊維	古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器
31	97	F－12・G－11・12	P129・141・148・154・213	縄文土器	縄文前期後葉	浅鉢	22.0/—/—	外・内面ともミガキ、赤彩	赤褐色 2.5YR4/8	白色粒子	諸磯ｂ式、反転実測
31	98	G－12	P134	縄文土器	縄文前期後葉	浅鉢	—/—/—	単節縄文、外面赤彩	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・金色雲母	諸磯ｂ式
31	99	G－11	P116	縄文土器	縄文中期初頭か	深鉢	—/—/—		にぶい赤褐色 2.5YR4/4	金色雲母	
31	100	F－12	P103	縄文土器	縄文中期初頭か	深鉢	—/—/—	沈線文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色粒子	
31	101	F－9	P196	縄文土器	縄文中期初頭	深鉢	—/—/—	蓮華文	暗赤褐色 2.5YR3/4	白色粒子・金色雲母	新崎式系
31	102	E－9	P120	縄文土器	縄文中期中葉か	深鉢	—/—/—	隆帯	にぶい褐色 7.5YR5/4	白色粒子	
31	103	F－14	P84	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	—/—/—		にぶい褐色 7.5YR5/4	白色粒子・黒色粒子	曽利Ⅱ式
31	104	E－9	P121	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	—/—/—	条線文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・金色雲母	曽利Ⅲ式
31	105	G－11	P118	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	—/—/—	渦巻文、刺突文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子	曽利Ⅲ式
31	106	E－13	P86	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	—/—/—	条線文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子	曽利Ⅲ式
31	107	F－10	P108	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	—/—/—	条線文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子	曽利Ⅲ式
31	108	F－14	P85	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	—/—/—	渦巻文、条線文	にぶい赤褐色 7.5YR5/4	白色粒子	曽利Ⅲ式
31	109	E－8	P123	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	—/9.4/—		橙色 5YR6/6	白色粒子・金色雲母	曽利Ⅲ式、反転実測
31	110	F－10	P111	縄文土器	縄文後期初頭	深鉢	—/—/—	縄文、沈線文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子	称名寺Ⅰ式
31	111	E－8	P125	土師質土器	戦国時代	内耳土器	—/—/—	外・内面指頭圧痕、爪形文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・金色雲母	胴部下破片

第６表　Ⅴ区出土石器観察表

図版	No.	出土地点	注記No.	分類	長/幅/厚（㎝）	重さ（ｇ）	石材	時期	備考
31	112	F－12	S19	石鏃	1.2/1.2/0.2	0.2	黒曜石	縄文早期～前期	
31	113	F－12	S158	石鏃	1.4/1.2/0.5	0.5	黒曜石	縄文早期～前期	
31	114	G－12	S215	石鏃	1.6/1.2/0.2	0.4	チャート	縄文早期～前期	
31	115	F－12	S234	石鏃	1.8/1.5/0.4	0.7	黒曜石	縄文早期～前期	
31	116	F－12	S198	石鏃	1.7/1.4/0.4	0.7	黒曜石	縄文早期～前期	
31	117	F－12	S169	石鏃	2.8/1.7/0.5	1.4	黒曜石	縄文早期～前期	

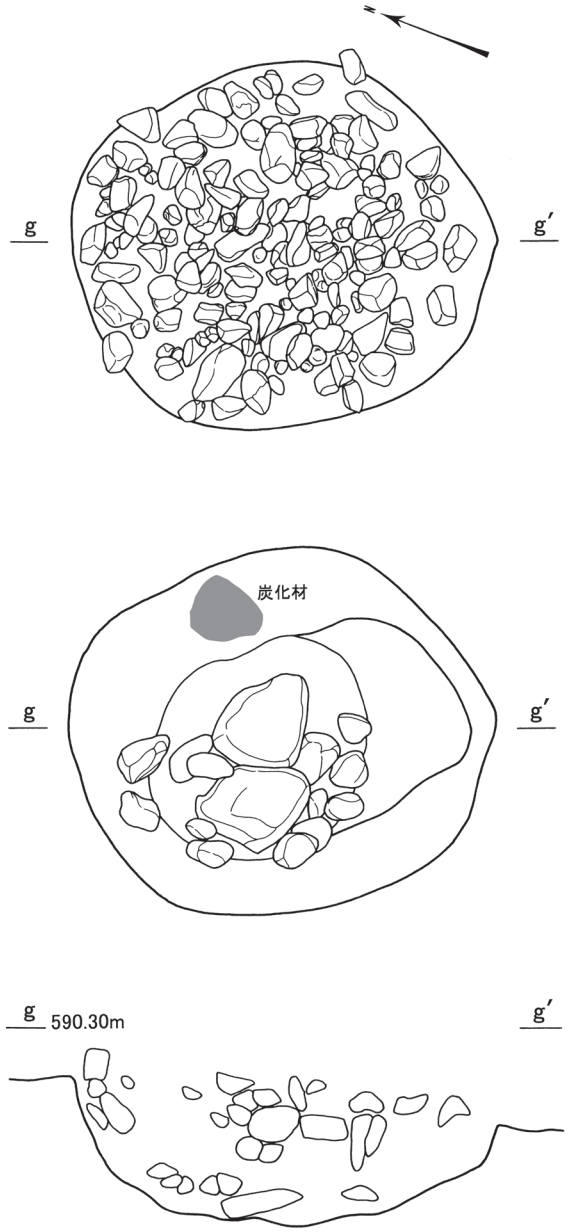


第25図　Ⅴ区全体図・土層図（土層の色調名は農林水産省水産技術会議事務局監修 1988『新版標準土色帖』21版による）

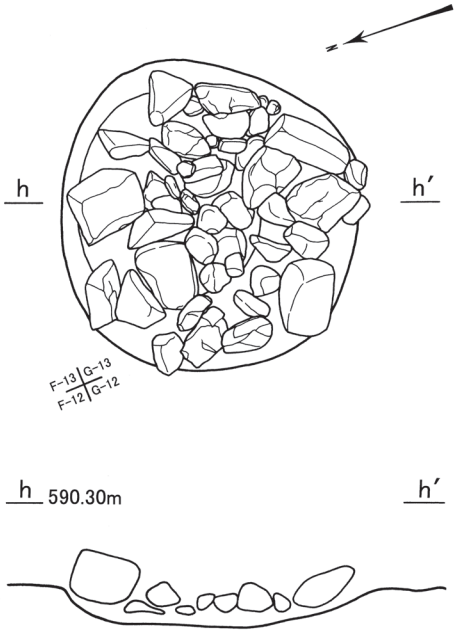


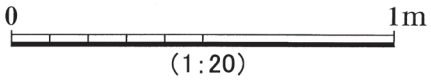
第26図　Ⅴ区出土遺物分布図

1号集石土坑

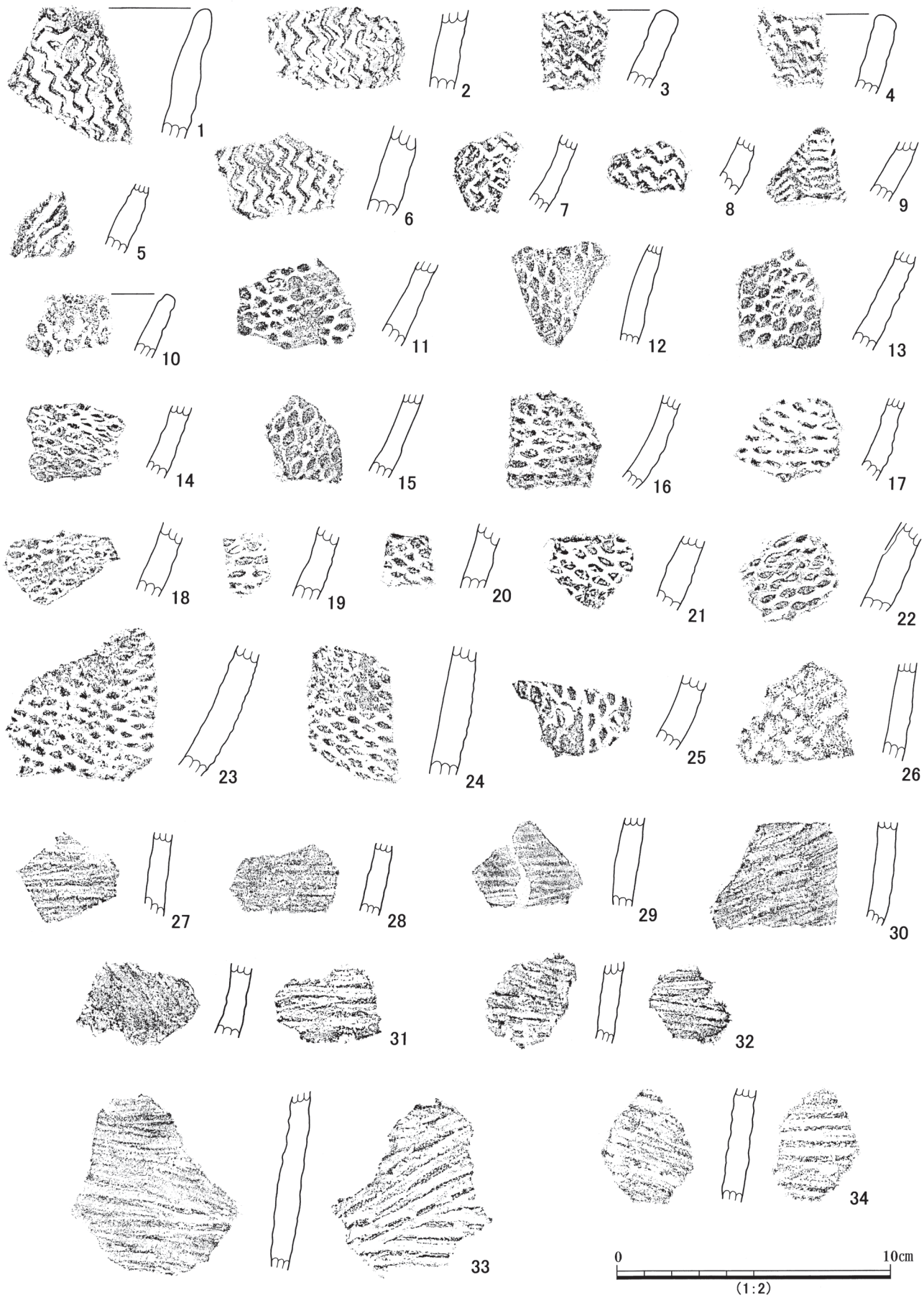


2号集石土坑

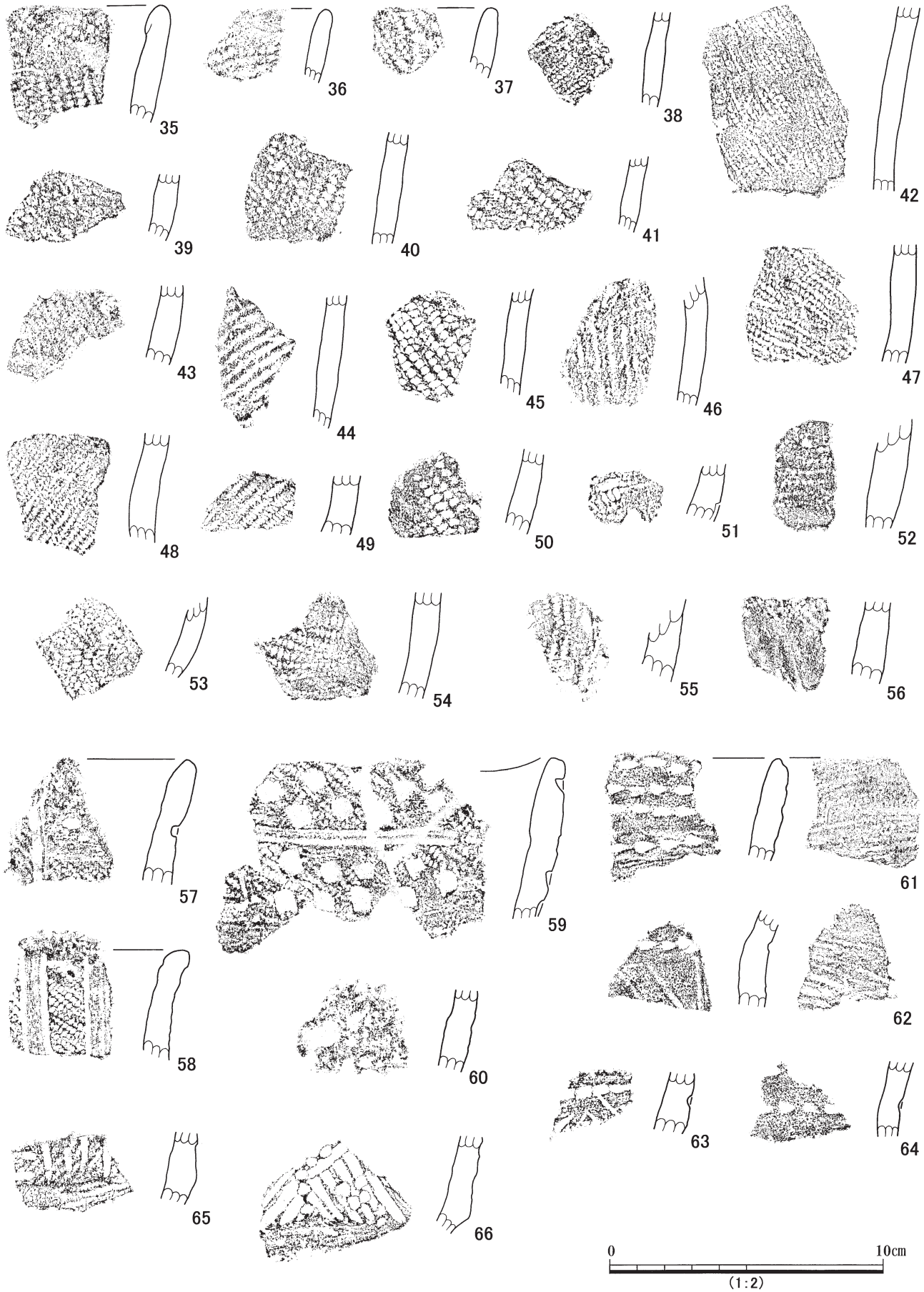




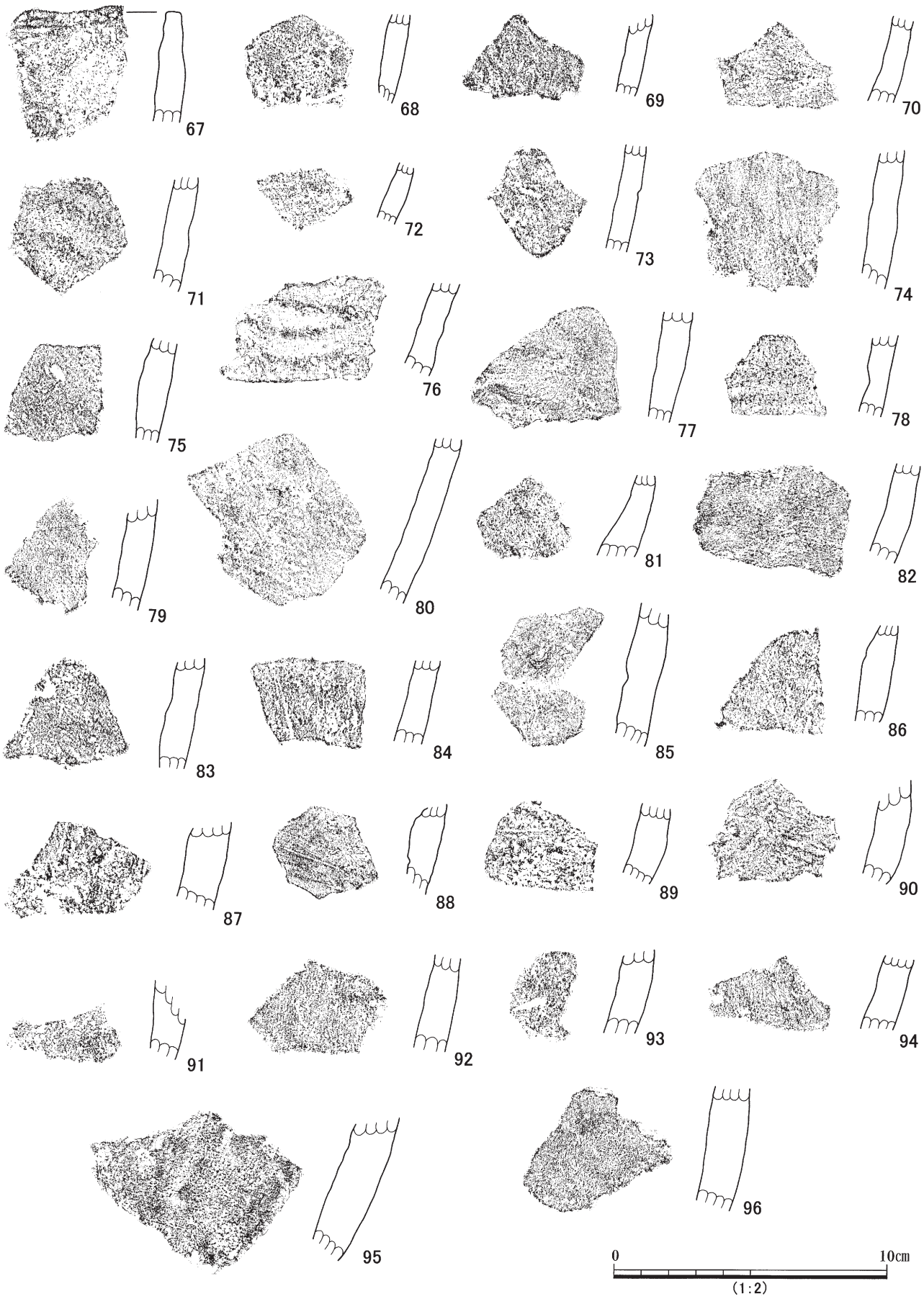
第27図　Ⅴ区第１・２号集石土坑平・断面図



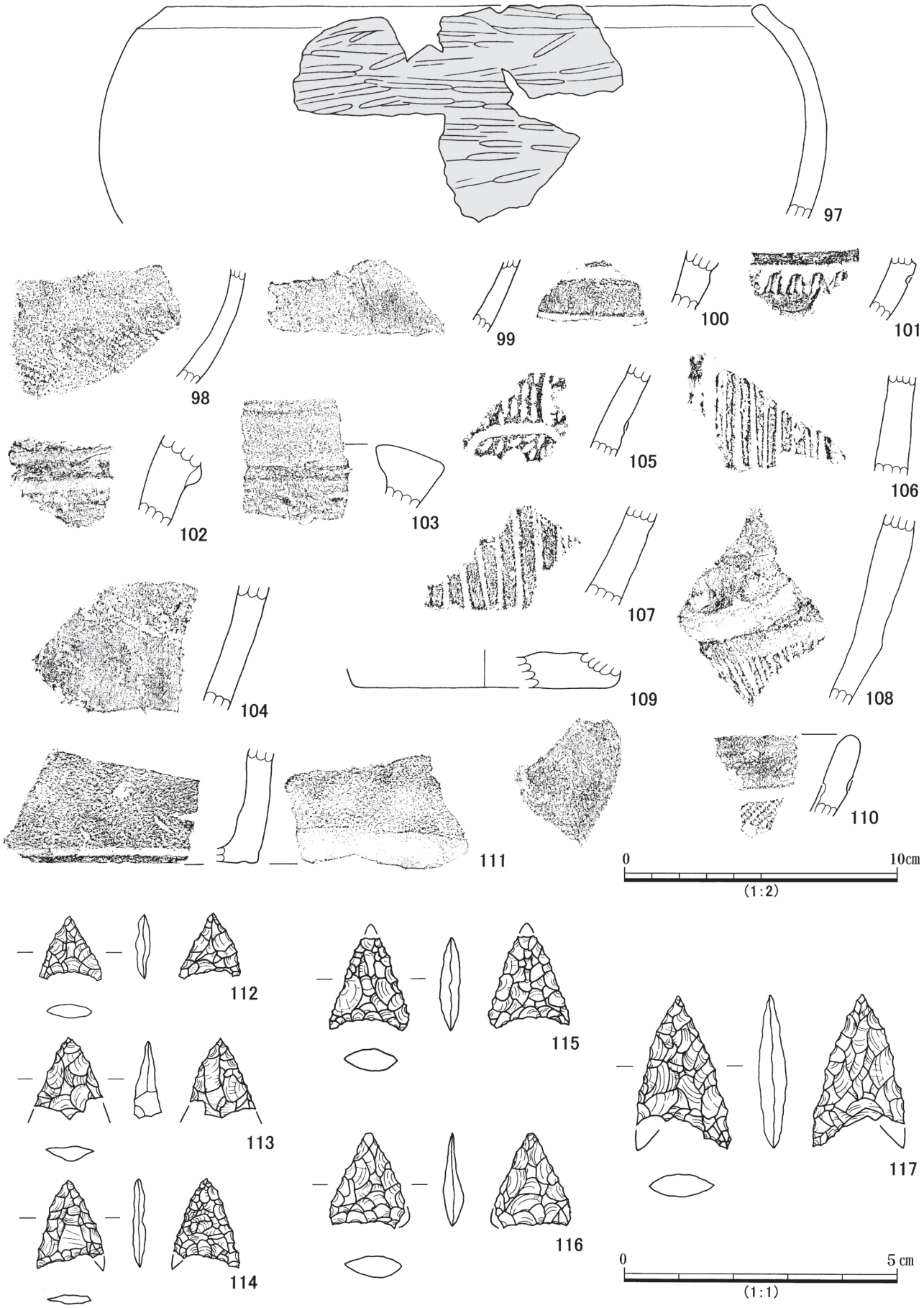
第28図　Ⅴ区出土土器実測図（1）



第29図　Ⅴ区出土土器実測図（２）



第30図　Ⅴ区出土土器実測図（3）



第31図　Ⅴ区出土土器実測図（4）・石器実測図（スクリーントーンは赤彩を表す）

付編１　御坂中丸遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）

株式会社　加速器分析研究所

１　測定対象試料

御坂中丸遺跡は、山梨県笛吹市御坂町上黒駒字中丸（北緯35°36′13″、東経138°42′42″）に所在し、御坂山地から流れ出る金川右岸の達沢山南西山麓に当たる標高591m前後の緩斜面上に立地する。測定対象試料は、Ｖ区１号集石土坑出土炭化材（No.1：IAAA-102972）１点である（表１）。この遺構は層位関係から縄文時代早期に属すると考えられている。

２　測定の意義

山梨県内では少ない縄文時代早期と見られる遺構と、周辺から出土している遺物の年代との整合性を確認する。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

３MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

Ｖ区１号集石土坑出土炭化材の^{14}C年代は4830±30yrBP、暦年較正年代（１σ）は3654～3537cal BCの間に２つの範囲で示され、縄文時代前期後葉頃に相当する年代値である。層位から考えられた縄文時代早期よりも新しい値となっている。

試料の炭素含有率は約70％の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）(AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC（%）
IAAA-102972	No.1	Ｖ区１号集石土坑　埋土１	炭化材	AAA	−26.03±0.66	4,830±30	54.81±0.21

［#4146］

表２

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-102972	4,850±30	54.70±0.19	4,829±30	3654calBC - 3632calBC (38.0%) 3561calBC - 3537calBC (30.2%)	3694calBC - 3682calBC (2.0%) 3664calBC - 3626calBC (44.2%) 3596calBC - 3526calBC (49.2%)

［参考値］

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19（3）, 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51（1）, 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51（4）, 1111-1150

なお、炭化材の樹種はクリ（ブナ科クリ属）に同定されているが、紙面の都合から樹種同定の分析方法および考察については、ここでは割愛させていただいた。

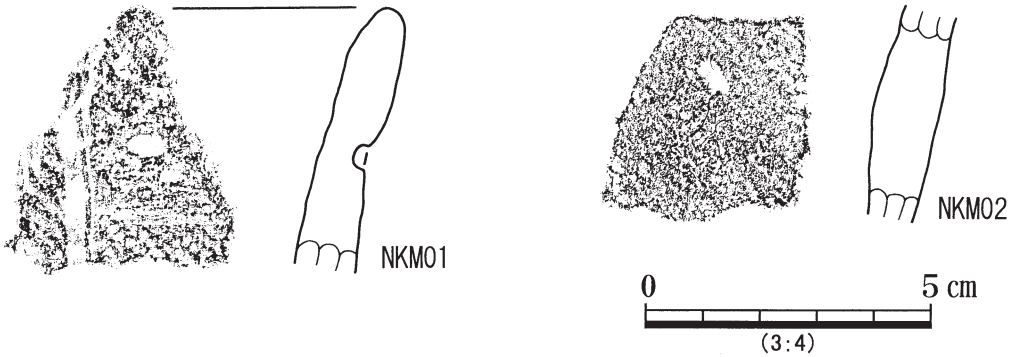
（小林健二）

付編２　御坂中丸遺跡の植物圧痕の同定

山梨県立博物館　中山　誠二

１　分析資料

今回分析を行った資料は、山梨県笛吹市御坂中丸遺跡から出土した縄文土器２点である（第１図）。これらの土器は、いずれもⅤ区１号集石土坑周辺から出土したもので、押型文系土器、条痕文系土器、野島式に併行する古屋敷遺跡第Ⅳ群（富士吉田市）などが主体であることから、縄文時代早期後半に位置づけられている。



第１図　中丸遺跡出土植物圧痕土器

２　分析手法

本調査では、縄文土器の表面に残された圧痕の凹部にシリコーン樹脂を流し込んで型取りし、そのレプリカを走査電子顕微鏡（SEM）で観察する「レプリカ・セム法」と呼ばれる手法を用いる。

作業は、①圧痕をもつ土器試料の選定、②土器の洗浄、③資料化のため写真撮影、④圧痕部分の実体顕微鏡での観察、⑤圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコーン樹脂の初期充填、⑥走査電子顕微鏡用の試料台に増粘剤を加えたシリコーンを載せ、初期充填を行った圧痕部分にかぶせ転写、⑦これを乾燥させ、圧痕レプリカを土器から離脱、⑧走査電子顕微鏡（ニコン製Quanta600）を用いて転写したレプリカ試料の表面観察、⑨現生試料との比較による植物の同定という手順で実施した。

なお、離型剤にはアクリル樹脂（パラロイドB－72）をアセトンで薄めた5％溶液を用い、印象剤には東芝シリコーンTSE350を使用した。

３　分析結果

（１）NKM01（第２図）

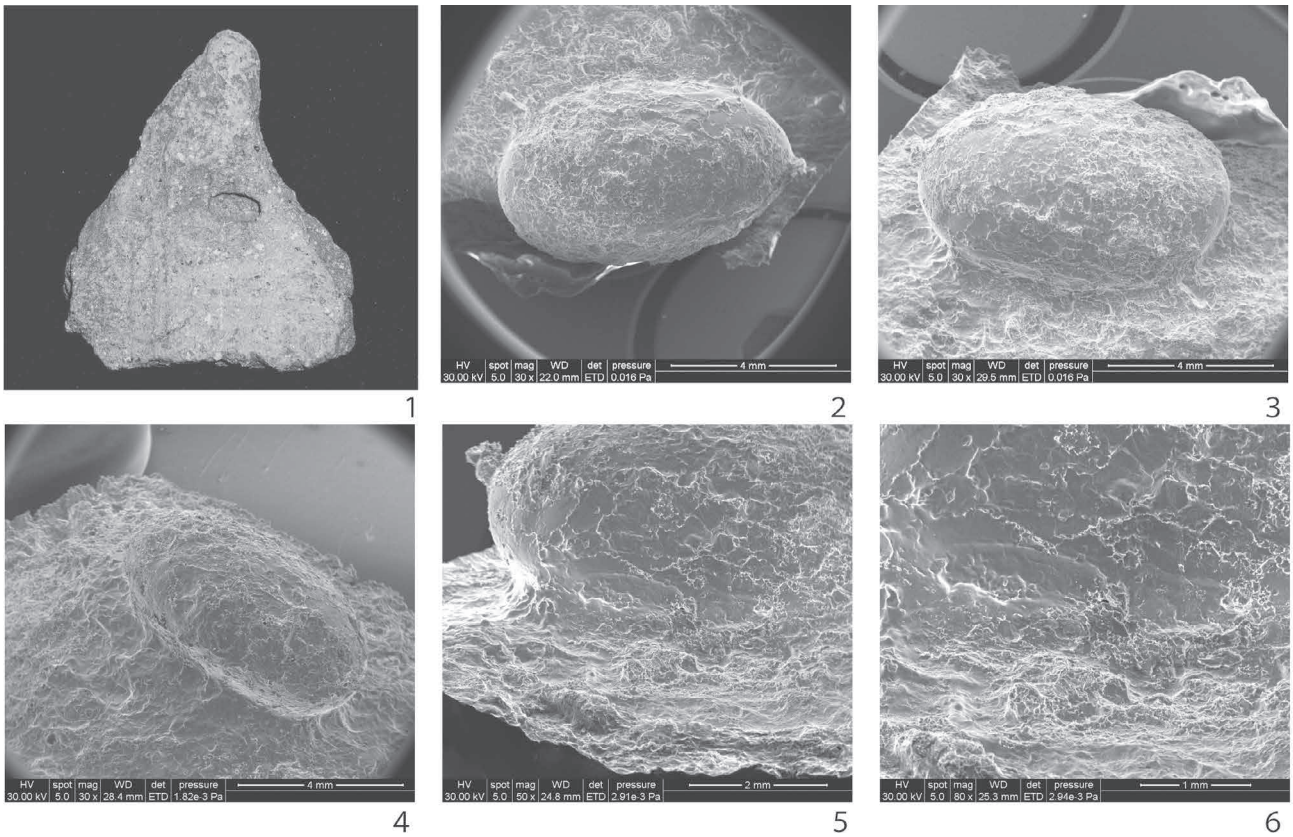
本試料は、長さ7.6㎜、幅4.8㎜、厚さ3.4㎜の扁平楕円形の植物種子圧痕である。種子のほぼ中央部分に長さ2.9㎜、幅0.7㎜の長楕円形の臍縁に囲まれた臍が確認される（第２図５・６）。臍は全体の３分の２程度が残存し、臍中央部には部分的ではあるが臍溝が長軸方向に認められ、露出型の臍を持つマメであることがわかる。全体の特徴や臍の形状からダイズ属*Genus Glycine*であることは疑いないが、大きさの点から野生のツルマメ*Glycine soja*であると判断した。

（２）NKM02

長さ7.25㎜、幅4.3㎜の圧痕であるが、植物以外の圧痕と考えられ、原型は不明である。

４　小結

縄文時代のダイズ属は、レプリカ法の圧痕研究の進展によって近年その存在が注目され、縄文時代中期中葉以降



NKM01　　1：土器写真　2～6：圧痕SEM画像

第２図　中丸遺跡のダイズ属圧痕

には野生種よりも明らかに大型化した栽培種と考えられる種実が増加し、ダイズが栽培化されている事実が明らかになってきている（中山2009a）。しかし、ダイズ属の利用の開始については、長野県山の神遺跡（縄文時代早期中葉；中沢2009）と山梨県天神遺跡（縄文時代前期後葉；中山他2009ｂ）の事例に限定され、国内においては極めて発見例が少ない。

今回、中丸遺跡から出土した縄文土器早期の圧痕は、両遺跡の中間に位置する時期に比定され、中部高地において野生ツルマメの利用の開始期と継続性を知る上で極めて貴重な情報を提示したといえる。

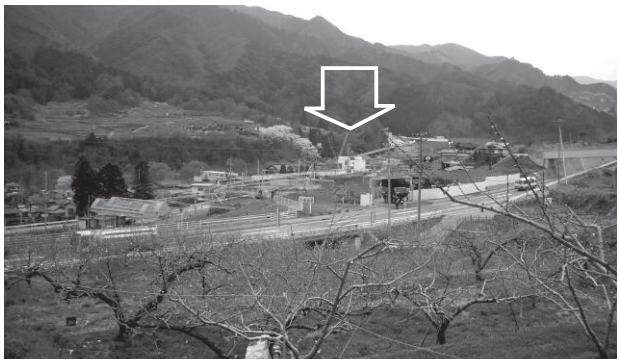
引用文献

中沢道彦　2009「縄文農耕論をめぐって－栽培種植物種子の検証を中心に－」『弥生時代の考古学５　食料獲得と生産』pp.228－246　同成社

中山誠二　2009a「縄文時代のダイズ属の利用と栽培に関する植物考古学的研究」『古代文化』61－3　pp.40-59　古代学協会

中山誠二・長沢宏昌・保坂康夫・野代幸和　2009ｂ「レプリカ・セム法による圧痕土器の分析３　－山梨県天神遺跡、酒呑場遺跡－」『山梨県立博物館研究紀要』３　pp.1－22　山梨県立博物館

写　真　図　版



遺跡遠望（矢印が調査対象地）

調査地より大栃山を望む

調査前の様子 1

調査前の様子 2

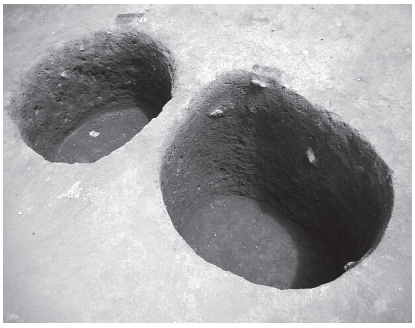
調査前の様子 3

第 2 ・ 3 号土坑

第 4 号土坑とピット

第 5 号土坑セクション

第 5 号土坑セクション

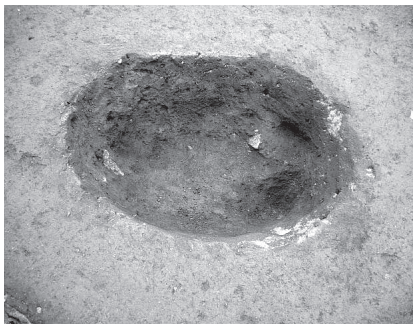


第 5 ・ 6 号土坑

第 7 号土坑

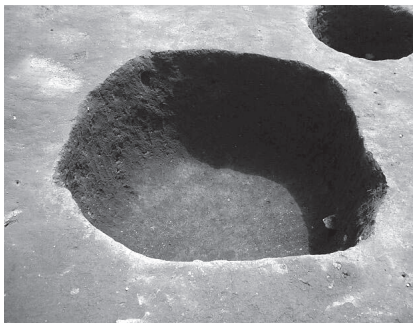
第 9 号土坑セクション

第 9 ・11号土坑



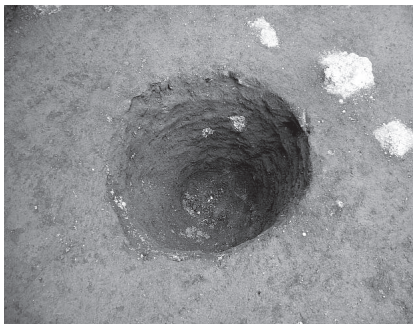
第12号土坑

第13号土坑セクション

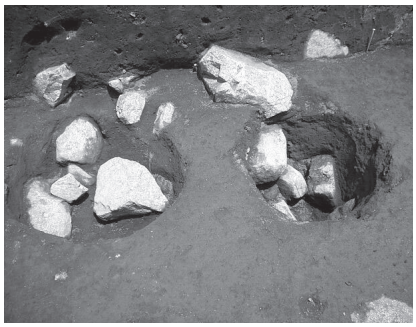

第13号土坑

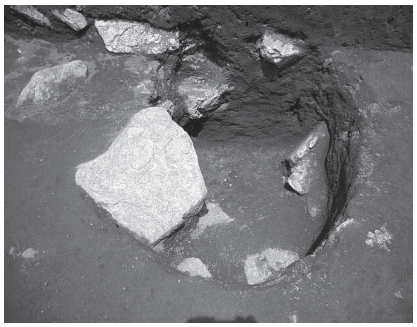
第14号土坑

第15・17号土坑


第16号土坑

第18・19号土坑


第20・21号土坑


第22号土坑

第23号土坑

第24号土坑

第25号土坑

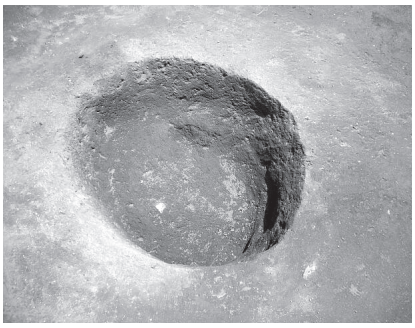
第26号土坑

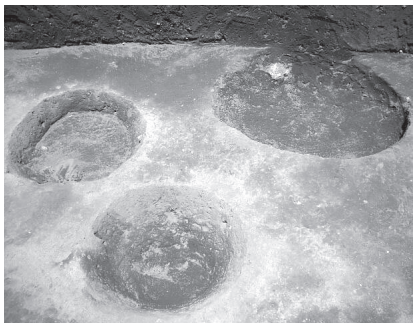
第27号土坑

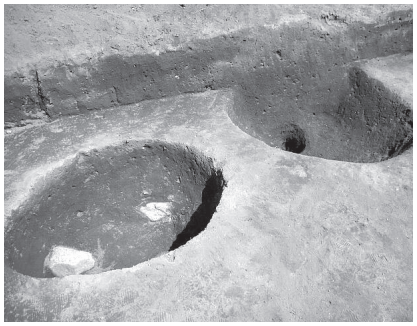
第28号土坑

第29号土坑

第30号土坑


第31号土坑


第32～34号土坑

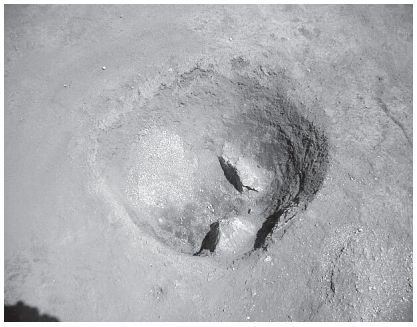

第35・36号土坑

第37号土坑

第38号土坑

第39号土坑

第40号土坑

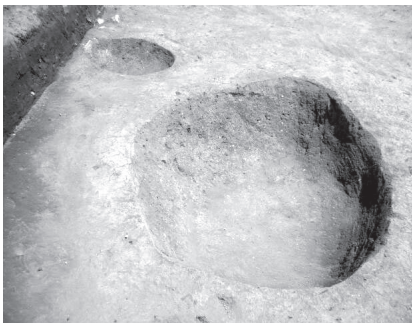

第41号土坑

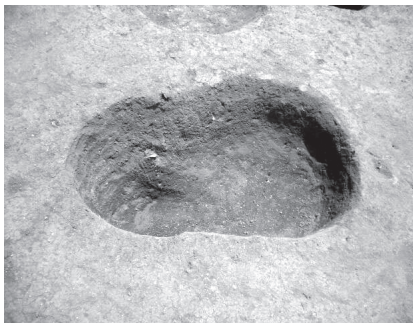
第42～45号土坑

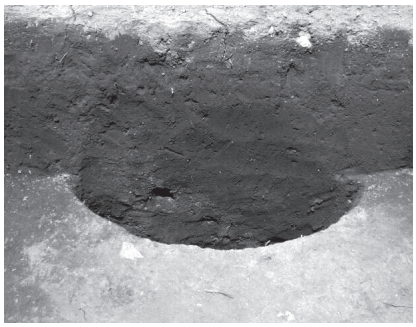
第46～48号土坑

第49・50号土坑とピット

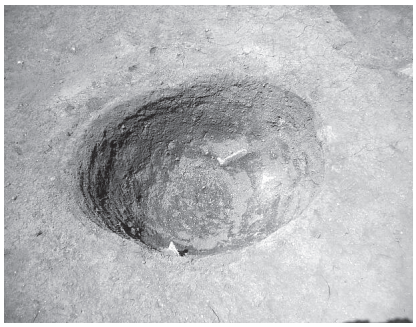
第51号土坑

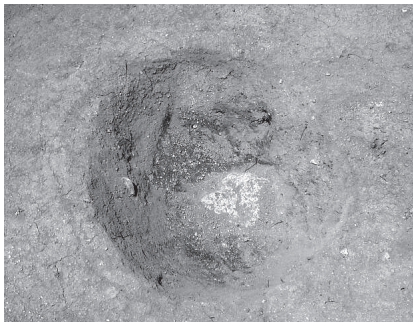

第52・54号土坑

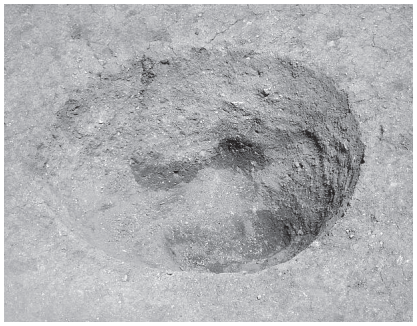

第53号土坑

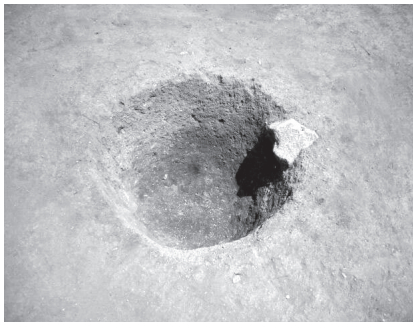

第55号土坑

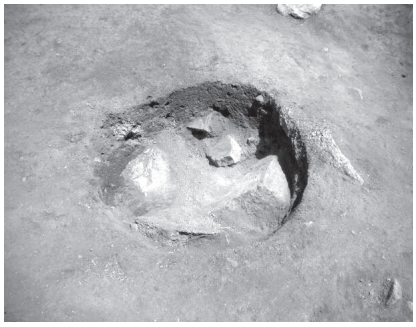
第56号土坑


第57号土坑

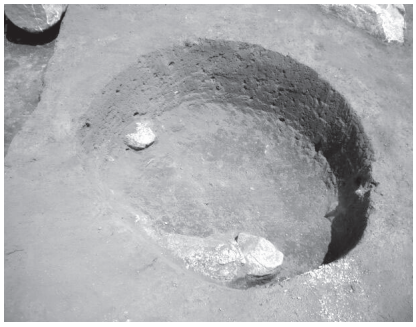

第58号土坑


第59号土坑

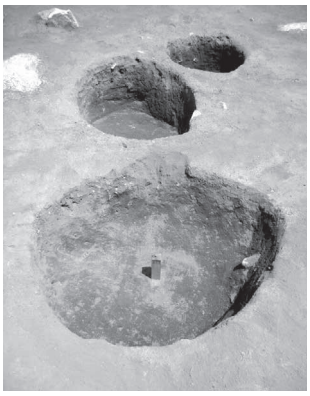

第60号土坑


第61号土坑

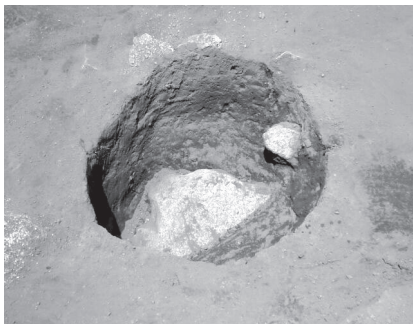
第62・63号土坑


第64号土坑

第65号土坑


第66～68号土坑

第69号土坑

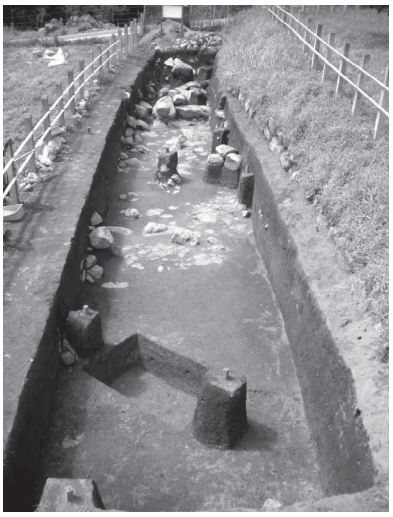

第70号土坑

第71号土坑

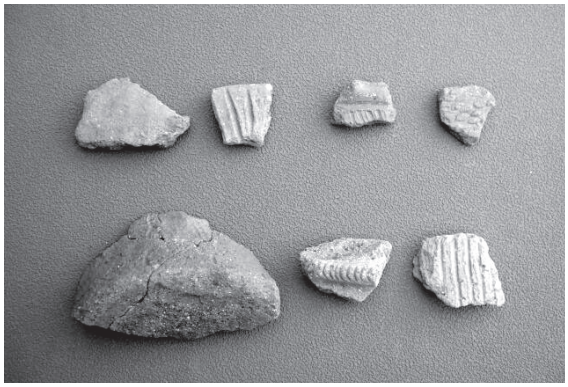
調査風景

第Ⅰ区完掘

第Ⅱ区完掘



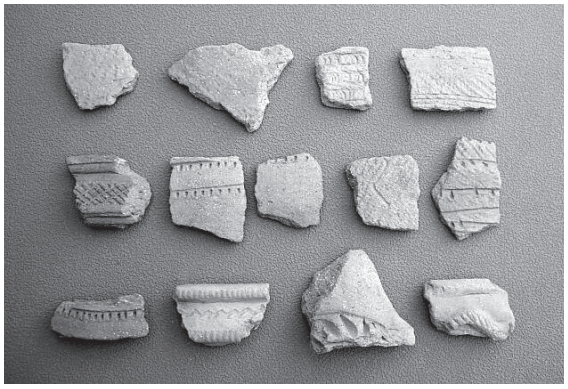
第Ⅲ区完掘



第３・４・６・７号土坑出土遺物

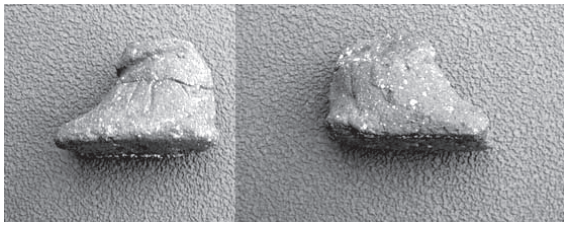
第９～70号土坑出土遺物

遺構外出土遺物No25～38（縄文早期）

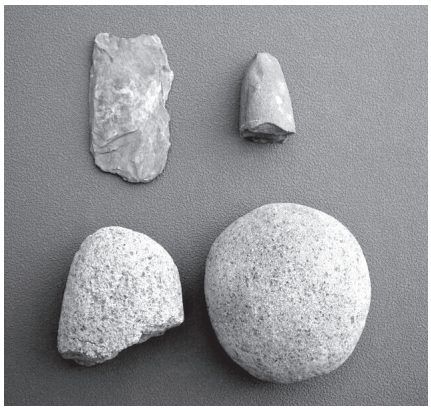


遺構外出土遺物No39～51

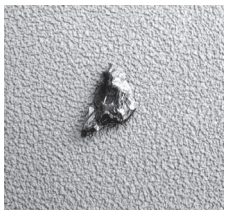
遺構外出土遺物No52～61



遺構外出土土偶

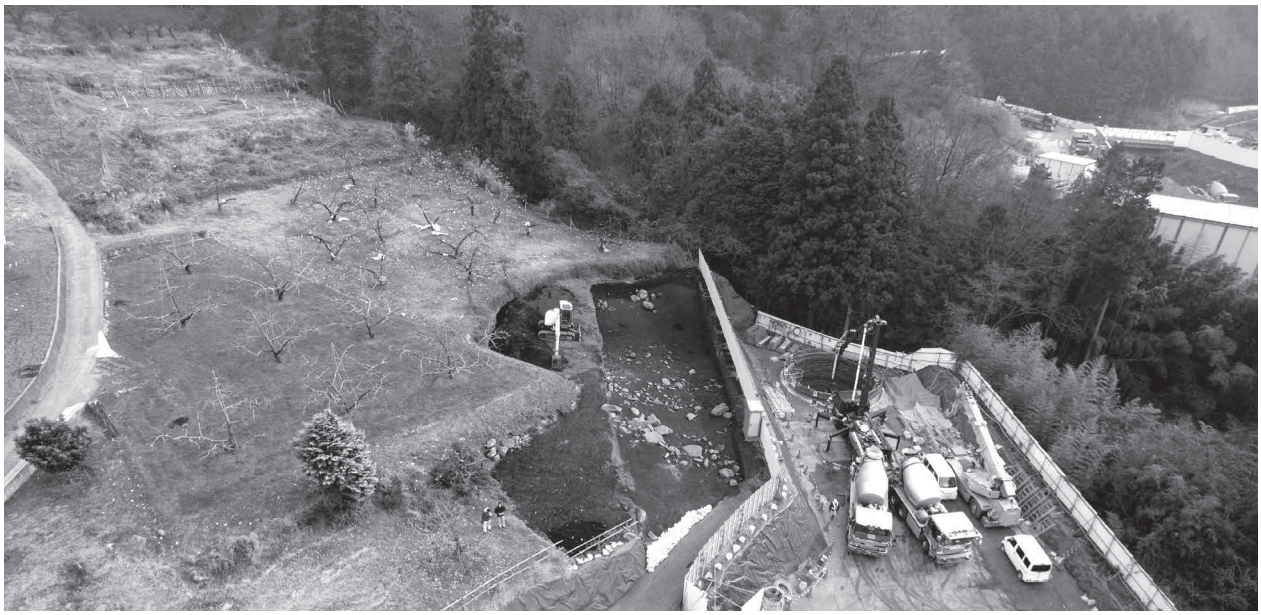


遺構外出土石器No１～４



遺構外出土
石器No５

遺構外出土遺物　煙管



Ｖ区遠景（西から）

Ｖ区調査前

Ｖ区表土剥ぎ

Ｖ区西側の調査風景

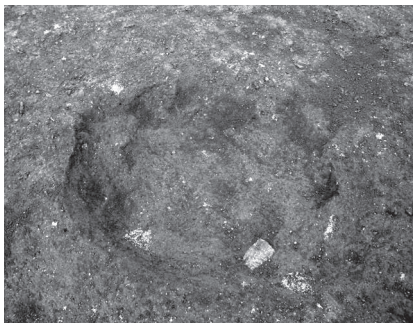
Ｖ区西側近景

Ｖ区１号集石土坑確認状況

Ｖ区１号集石土坑断面の状況

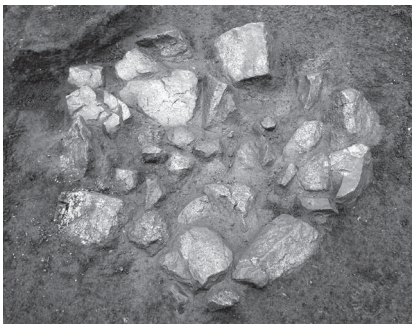
Ⅴ区１号集石土坑底部の状況

Ⅴ区１号集石土坑内の炭化材

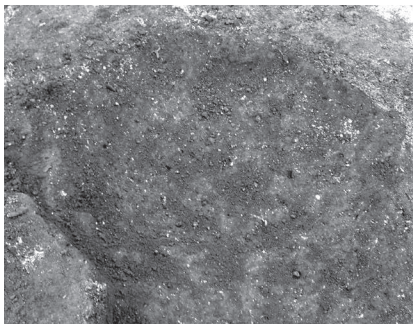


Ⅴ区１号集石土坑完掘状況

Ⅴ区２号集石土坑と層位



Ⅴ区２号集石土坑確認状況



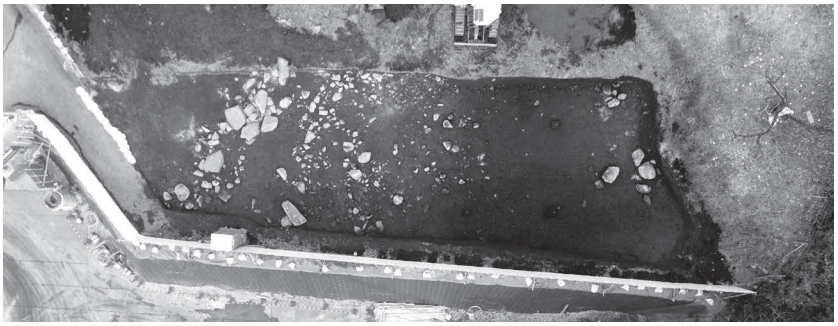
Ⅴ区２号集石土坑完掘状況

Ⅴ区谷部調査風景

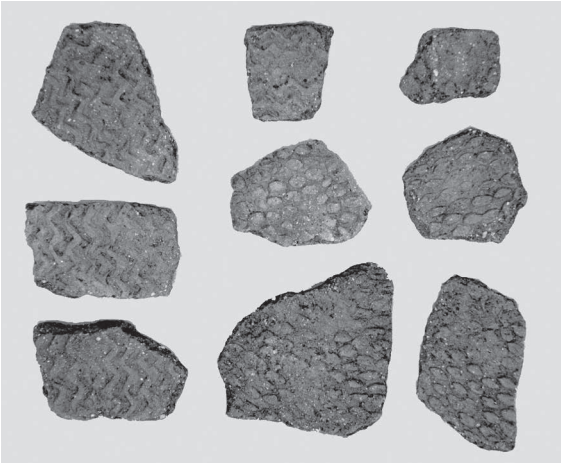
Ⅴ区谷部調査風景

Ⅴ区東側谷部（北から）

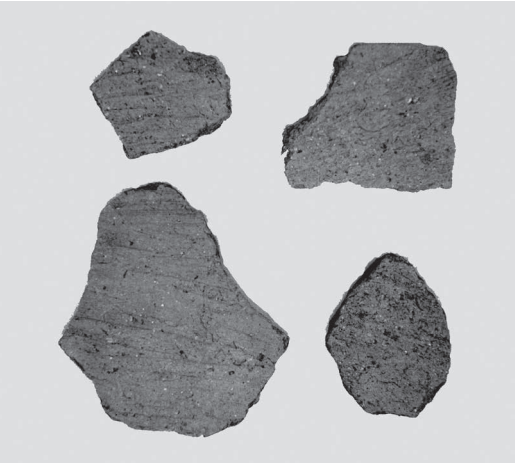
Ⅴ区縄文土器出土状況



Ⅴ区全景



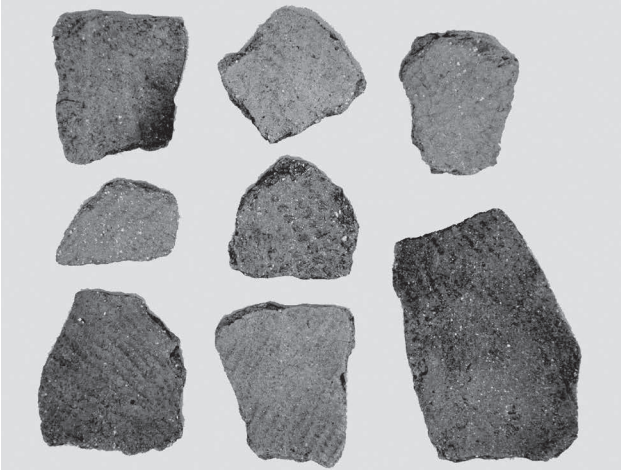
Ⅴ区出土縄文早期土器（押型文）



Ⅴ区出土縄文早期土器（条痕文系）

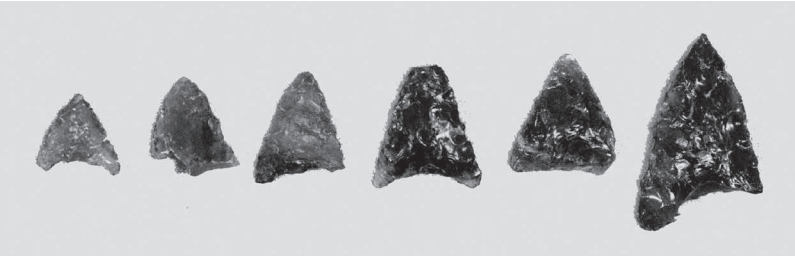
（鵜ヶ島台式土器）

（植物圧痕土器）



Ⅴ区出土縄文早期土器（古屋敷第Ⅳ群土器）

Ⅴ区出土縄文前期土器



Ⅴ区出土縄文時代石鏃

報　告　書　抄　録

ふりがな	みさかなかまるいせき
書名	御坂中丸遺跡
副題	山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第278集
著者名	吉岡弘樹・皆川賢司・小林健二・小林万里子・中山誠二
発行者	山梨県教育委員会、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400－1508　山梨県甲府市下曽根町923　TEL 055－266－3016
発行年月日	2011年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
御坂中丸遺跡（第１次）	山梨県笛吹市御坂町上黒駒地内	19201	御坂074	35°36′14″	138°42′41″	20090610～20090907	2,000	山梨リニア実験線建設
御坂中丸遺跡（第２次）	山梨県笛吹市御坂町上黒駒地内	19201	御坂074	35°36′13″	138°42′42″	20101201～20101227	350	山梨リニア実験線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御坂中丸遺跡	集落跡	縄文時代早期～中期	集石遺構･土坑･ピット	縄文土器・石器	縄文時代早期後葉の土器片がまとまって出土。植物圧痕（ダイズ属）も確認された。

要約	本遺跡の調査は山梨リニア実験線建設に伴い実施された。遺跡は御坂山塊から流れ出る金川右岸の緩斜面上に立地する。縄文時代中期を中心とする遺物包含層や集石遺構、土坑、ピットなどが多数検出された。遺物には縄文時代早期の在地の土器片（富士吉田市古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器）も多く含まれ、甲府盆地と郡内地域との交流をうかがわせる。

2011年３月18日　印刷
2011年３月25日　発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第278集

御坂中丸遺跡

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
　　甲府市下曽根町923
発　行　山梨県教育委員会
　　独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構
印　刷　株式会社ヨネヤ